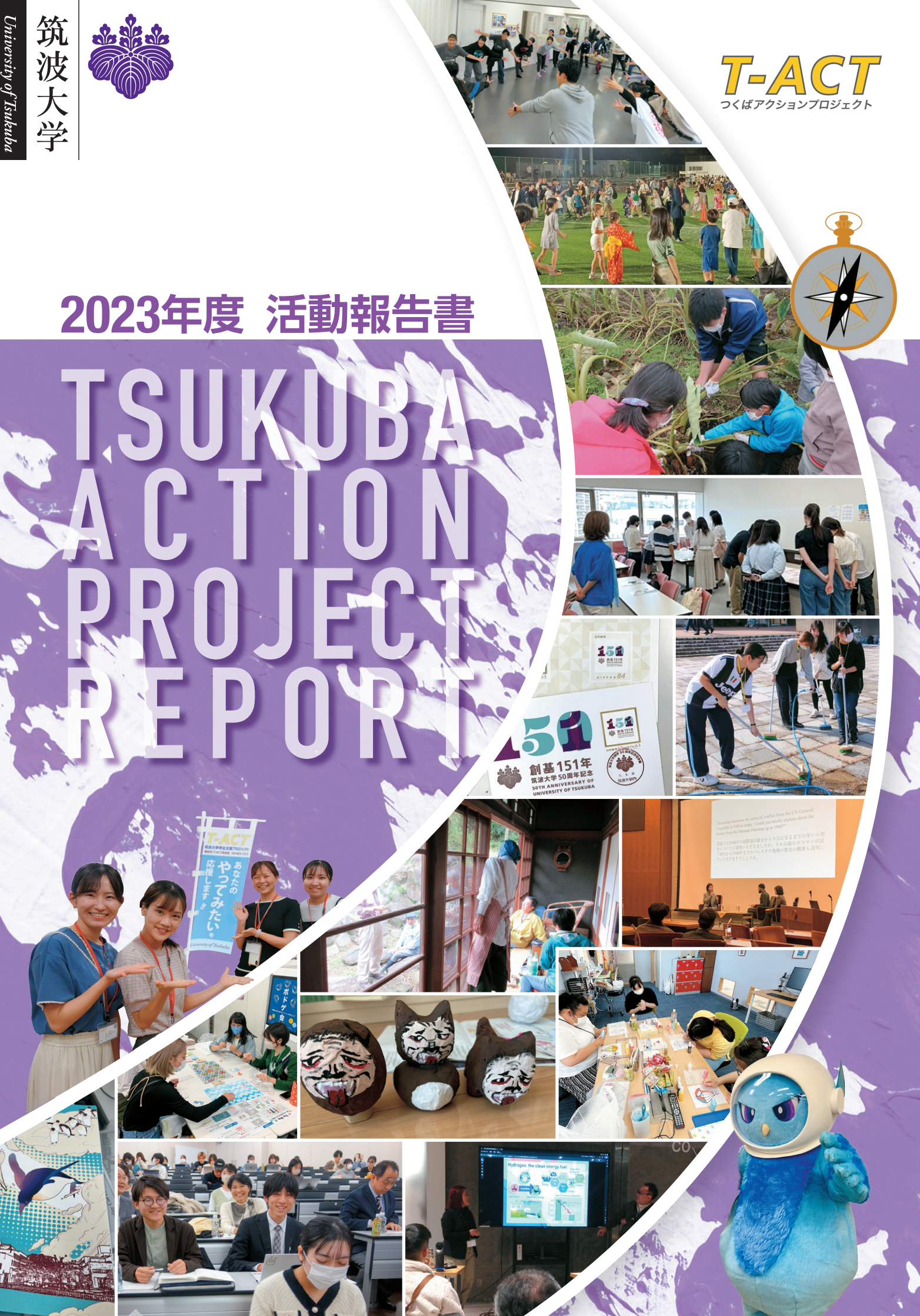
筑波大学
University of Tsukuba

T-ACT
つくばアクションプロジェクト

2023年度 活動報告書

TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT



目　次

はしがき

アクション / プラン

筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.0（22015A）…… 1

妖怪ワークショップ〜人面犬張り子を作ろう！〜 @現代怪異のふるさとつくば（22020A）…… 4

新編入生お助け隊 !! 〜広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ〜（22024A）…… 8

LGBTQ+ = ALLIES Salon（22026A）…… 15

都市伝説軍団　@現代怪異のふるさとつくば（22027A）…… 19

筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.1（23002A）…… 23

プレコンセプションケア　―「知る」ことは「守る」こと―（23006A）…… 27

「盆 LIVE」プロジェクト再始動！（23008A）…… 31

Medical Map for Foreigners（23009A）…… 36

【人工言語作成プロジェクト】人工言語勉強会！（23010A）…… 39

筑波大学お掃除大作戦！（23011A）…… 41

日韓みらいファクトリーアワード2023
（令和５年度日韓青少年対話型交流事業）（23013A）…… 44

第十四回 地理つくば（23015A）…… 50

障害者スポーツを通じて SDGs をもっと身近に〜その２〜（23016A）…… 55

サステナビリティーウィーク（23019A）…… 62

筑波大学かぶき會　第三場（第一回自主公演）
〜 TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAIDAISANBA 〜 The 3rd scene：The 1st independent performance 〜〜
（23020A）…… 65

パレスチナ・イスラエル問題について知ろう。
：Palestine-Israel Problem（パレスチナ・イスラエル問題）（23021A）…… 69

【ミュージカル】プロの講師から表現する楽しさを学ぼう！（23023A）…… 73

筑波大学 TY チャンネル第二期（22004P）…… 77

Science Cafe in English 英語でサイエンスカフェ（23004P）…… 79

ボランティア

「つちうらであそぼ・まなぼ」「Youth Challenge Project」 …… 83
「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用（21002V） …… 84
つくばこどもの青い羽根学習会（22003V） …… 85
NPO 法人チャリティーサンタつくば支部運営スタッフ／
当日ボランティア募集（22010V） …… 86
茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう（23002V） …… 87
学内の放置自転車を一緒に減らそう！プロジェクト（23010V） …… 88
小学生対象サイエンスツアー
工作実験教室と科学館見学のサポートスタッフ募集（23011V） …… 90
ボランティア参加者募集！T-ACT ×つくばボランティアフェスタ（23013V） …… 91
〈フードパントリーボランティア募集！〉つくば子ども支援ネット（23018V） …… 92

2023年度　実施状況報告 …… 93

編集後記

※活動報告では、成長度（自分はどのくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感はありましたか？）を 5 段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT) の『活動報告書 (2024 年 10 月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008 年度（平成 20 年度）に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。令和 6 年度（2024 年度）の今年は、17 年目の活動に入ったことになります。

本報告書には、T-ACT で実施された企画・活動のうち、昨年度（2023 年度）に「活動報告書」が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACT アクション・プランの企画が 20 件、T-ACT ボランティアの活動が 9 件となっています。一昨年度の活動では、前者が 19 件、後者が 6 件でしたので、わずかながら増えましたが、2023 年 5 月に感染症の位置づけが 5 類に変更され、対面での活動も本格的に再開された割には、件数が伸びなかった印象があります。コロナ禍からの物理的、心理的脱却には時間を要するということでしょうか。

しかしながら、実施された企画とその報告には、力がこもったものが揃っています。本報告書は、例年以上に内容の濃い 1 冊となっていますので、ぜひご一読をお願いいたします。

アクション企画の中から印象に残ったものをいくつか拾ってみましょう。今回は、継続的な企画が目立ちました。T-ACT は、メンバーがほぼ固定されるサークル活動と差異化し、流動的な役割分担を推奨する意味で、1 つの活動の期間を原則半年以内としています。それ以上の時間を要する場合は、企画を再検討し、新たな企画申請を行う必要があります。企画名でみると、「障害者スポーツを通じて SDGs をもっと身近に〜その 2」「筑波大学かぶき會　第三場（第 1 回自主公演)」などがそれに該当します。前者の企画は、「その 1」において、SDGs を子どもたちに普及することを目標に掲げ、障害者スポーツを通じた教育イベントを児童館や県南生涯学習センターの協力の下、6 回実施した実績がありますが、今回の「その 2」では、これまでの成果や課題を踏まえて内容がさらにアップグレードされました。後者の企画は、歌舞伎の魅力を筑波大生を始め多くの人に知ってほしいと、「第一場」と「第二場」はオンラインで歌舞伎の演目や小道具やいろいろなことを紹介する企画でしたが、今回の「第三場」では新演歌舞伎を自らの手で制作し、春日キャンパス春日講堂での自主公演にまでつなげ、喝采を得ました。

また、「筑波大学開学 50 周年記念切手展」は、準備作業の「No.0」と切手展を開催した「No.1」を連続して企画していますし、「【人工言語作成プロジェクト】人工言語勉強会」は、2022 年度初頭から制作してきた人工言語「キリーナ語」を学ぶワークショップの開催を果たしています。さらに、継続という観点からいえば、「「盆ライブ」プロジェクト再始動！」や「第十四回地理つくば」は、コロナ禍で中断していた活動を復活させ、新たな継続を目指すもので、意義深く感じています。

「新編入生お助け隊 !! 〜広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ〜」と「筑波大学お掃除大作戦！」は、学生の目からみて今の筑波大学に足りない大事な部分を補ってくれたという意味で、見事な企画であると評価されます。

最後に、T-ACT は、2023 年秋の学園祭において、社会福祉協議会とのコラボで「T-ACT ×つくばボランティアフェスタ」なる企画を実施しました。T-ACT が目指すプロジェクト型ボランティアの走りにあたるもので、とくにここに記して今後の発展を期したいと思います。

本年度も皆様の変わらぬご支援とご助力をお願いいたします。

2024 年 10 月

T-ACT 推進室副室長

加賀　信広

筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.0（22015A）

T-ACT プランナー　張　建国（人文学学位プログラム博士前期課程1年）

活動目的

「筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.1」を開催するにあたり、切手展の事前準備、サポートメンバー集めや広報活動等を行うことを目的に、前身である本企画を立案しました。

筑波大学開学50周年に行われる催事の期間中に記念切手展を開催したいと考えています。筑波大学開学50周年というおめでたい節目にぜひ何か歴史に残したくて、自分の趣味でもある切手をテーマに展示会・ワークショップ等のイベントを計画中です。

筑波大学開学50周年を記念する切手展の開催を最終目標として、サポートしてくれるメンバーを募ります。切手展の開催に向けて、企画、デザイン、会計、広報など様々な面で参加できます。総合大学ならではのメリットを活かして、異なる領域の人との交流を実現させます。

具体的な活動計画

0、定期 MTG

サポートメンバーを募集します。集まったメンバーで定期的にオンライン（Teams 等）か対面（筑波大学内の教室を使用申請予定）での MTG を行います。MTG 形態は集まれるメンバーの状況により適宜判断します。MTG の内容は以下の 1 ～ 4 になります。

1、イベントで行う企画を練る：

2023年10月の切手展開催を目標に、2023年 3 月までに切手展で行われる詳細のイベントを企画し、実現できるように準備を進めます。メンバーがアイディアを出し合って筑波大生が楽しめるイベントを一緒に考えていきます。

2、デザイン：

切手展のポスター、記念消印、配布物などのデザインを行います。切手展の魅力を直接目で伝わるように工夫します。また切手展の会場のレイアウトもその範囲とします。

3、予算案の作成：

切手展に関わる必要経費を算出します。実施にかかる費用によっては、参加者から参加費用を徴収したいと考えています。（切手展等のイベント開催費用に充てるため。営利目的のイベントではありません。）

その他、財務を管理します。

4、広報：

宣伝を行い、デザインを担当する人と一緒に活動を行います。

5、その他：

企画が承認された場合は、総務部、T-ACT 推進室長・スタッフの方々と打合せの場を設ける予定です。筑波大学開学50周年に行われる催事に向けて何か協力できることや連携できることがないかを相談するためです。

活動場所

人社系 A6階　日本語学研空室

活動期間

2022/12/01～2023/05/31

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：宣墨白（情報理工学位プログラム博士前期課程 2 年）
　張抒楊（生命環境科学　生物資源科学学位プログラム修士 1 年）
P：田川拓海（人文社会科系）

備考

【感染防止対策】

・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
・各自マスクを着用する。
・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
・活動の以後 1 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告

実際の活動内容

オーガナイザーの 2 名と一緒に議論し、これから一緒に活動するメンバーを募るポスターを作成しました。
総務課と相談した上で詳細の内容を再確認し、イベントの場所や期間を決めました。
校内各地にメンバー募集のポスターを貼りました。
Teams でグループを作成して、このイベントに関わる資料をまとめました。
切手展で必要とする作品をプロの方に声をかけ、出品していただくことにしました。
近隣の郵便局と打ち合わせして、記念消印のことを相談しました。
学校公式の記念イベントとして認定できるように、申請書を出しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

・メンバー募集は予想よりも困難でした。
・学校そして郵便局など多方面と関わってくるため、イベントの実現までには時間がかかりました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

・広報活動を実施し、より多くの人に知ってもらって頂いています。
・積極的に関係部署と接触して、円滑に進めていきます。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

学校全体から仲間を招集することが中々大変であるため、身近な人から声をかけてみることにしました。そのため、身近な人であってもさらに交流ができました。集まれた限られたメンバーではあるが、一緒にポスターを貼ることや詳細事項を確認することでさらに仲良くなりました。同じ目標があるため、熱心に取り込むことができました。もっと他に多くの方に来てもらいたい気持ちはいっぱいですが、これから本番に向けて頑張りたいと思います。メンバーが少ないとこれからの運営もかなり厳しくなるので、解決策を模索しています。

各方面の関係者と連絡を取り合い、大変さはあるが、成長した実感もあります。

参加者への影響

現在参加しているメンバーの中にはすでに切手を集めている方がいらっしゃって、各自のコレクションやこれからイベントの展望について話し合い、お互いに勉強ができたと思います。

また切手に初めて触れる方もいらっしゃって、切手の魅力を伝えられたかと思います。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何かを企画したい気持ちがあれば、ぜひ実現させてください。新しいことにチャレンジすることはいつも新鮮に感じます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

とにかく先生たちからは非常に建設的なアドバイスをいただけることであります。自分が見えなかった盲点も突き止めてくれて、これからに向けて改善することができます。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

妖怪ワークショップ～人面犬張り子を作ろう!～ @現代怪異のふるさとつくば（22020A）

T-ACT プランナー　串田　日向美（比較文化学類1年）

活動目的

妖怪関係のイベントを行ってみたかったのが第一の理由であり、さらに妖怪藝術団体・百妖箱の代表である嵯峨美術大学講師・河野隼也氏 の Twitter での「大物をつくりたい」というつぶやきがきっかけとなった。

筑波大学は全国的にも広い敷地を有しているわりに、大学の看板となりえる大物の山車などがない。さらに、茨城県には牛久沼という河童の伝承で有名な場所があったり、さらに研究学園都市は都市伝説・人面犬発祥の地であるにもかかわらず、妖怪スポットとしての知名度が低いと思われる。筑波大学という敷地を最大限利用さらには新たな妖怪・都市伝説スポットとして地域活性化するために、本企画を打ちたてた。

具体的な活動計画

〇準備段階（2月～3月）

開催当日までにプランナーは以下の手順を行う

＜張子材料の準備＞

和紙（一袋）、ボンド（一つ）、刷毛（20本）、アクリル絵の具（2ケース）、容器（20個）、水風船（10個プラス予備でいくつか）、紙粘土（10個）、ハサミの準備（ハサミは参加者に持参してもらう）、ドライヤー、できた作品を入れるための袋

＜ワークショップの準備＞

・参加人数分（10人を想定）の材料や器具を用意
・張り子の材料は主催者側が準備をし、参加費（1人あたり500円を想定）を徴収して採算をとる。
・参加募集は Google フォームで行う

＜広報＞

3～4月中は参加者を募るために宣伝を行う
また、作成したポスターをコピーし、各エリアに掲示したり、配布する予定である。
また、ポストカードを作成して今後の活動（都市伝説の仮装をするイベントを開くこと）に繋げられるよう、活動団体としての宣伝準備も行っていく。

〇ワークショップ（5月）

＜当日（一日目）＞（13:00～16:00）

内容：人面犬張り子製作＆怪談会

・運営側は 1 時間ほど早めに集合し、準備する
・受付、本人確認、健康観察記録回収
・参加者に人面犬張り子を作るまでの過程の説明と、どの種類の人面犬張り子を制作したいか選んでもらう。
①用意した紙粘土（あるいは膨らませた水風船）を参加者に配布。
②紙粘土による人面犬の製作をする人は、ここで人面犬の土台を作る。
※ここで土台の表面を乾かす間に、都市伝説仮装軍団計画について説明をする。この間に、落語研究会の方々には怪談会の準備をしてもらう。
③半紙をちぎって、ボンド水で紙粘土の土台（もしくは水風船の土台）に張りつける。
④貼り付け終わったら和紙を乾かす。
人面犬の製作自体は一日目はここまでで終了。
続いて、15:00～より落語研究会による怪談会を開始。およそ二名による落語の怪談を披露していただく。

〈当日（二日目）〉（13:00～16:00）

・運営側は 1 時間ほど早めに集合し、準備する
・受付、本人確認、健康観察記録回収
⑤乾かしておいた土台が水風船の人の場合、土台の水風船を割って、和紙だけ（すなわち張り子）の状態にする。
⑥絵付けをする。基本的には各々が好きなよう人面犬を書いてもらう。見本として、試作した人面犬張り子もおいておく。
⑤絵付けされたものを乾かす。

⑥完成（記念にみんなで写真撮影をとる予定）
　続いて、14:00～より妖怪百人一首を参加者と行う。
プランナーは場所の用意をあらかじめ、絵付けを乾かしている間に行っておく。

○予算について
　別途資料に記載。

活動場所
大学会館などを利用。
それができなければ、芸術関係の教室を借りて利用する。

活動期間
2023/02/01～2023/05/15

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：畑山綾（比較文化学類 1 年）、谷山拳（比較文化学類 1 年）
P：山澤学（比較文化学類）

備考
この企画を踏み台にして、のちの企画につなげていく予定
〈暫定の後の企画〉
・都市伝説仮装作り
・雙峰祭や、やどかり祭での都市伝説仮装軍団による行列
　など
なお、ワークショップは定期的にやっていくことも検討したい。

活動報告

実際の活動内容

5/6
13:00~15:00　人面犬張り子作成
15:00~16:00　落語研究会による怪談噺

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒30％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと
・参加者人数が少なかった
・天候に左右される
・実施場所がわかりやすくなかったため、落語研究会の方々にご迷惑をおかけした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
当日の解決をはかることはできなかった

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

反省点その１　開催時期があまりにも悪かった

何よりもあげるべきなのは、開催時期が悪かったという点でしょう。
ゴールデンウィーク中、都内や京都を代表として、各地でイベントはたくさん行われます。それに乗じてワークショップを・・・と考えていたのですが、それが大間違いでした。

ワークショップのターゲットとしたのはあくまで筑波大学生であり、一般の方々ではありませんでした。ゴールデンウィーク期間中、つくばから筑波大学生は消えるのです。筑波大学には全国各地から学生が集っています。筑波大学生の多くは、大学の周囲で一人暮らしをしており、基本的に学内で行われるというイベントには、家が近いというのもあって割と積極的に参加する傾向があります。しかし、ゴールデンウィークという期間、筑波大学生たちは帰省してしまうのです。帰省しないという学生もいますが、バイト三昧にして稼ぐか、旅行に行くかの二パターン。どちらにせよ、つくばから離れて行ってしまう。都内や京都などは、むしろ地方から人がゴールデンウィークを利用して遊びにくるので、ゴールデンウィークに乗じたイベントの開催は有効です。しかし逆に、つくばのように、お世辞にも観光地としては発展していない地方都市からは、思いっきり人が吸われていくのです。

反省点その２　大学生向けの内容ではなかったのかも・・・

このワークショップを開催した目的は、妖怪をテーマにしたイベントが世の中にはあって、すごく楽しいということ筑波大学生に伝えることでした。最終目標は仮装イベントであり、前段階として工作物をしよう！と考えて居たのですが・・・何かの造形物を作るという、参加者に器用さを求めてしまうハードルがそれなりにあったのではないかと思います。ファミリー層向けには、子どもの想像力を養うとか、親子で楽しめるという利点があげられそうですが、大学生に対して図工はいかがであったのだろうか？確かに体験型のイベントは人気です。

しかし、その多くは着付け体験や伝統工芸品製作など、体験者にとって参加価値を得ることができるものばかり。一方で、人面犬製作は、完全にプランナーの趣味に走りすぎた、独りよがりなテーマであったと言えます。とはいえ、筑波大学には芸術専門学群があり、創作物を好む層は一定数おります。しかし、プランナーである私は工芸ド素人であり、そんなド素人によるワークショップは、大学で工芸を学んでいる上級生の方々にとって参加価値は一体いかほどであったのか・・・ということが想像できました。

反省点その３　宣伝能力の低さ

これはどうしようもなかったともいえますが、今回初のイベント企画というのもあり、知名度はそこまで高くはありません。ポスターの貼り出し、Twitter での投稿なども繰り返していたのですが、筑波大学生に向けての発信力は低かったように思います。また、人面犬というかなりマニアックなテーマで挑んだということもあって、一体どういう内容なのかを想像しにくかったのではないかと思いました。今後、一般に向けた企画もしていくつもりですが、やはり大学生にこそ興味を抱いてほしい・・・そういう気持ちがあるので、今後とも宣伝方法については模索が必要です。

参加者への影響

参加者少数規模のため、あまりなかった・・・であろう。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT は最高だぞぉおおお！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

自分一人で悩んでしまうところを相談することで、思いつかなかったような様々なアイデアを得ることができたり、T-ACT という場所を通じて新たな縁を得ることができた。その縁を通じて、新たにやろう、行おうと思うことができた企画もあるので、今後もそうした企画をさらに実現していけたらと思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒2

新編入生お助け隊‼～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～（22024A）

T-ACT プランナー　園野　咲愛（看護学類3年）

活動目的

編入生には編入生特有の悩み、新入生には新入生特有の悩みがあると思います。新編入生にはそのどちらもがあります。

実は編入生は、2022年度の入学者だけでも114名が在籍しており、本学、医学、春日キャンパスに少人数で散らばっています。編入生以外の学生の方は編入生とお話ししたことがありますか？

新１年生には、１年次必修科目であるファーストイヤーセミナーがあり、図書館や施設の利用方法、経済支援、学類生同士の交流などの情報提供の場があります。

その授業が編入生にはないことや、先輩後輩同士の交流の機会が少ない、または学類によっては全くないところもあり、情報を得る機会が少ないです。

そこで、履修申請（統一システムの登録など）や単位認定、進路就職、manaba、Teams、TWINS の登録など、筑波大学で学生生活を送るために知っておくべき情報について、学内の編入生を問わずに各学類の先輩から、新編入生の方へ情報提供の場を設けることを活動目的とします。

また編入生が一年間、入学してから学生生活を送ってみて、授業で困ったことと、その時の解決法、また大学生活で楽しかったこと、筑波大学に来てよかったと思うことなどの情報提供を行い、心細い気持ちで入学してくる新編入生の不安の軽減や、悩み、困りごとの解決を目的とします。

具体的な活動計画

編入生特有の大変さや、困りごと、その解決法などを現役編入生からアンケート調査を実施して冊子にまとめます。

例：履修申請、単位認定、研究室配属、就職、人間関係など

２月中旬：アンケート調査の枠組み立案、メンバー募集

２月中旬～下旬：アンケート調査の実施と回収、冊子作成の計画立案、アイデアの募集

３月：冊子作成、寄稿の依頼、イベント計画

４月：イベント実施

2023/4/7 オリエンテーション～授業開始の 2023/4/13

この間に在学生と新編入生の時間の都合のつく時間を取り、交流の場を設けます。

同学類の編入生とその学類の先輩（こちらは編入生も編入生以外の方でも募集しています）同士で入学書類と PC を持参し、履修申請や事前登録などの必要な手続きを一緒に行います。

都合がつけば、同学他学関わらず合同で行いたいと思います。

【イベント内容】

実施日：4月7日のオリエンテーション～授業開始の4月13日までの2日間

・1 日目　manaba や科目履修の方法の説明。同学類の編入生の3年生と4年生同士で入学書類と PC を持参して、一緒に履修申請や事前登録などの必要な手続きを一緒に行う。

18:30～20:30

対象者：主に学類で説明を受けてない、また説明を受けても不明な点がある新編入生

運　営：新 2～4 年次の学類生（編入かどうか問わず）

・2 日目　冊子配り＋交流会

18:30～19:00　挨拶・冊子の学類共通ページ（編入生の元の在籍や共通科目の体育や授業、学内の各施設のアクセス方法など）の読み合わせ

19:00～20:30　①学類同士の交流、その後、同学類２人ずつと他学類を交えて他己紹介

②交流を兼ねたミニゲーム（新編入生と現役生に、お題の書いてあるカードを引いてもらう。新編入生のものには「編入してやりたいこと」「編入のきっかけ」、現役生の方には「入学して楽しかったこと」「おすすめのご飯屋さん」「おすすめの授業」「筑波大学ならではの楽しさ」などと分かれており、コミュニケーションが促進されるようにする。

対象者：新編入生

運　営：新 2～4 年次の学類生（編入かどうか問わず）

活動場所

学内の空き教室

活動期間
2023/02/10～2023/07/10

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：船木歩（看護学類３年）
P：杉江征（人間系）

備考
本企画の主旨は新編入生への情報提供の場とすることです。
しかし、新四年生になる学生の方も現在進行形で進路や就職、研究室配属について悩んでいることや困っていること、その他についての悩みがある方もいらっしゃるかと思います。そのような悩みの共有や解決の場とすること、また筑波大学での学生生活の１年間を振り返り、大変だったことを労う場、入学して楽しかったことや良かったことなどを共有する場となることも目的としています。
つまり、新編入生同士、先輩後輩同士、在学生同士の情報共有の場としたいと思います。
また、学類によっては入学者が数名の学類もあるため、１人もとりこぼさないためにも多くの方にご協力いただきたく思います。
編入生ではない方でも情報提供していただける方、冊子に寄稿していただける方、交流会にお手伝いいただける方を募っておりますので、ご協力していただきたいです。

編入生が在籍している学類は、
社会学類
生物学類
生物資源学類
地球学類
物理学類
化学類
応用理工学類
工学システム学類
社会工学類
情報科学類
情報メディア創成学類
知識・情報図書館学類
医学類
看護学類
医療科学類（2022年度の合格者１名）
になります。
こちらの企画をお友達に紹介していただくだけでも、直接、プランナー（團野）に連絡いただける形でも構いません。学生の在籍数は多いですが、少人数が各学類に散らばって在籍しているために全数把握が難しい状況です。
心細い気持ちで入学される新入生のためにも多くの方のご協力を募っております。
また、学類が豊富な方がきっと楽しい企画になると思います！
ご連絡をお待ちしております、是非よろしくお願いいたします！

【イベント開催の感染対策について】
・実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
・企画を実施するかの判断については、開催１週間前に T-ACT と相談して決定する。
・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
・参加者は過去２週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。また、ハンドソープも用意しておき、手洗いをしてもらう。
・各自マスクを着用する。
・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。

・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。また、受付での卓上 AI 検温器を用いた体温測定を行う。
・参加者が座る位置を、ソーシャルディスタンス（2m）を考慮して予め設定しておく。
・飛沫防止パーテーション、アルコールスプレーを教室内に設置する。
・万が一感染者が出た場合のことを考え、参加者の「学類・学年」「氏名」「メールアドレス」を事前に Google フォームで登録してもらう。また飛び入りの参加なども考えられるため、受付にノートを用意しておいてそれらの情報を記入してもらい、参加者の全員の所属が把握できるようにする。
　また、この際にイベントで聞きたいことや、してみたいことなどを事前に聞いておく。

活動報告

実際の活動内容

【2 月】
企画立案、メンバー募集、アンケート作成

【3 月】
メンバー募集、各学類の編集委員の方への寄稿の依頼、各関係機関への問い合わせ
〈アンケートの作成について〉
2 月中旬～ 3 月中旬に実施
　入学時のオリエンテーションの状況、単位認定、履修申請について、授業、進路、経済状況、サークル活動など学生生活に関するものと新入生へのアドバイス、メッセージの項目を設け、冊子のなかには何の情報を入れる必要があるかということの把握のためと、新入生へのメッセージ集めのために行いました。
　アンケートの周知と回収については、Google フォームを用いてアンケートを作り、各学類の編入生の LINE グループで流してもらい、全学類の編入生の方が目に入り回答できるようにしました。結果的には46名分のアンケートを回収しました。
　アンケートの初めの部分に、企画に協力していただける方は名前と連絡先を書いていただくことをお願いしました。書いて頂いた方には私から連絡させていただき、メンバーを集めました。
アンケートの内容だけでは分からない点についてはミーティングで集まった際にその学類の在学生に何に困ったかなどを聞きました。
　そのアンケート調査と聞き取り調査の回答の内容から、配布冊子の中に入れる目次を考えました。
［目次］
・編入生ってこんな人たち
・授業、履修申請、成績について
・TWINS/manaba/Kdb、試験、学内無線 LAN について
・筑波大学における経済支援について
・困ったときの相談窓口リスト
・筑波大学附属図書館についての案内、データベースについて
・新入生配布資料の案内・TWINS 掲示板
・各エリア支援室連絡先、緊急時の連絡先について

【3 月中旬～下旬】
〈各関係機関への校閲の依頼〉
　各関係機関に問合せを行い、校閲をしていただきました。

〈ご協力いただいた機関〉
・筑波大学附属図書館
・保健管理センター
・スチューデントサポートセンター学生相談室
・学生生活課
・ピアサポートチーム
・教育推進部教育推進課
・体育センター
・筑波大学総合事務センター
・各エリア支援室

【4月】
〈デザイン、最終調整〉
　冊子作成に協力していただいた芸術専門学群の2年の方々と冊子全体のレイアウトを考え、最終調整を行いました。
　最終確認後、「編入生のためのファーストペンギンセミナー2023」を150部発行していただきました。
※スチューデントサポートセンター学生相談室の予算で筑波大学総合事務センターにて発行しました。

　学生相談室の先生方に各学類の支援室と学類長宛に送付状を書いていただき、各支援室宛に冊子とその冊子にイベント告知のためのフライヤーを入れて郵送しました。
〈イベント企画、準備〉
・全体に対してモジュールや履修について簡単に説明を行うための準備
・会場設営の準備
・事前登録のGoogleフォーム作成、当日来た人の参加登録用紙の作成
　GoogleフォームのTwitterでの告知と、配布冊子の中に挟んだチラシにQRコードを掲載し、そこから読み取れるようにしておき、Twitterをしていない人、TWINSやmanabaがまだ使用できる状態ではない人でも、“編入生向けのイベントが開催される”という情報を届けられるよう工夫しました。
・イベント広告の作成
・事後アンケートの作成
・2部の交流会の発案

【4月7日】
【編入生のためのファーストペンギンセミナー2023】開催
場所：3A棟207教室
日時：17:30～20:45

7日のこの時間に開催した理由は、
・7日の夕方には学類ごとのオリエンテーションが全て終わり、TWINSやmanabaや履修方法がある程度理解できている状態であり、今自分が何が分からなくて何に困っているかという自分の状況を新入生が少し考えられている状況であるということ
・次の日からサークルの新歓祭が始まるため、それを一緒に見に行く友達づくりの場
・各学類の用事と比較的被らない時間帯であるということ以上の理由から7日の夕方にしました。
　夕方までオリエンテーションをしていたという学類の方々には疲労が大きい1日であったと思いますが、より多くの人に合わせる方法と丁度良いタイミングを考えてこの時間帯としました。

当日のタイムスケジュール
17:30～19:00
1部
履修申請、研究室など、学生生活のことなど、同じ学類の先輩から直接話を聞く場

19:00～19:15
休憩

19:20～20:45
2部
「ITO」というゲームを筑波大学オリジナルのものにして、行いました。

7月にT-ACTの企画外で編入生の交流会の開催をもう一度行い、計27名が集まりました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

協力してくれるメンバーを編入生が在籍している学類分だけ集めることが大変でした。オーガナイザー29名のうち、企画立案より前から知り合っていたのは5名でした。その他のオーガナイザーの方は2月中旬頃にメールやSNS等で連絡を取り、3月初めに1回目のミーティングを実施して知り合った学生や、イベント当日に初めてお会いした方も8名という状況でした。

ミーティングは何度か行いましたが、イベント当日までにオーガナイザー（運営メンバー）全員が一緒に集まる機会を設けることができませんでした。参加者の増加や時間がないなかで多くのことをするということで当初の計画から変更点が何点もありましたし、イベント当日の変更点も何点かあったので、オーガナイザー間の情報共有が上手くいっていませんでした。

また、プランナーである私自身を除いたオーガナイザー間同士ではイベント当日までに関係がほとんど構築されていなかったので、オーガナイザーの方からの質問とパーティシパントの方からの質問や相談に当日に対応するということも大変でした。

そのため、今後同じような企画を行うとなる際には、その場で指示を出せる存在がプランナーの他にも5～6人ほどいて、その5～6人ほどの方がオーガナイザーの方全員と面識を持って必要時に指示を出せる状態にしておけば良いと思います。

パーティシパントをまとめる存在であるオーガナイザーの数も多くなると、オーガナイザーをまとめたり連絡調整をしたりする存在がプランナーの他に何人か必要であったと思います。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

協力的に参加してくれているメンバーを沢山頼らせていただきました。

また、オーガナイザーの方々がどのような目的や動機で参加してくれているのかや、何が得意なのか、興味関心ごとについて考えてみました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

冊子作成にあたっては、芸術専門学群の学生の方々から、レイアウトの大切さを学びました。フォントの種類やポイント数はどれくらいであれば見やすく分かりやすいのか、カラーパレットはどのような色を使用すると良いのか、図や文章の配置によっても読んだときに受ける印象が変わったり、文意がやや変わってきたりすることを知りました。上記のことは冊子を読む対象や目的によっても変わってくるため、対象者の属性についても情報収集されている様子が印象的でした。一緒に活動できた期間は本当に有意義でした。

企画立案、実施、評価、次につなげるための反省点を考えるなどのPDCAサイクルについて、今後の自分自身の勉強の1つになりました。貴重な機会をいただけたことに本当に感謝しています。

企画運営に携わることも、取りまとめるということも初めての経験であった私にとって、交流会という企画を立てたはよいものの自分がそれを進行できるのかということは最後まで不安でした。しかし私の進行が下手なりにも隣で頷いてくれる友人や、代わりに仕事をして負担を一緒に背負ってくれる協力者がいたことがとても心強かったです。協力者が多くいないと成り立たない企画でしたが、メンバーとの初めての顔合わせが3月初めであったため、多い仕事量を誰にどう振るかを考えるのが難しかったです。しかし、メンバーの方から「仕事を振って」と声をかけられたことがありがたかったです。

3年の春休み中は大切な試験があったり、進路について考えたりする必要のある期間だったこともあり、自分はこの活動をしている余裕があるのかという気持ちになったことが何度かありました。しかし終わって振り返り、周りの反応を見ると学びの多い経験となりました。実施して良かったと思います。

今後何かに躓いたときにどこに原因があったのかを考える際の参考事例になると思いますし、何か課題が生じた際に「自分なら解決できる」という自信に繋がったと思います。

参加者への影響

パーティシパントの方々には、編入の先輩から直接教えてもらうことによって今後の履修計画をスムーズに立てたり、研究室のこと、サークルやアルバイトなどの学生生活のことなどを聞いて疑問点や不安なことなどを解決できる一助となったのではないかと思っています。

イベント実施後オーガナイザーの方から、イベント時に新入生の方から質問項目の多かった内容についての回答を簡単にPDFファイルにまとめて後輩に共有したり、授業の紹介についてファイルにまとめたり、別日に相談会を設けたりしているという話を聞きました。

学類を超えて新入生同士で関わりを持っている、という話を聞いて嬉しくなりました。

イベント直後でなくても何ヶ月か後に各方面からフィードバックをいただけるとプランナーとして嬉しくなりました。作成した冊子の方も支援室の方から次年度以降も発行したいとの申し出があり非常に嬉しかったです。

以下、イベント実施後に参加者からいただいたアンケート結果を示します。

【1．感想をお願いします】

・他の学群の人と話せて楽しかったです！
・学類には少ない編入仲間、先輩が大学全体で見るとこんなにいるんだ！と安心出来ました。 学類の先輩と直接会ってカジュアルに質問する場がなかったので、時間割や授業など真面目な話からサークル、おすすめスーパーなど楽しい話まで伺えて非常にありがたかったです。また他学類に同じ大学出身の人が見つかって嬉しかったです。今日の場がなければ発覚していなかったと思います。
・同学類の先輩方と交流することでき、講義内容や研究室に関しての情報を得ることができ、とても充実しました。
・研究室に関することや履修のことなど聞きたかったことが聞けたので良かった。
・初めての会で運営もとても大変だったかと思います、このような機会を設けてくださりありがとうございました ☒ ^• ω •^ ☒ ネコ！本来 2 部で席の移動があった…はずですかね？それが無かったのが個人的にはちょっぴり残念でした（多くの人と交流したかったので）それ以外は特に気になったことはありません。運営お疲れさまでした！ありがとうございました。
・満足度の評価の上下分かりませんでした。（とても満足しました）同じ学類の編入の先輩に色々教えていただき、すごくすごくすごく有意義でした。真面目な話だけだと堅苦しかったなか、2 部のゲームでもみんなと別の角度から交流でき、3 時間がすごくあっという間でした。楽しかったです。
・友達できました！ 楽しかったです。
・会の企画ありがとうございました。とても楽しかったです。履修登録も教えていただかなければ 1 人でできなかったと思います。また他学類の人と関わる機会はあまりないので今回関われてよかったです。ありがとうございました。
・楽しかった。
・楽しかったです。つくばに編入してよかったとおもいました。
・参考になったし、楽しかった
・1 部は有益な情報交換がたくさん出来てありがたかった。 2 部は初対面の他学類の人とグループになったが、すぐに打ち解けて楽しくゲームに取り組み盛り上がった。
・交流ができて良かったです！
・編入学の先輩から直接話を伺える良い機会でした。
・メ創の先輩いなくて一部参加できなかったの悲しい。
・先輩から役に立つ情報を教えてもらえて、非常に満足しています。
・履修登録や今後の大学生活について詳しく聞けた。 1 人しか先輩がいなかったので、もう少し先輩の人数が多いとより多くの様々な意見が聞けたのかなと思った。
・先輩が本当に良い人で、めちゃくちゃよかった。ありがたい、本当にありがたい。

【2．改善点、ご意見などがあればお願いします】
・会場が少し狭かったのでもう少し広いとよかったです
・とても素敵な会をありがとうございました！ファーストペンギン冊子をはじめ（熟読させて頂いています）、ゲームや質問事項の用意をして下さり、緊張せず最後まで楽しく参加することが出来ました。次年度にもぜひ繋げていきたいと思ったので、運営に回れるようになりたいです。
・人数の割に教室が狭い感じだったので次回はもっと広い会場にした方がいいと思います！
・生物資源の単位読み替えの時間と被ってしまっていたので別日だと嬉しかった。
・個人的にはもう少し時間があってもいいかなと思いました。
・もう少し大きな部屋だと嬉しいです
・特にありません。楽しかったです。
・もっと他の人とも話したかった。
・ありがとうございました、来年は自分たちが新入生を歓迎できるようにがんばります！
・人を一定時間で入れ替えるなどができたらより多くの人と交流できて良いのかなと感じました！
・自身の所属する専攻の先輩がおらず専攻の科目などの話を聞けなかったため、できれば各専攻一人ずつ揃っていると尚良いと思います。
・参加人数に対して部屋が狭く、声が聞き取りづらかったです。密すぎて少し疲れました。
・忙しい中、ありがとうございました。3年次編入生の割に、話を伺うことができる学生が少ない状況でしたが、対応が大変な中でも尽力頂いたこと感謝します。
・他の編入生と仲良くなるのは時間的にも難しかった。レクリエーションよりやっぱり自由にゆっくり話せる場があればよかったかなと思うけどなんか婚活パーティーみたいになりそうですもんね、難しいですね。。

いただいたフィードバックは今後に活かしていきたいと思います。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

長期間のコロナ禍で対面で人と会う機会が少なくなることの辛さを学ぶことができたので、オンライン、紙媒体、SNS上などでの情報発信だけでなく、対面でのイベントも大切であると感じました。ミーティングで顔を合わせて話すこともメンバー間で関係を構築するために大切であると感じました。

完璧でなくて大丈夫です！得意と思っていないことでもやってみたら意外とできることもあれば、できないこともあります！それを新しく知る機会にもなります！

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

筑波大学内には様々な部署があり、学生支援に関わっている方が多くいらっしゃるということを知ることができたこと、その方々の想いを知ることができたこと、多くの方からの協力を得られたことが非常に魅力的でした。T-ACTのスタッフの方にも親身に企画の相談にのっていただきました。T-ACTの企画を通して出会った学生および教職員の方々から学びをたくさん得ることが出来ました。

また、私自身の企画もそうだったのですが、日常生活を送る上でモヤモヤした気持ち、おかしいなと思う気持ち、こうなったらもっと便利なのに、面白いのに、そんな想いを大切に持ち続けてほしいなと感じます。同じように考えている人は学内や学外に誰かしらいると思いますし、そのような違和感や疑問から生じるアイデアはきっと素晴らしいものになると思っています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

LGBTQ+ = ALLIES Salon（22026A）

T-ACT プランナー　澤田　彬良（人間系総合科学学術院　教育学　博士前期課程）

活動目的

◎目的

LGBTQ+ の当事者や、非当事者 Ally が一緒になって困り感を共有したり、勉強しながら、シティズンシップを発揮するアクションの機会を画策・企画・実行する場（＝ソーシャルコミュニティ兼アクションコミュニティ）を築く。

※ Ally（アライ）とは、非当事者・当事者に関わらず、LGBTQ+ の人権や生き方を尊重し、かれらに寄り添い理解に努める態度、不公正を正すための行動志向を有する者のことである。

◎動機

活動企画の背景は、元首相秘書官の LGBTQ+ 差別発言（「LGBTQ+ の隣に住むのも嫌だ、見たくもない」という趣旨の発言）およびそれに付随して SNS 等で盛り上がりを見せるヘイトスピーチがコミュニティを攻撃していることに危機感を抱いたためである。実際に私自身が当事者であり、今回のニュースを見て心を痛めた一人である。また、周りに 今回の件をきっかけに抑うつ感情を強めたり、自傷行為をおこなったりするようになった者が居て、筑波大学にも苦しんでいる人が少なからずいると考え、本活動を企画した。

◎最終的な目標・展望

自分自身の当事者性をオープンにせずとも居場所感を感じることができ、何らかのアクションを取りたいとなったときにコレクティブに活動できる後ろ盾として機能するコミュニティを築くことである。（現在、筑波大学内にある LGBTQ サークルは基本的に当事者のみが参加しており、規模も小さい。また、サークルとしての活動のためソーシャルコミュニティとしの側面が強く、アクションに進むことが難しいという課題を有する。そのため、当事者と非当事者どちらもが参加でき、アクションを見据えてコミュニティを築いていく必要があると考える。）

具体的な活動計画

◎活動内容

２つのラウンドから構成する。それぞれ、経験的知識や学術的知識を対話的に学ぶ活動（１）と、学びに基づき行動を起こす活動（２）である。

1. Think with us.

当事者および非当事者の Ally が、LGBTQ+ に関するイシューを話し合ったり勉強し合ったりするミーティングを、知識の差が大きいことを考慮して定期的に行いたい。具体的な方法としては、ケーススタディを用意し対話的学びを進める WS を開いたり、読書会・輪読会・映画鑑賞会をおこなったり、必要に応じて学内外のゲストスピーカー（学外者の場合は LGBTQ+ 関連 NPO のメンバーなど）に講演をしてもらったりする。このフェーズの目的は、「知識深化」、「課題発見」、「アライ拡大」、「アクションのための作戦会議」である。

・各回 1〜3 時間程度・月 2 回で、参加者は当活動参加メンバー（パーティシパント）である。
・活動は、オンライン / オフラインのハイブリッドで行う。
・毎度、次回扱う内容やその方法について会内で話し合い、決定する。

2. Take action together.

1 の学びに基づき、「何らかのアクション」を起こすフェーズ。アクションの内容や方法については、1（Think with us.）の段階で議論を重ね、プランナー、オーガナイザー、パートナー、パーティシパントで合意が得られたものとする。なお、アクション内容としては、暴力行為や特定他者 / 集団への批判・攻撃は許さず、主に啓発活動やオンライン署名活動・WS 開催など、参加者や関係者、対象者いずれの身体的精神的安全が脅かされないものを企画する。

・日時：8 月頃
・場所：学内の講義室、オンライン
・内容：オンライン署名活動かワークショップ開催を考えている。

*1. 2のいずれの活動においても、以下のグランドルールを徹底し、悪質な場合には、退場を申し付け、次回からの活動への参加を禁止する。

・活動内で出た個人情報等については外部に持ち出さない。（録画・撮影等は原則禁止。使用目的とメンバーの同意が取れた場合にのみ例外的にこれらを許可することもある。議事録等では名前等の個人情報を削除・編集して個人が特定されないように配慮する。）
・参加者、活動外他者、特定集団等を否定・攻撃しない。（批判と否定は異なる）
・活動参加は個人の裁量に任され、参加にあたって強制や強要があってはならない。
・差別的発言・差別的行動は許されない。違いを尊重して参加する。

・活動名・企画名・T-ACT・筑波大学のいずれかの名を掲げて発信 / 行動を実施する際には、個人の裁量ではなく活動に参加するメンバーの合意と承認のもと行う。
・参加者の氏名は、通称名・ニックネームをそれぞれ自らが決定し、それを用いる。
なお、上記の通りルールを設け、ルール厳守を徹底して事故事件を防ぐことに努めるが、万が一予期せぬ事態が発生したときのために、相談先を設置する。

活動場所

可能であれば大学内で部屋（5C、3C、2B、図書館セミナールームなど）を借りて行いたい。理由として、LGBTQ+ の当事者には、特定他者に対してのみ自己開示をしているゾーニング状態の者もおり、かれらのプライバシーが侵害されない場を設けるためである。また、アクションに際しては、アクション内容や計画をまとめた書類を大学の事務スタッフ、教員等に提出し、アクションを起こすことが許諾された場所で行うこととする。

活動期間

2023/03/30～2023/08/30

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：中玲蘭（人間系総合科学学術院 教育学 博士前期課程）
萩原悠斗（人間系総合科学学術院 教育学 博士前期課程）
土屋うらら（教育学類 3 年）
M さん（学類 1 年）
南陽菜（障害科学類 1 年）
P：河野禎之先生（筑波大学 人間系助教 / ヒューマンエンパワーメント推進局 業務推進マネージャー）
梅田恵先生（筑波大学　ヒューマンエンパワーメント推進局　業務推進マネージャー / 教授）

備考

外部者向けプレゼンテーションスライド：
https://docs.google.com/presentation/d/1mrpuOljJiFXuO1jwwZXHmzzpVnFQIdqnW2wfanGl_nk/edit?usp=sharing

活動報告

実際の活動内容

上半期は、総勢17名の筑波大学生が参加し、「1.Think with us.」の活動を行いました。活動は月 2 回おこない、5 月は「LGBTQ+ に関する基礎知識」と「アクションに関する基礎知識」をプランナーから講義形式で提示し、6 月から 8 月にかけて、協力の意向を示してくれた当事者学生のライフストーリーから「実体験に関する学び」と「構造的な変革のための議論」を行いました。学生の参加は、各回 7 名～15名ほどであり、すべての参加学生が一回以上ミーティングに参加してくれました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒77％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者全員の予定を合わせながら定期的に活動を行うこと。また、本報告書等への名前記載に関して、通称名やニックネームの使用が可能か、報告書等の公開範囲がどこまでかが事前にわからないこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

都度スケジュールアプリを使用しながら、できるだけ多くの参加者が集まれる予定を設定した。
通称名やニックネームの使用については、参加者らと相談しながら記載した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

T-ACT を通した本活動によって、自身に生じた変化は主に 3 つある。その 3 つとは、①コミュニティ・友人関係の構築、②アクションへの準備度の向上、③ LGBTQ+ コミュニティのリーダーとしての自覚獲得である。

まず、一つめに、本活動を通して、自らが居心地良く過ごすことのできるコミュニティを構築できた。筑波大学は、ヒューマンエンパワーメント推進局や、LGBTQ+ 当事者学生サークルなど、LGBTQ+ 当事者にとって過ごしやすい環境整備を比較的整えている大学である。しかしながら、プランナーである私は、そのいずれの場においても、「なんだかしっくりこない」という気持ちを抱いてきた。当事者であっても、求めるものは多様であるし、当事者同士だからといって仲良くなれるわけでもないからである。本活動は、「LGBTQ+ コミュニティのために何らかのアクションを起こすこと」を目的として集まった参加者で構成される。そのため、すべての参加者が、LGBTQ+ フレンドリーであるだけでなく、行動志向であったことが、「居心地の良さ」を感じさせてくれたと思う。私だけではなく、パーティシパント同士でも交流が生まれているようで、活動を重ねるごとに、一緒にご飯に行ったり、飲み会を開催したりしているという声を聞き、本活動を端緒としたコミュニティが生まれつつあることを実感している。

次に、アクションへの準備度が高まっていることを自覚する。本活動では、5 月から 8 月まで、継続的に「LGBTQ+ を取り巻くイシュー」について学んだり、議論したりする時間を設けてきた。一人で考えるだけでは、「どうしようもない」と落ち込んでしまうことが多々あったが、モチベーションを高く持った参加者同士で議論する中で、アクションに向かう心持ちが少しずつ高まってきているように感じる。とくに、ライフストーリーを聞くという活動を通して、「身近な友人がこんな体験・想いをしているんだ」というやるせなさの実感が、私自身のアクション準備度を強く向上した。

三つ目に、コミュニティのリーダーとしての自覚を獲得しつつあることである。これまで、SNS で発信を行ったり、研究活動を通してコミュニティに貢献しようと志してきた。しかし、実際に周囲の人を巻き込みながら、何かアクションを行うことはほとんどなかった。本活動では、プランナーである私以外に、オーガナイザーの 4 名と、パーティシパントの12名が普段から参加してくれている。依然として小規模ではあるものの、少しずつ周りの人々の協力を得ながら、コミュニティをオーガナイズする日々は、私のリーダーシップを開花してくれた。実際に、各回の活動企画や運営、アクションに際した種々の関係機関へのアプローチなどにおいて、自らのリーダーとしての自覚を感じる。また、強いリーダーシップのみならず、みずからの弱点を皆に共有するなかで、参加者それぞれの強みを借りながら、ハンブル・リーダーとして立ち回れつつある自分に驚きと喜びを感じる。

参加者への影響

活動に参加してくれた仲間たちは、当事者と非当事者のアライから構成されるが、それぞれの立場の違いを考慮しても、知識・意識・考え方・日常的な振る舞いという点において、毎回成長していると感じている。その成長は、各回の活動後に参加者に提出をお願いしているリフレクションシートの回答結果からも読み取れる。

まず、知識についてだが、本活動の初回、第 2 回においては「教科書的（概念的）な知識」を中心にプランナーから解説を行った。初回のアンケートでは、「スライドが感動的にわかりやすいです！また、わからない人を置いていかないスタイルがとてもありがたいです」という回答や、「知識インプット→ディスカッションの流れが個人的に楽しかった」などの声が聞かれた。また、当事者のライフストーリーを聞く回では、「当事者の話を直接聞けること、そしてその場で質問できるのはとてもいい。A さんの話では、特に深く考えることがなかった時期・無意識に過ごしていた時期における経験が、その後自分の意見を持った時に大きな影響を及ぼしていることに驚きました。自分と違う環境での経験が与える影響の大きさに圧倒されると共に、自分の過ごした環境が当たり前でないことや、それがデフォルトだと思い込まないことを意識しなければと思いました。」など、当事者の話を聞いて、自らの想定とは異なる点に驚きつつも、自身の立場や、マイノリティの立場により自省的な知識を獲得している様子がうかがえる。

次に、意識に関して、プランナーの肌感覚として、活動を重ねていくごとに、参加者の発言に深みや重みが増しているように感じている。このことは、これまで自明視していた考え方や価値観の問い直しや、当事者の視点を介した自己の立場性への自省などが、活動を通して促進されたからだと考える。ひとりの参加者は以下のようなコメントを残している。「毎回、考えは深まるが答えのない世界なので、ずっとぐるぐる考えが回っている。しかし、どんどんジェンダーの課題に関してより自分事として捉えられるようになってきた上、男女ではなく人として人を捉えられるようになってきたと自分自身の変化を感じている。」ジェンダー課題を「自分ゴト」にで

きるようになってきたという意識の変化は、マイノリティを取り巻くイシューについて変化を生むためには非常に重要なステップである。というのも、マイノリティが絶対数として少数の場合、その問題に強く共感し共に行動してくれるマジョリティ（＝「アライ」）が重要な役割を果たすからである。本活動の目的である「アライの拡大」という点からも、こうした変化が見られていることは非常に有益である。

考え方の変化については、たとえば、次のようなコメントがみられた。「ジェンダーに関して議論することとはだれのための話なのか。ジェンダーマイノリティの人たちだけではなく、全人類がそもそも大きく関係があり、そこをなぜジェンダーマイノリティの人たちは考えようとしないのか。なぜ、ジェンダー特にセックスの話は茶化されたり、話してはいけないような雰囲気がつくられているのか。なぜ？という問いがふくらんだ。」。この回答者は、当事者の学生の語りを通して、ジェンダーに関する問題意識を、マイノリティ以外の角度にも開いて思考することを開始している。「LGBTQ+ を取り巻くイシュー」は「LGBTQ+「の」イシュー」ではないということを自覚するようになってきたようだった。これも、前述の「アライの拡大」という目的に大きく貢献するような考え方の変化であると言える。

最後に「日常的な振る舞い」という点について、多くの参加者らが、本活動を通して、自らの日常での行動に変化が生じていることがきかれた。例えば、家族に対して意識啓発を行いはじめた者、積読していたジェンダー・セクシュアリティに関する書籍を読了した者、都内の LGBTQ+ コミュニティに参加してネットワークを広げ始めた者、周囲の友人知人に声をかけて本活動への参加を促している者、アルバイト先で関わる人々に対し意識啓発を行っている者などである。こうした姿からは、本活動の継続によって、参加者らの日常的な行動に変化がうまれていることが観察される。

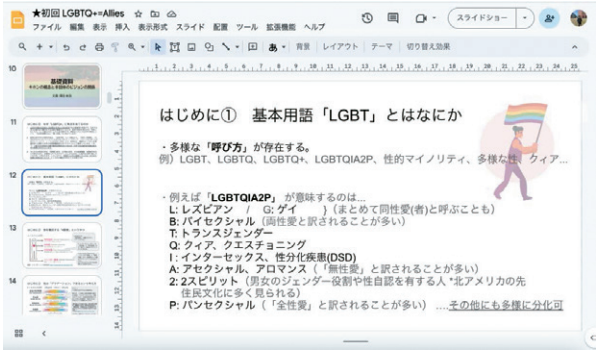
以上のように、数々の変化があるなかで、私自身も、参加者の皆を、「参加者」から「友人」と見るようになってきたという変化がある。これには、当事者学生として、非当事者たちとの間に感じていた「断層」が活動を通して少しずつ埋まってきているように感じるからだと振り返る。本活動を下半期にも更新・継続して、深まった関係性を、アクションの糧にすることを進めていきたい。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

大学の主役は学生です。でも、主役である私たちが、「何を感じ、何を考え、何を求めているのか」を表現しなければ、いつまでたっても「私たちの空間」に大学はなりえません。主役としての自らの立場を自覚して、やりたいこと、やらなければいけないことを、どんどん声に、形にして欲しいと感じます。T-ACT は、他大学も取り組む「エントレプレナーシップ（起業家マインド）養成」の機能だけではなく、「シティズンシップ（市民性）養成」の機能を有していると感じます。ビジネス感覚ももちろん大事ですが、一市民として、私たちが成長するための場がここにあります。未来のプランナーの皆さんには、ぜひこの T-ACT を最大限に活用して、自らや筑波生の市民力を高め、そしてライフロングなレベルでの仲間をここで得て欲しいです！私も連帯しますので！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

良かったことは、上記のすべてを体験できたことです。私や参加者のみんなに生じた変化はどれも貴重なものだと感じています。要望としては、一見センシティブだったり難しそうだったりする企画に対し、「できない理由」ではなく「実行するための可能性」を一緒に考えていってあげて欲しいです。とくに LGBTQ+ に関するものや、性愛に関するものは、大学の公的部署が取り組むのは難しいです。T-ACT には、ぜひ大学の公的な側面と、学生それぞれのリアルな生との仲介に立ち続けていて欲しいと考えます。



都市伝説軍団　@現代怪異のふるさとつくば（22027A）

T-ACT プランナー　串田　日向美（比較文化学類1年）

活動目的

妖怪関係のイベントを行ってみたかったのが第一の理由であり、さらに妖怪藝術団体・百妖箱の代表である嵯峨美術大学講師・河野隼也氏のTwitter での「大物をつくりたい」というつぶやきがきっかけとなった。

筑波大学は全国的にも広い敷地を有しているわりに、大学の看板となりえる大物の山車などがない。さらに、茨城県には牛久沼という河童の伝承で有名な場所があったり、さらに研究学園都市は都市伝説・人面犬発祥の地であるにもかかわらず、妖怪スポットとしての知名度が低いと思われる。筑波大学という敷地を最大限利用し、さらには新たな妖怪・都市伝説スポットとして地域活性化するために、本企画を打ちたてた。

妖怪をモチーフとした仮装イベントはすでに各地域で行われ、盛り上がりを見せている。しかし、今回の仮装行列企画でモチーフとするのは都市伝説であり、そのほかのイベントとは差別化を図ろうとしている。茨城県は現代に入ってから、研究学園都市という、他の地域にはない特色をもった地域であり、その影響があってか現代怪異・都市伝説と称されるものを多く抱えている。そうした側面に注目し、エンターテイメントとして取り上げようというのが企画の中心である。

また、茨城県の都市伝説や現代の怪談に限らず、全国の都市伝説・怪談を学生や一般参加者の間で共有し、交流を深めることも目的の一つである。

具体的な活動計画

【本番当日までの準備】

〈5 月中旬〉

学生の協力者とともに隔週で仮装製作。仮装製作はミーティングのようなもの（オンラインでも対面でもできる、柔軟性をもった交流会）にする。

製作場所は、学内の教室に集まって作る。集まるのが難しければ、オンラインでつないで定期的に話し合う。また、長期休み期間などを利用して、衣裳の材料を買い出しに行く。

〈8 ～9 月ごろ〉

学外者に向けて参加者を募り、宣伝を行う。学外の参加者は、各々が作った仮装を持ち寄って出演していただく。

なお、参加募集は Google フォームを利用する。学外者の方は、連絡をとりあえるよう、参加者リストを作成する。

参加募集の段階で、仮装するものの条件を設ける。例えば、『ゲゲゲの鬼太郎』や『妖怪ウォッチ』などの妖怪キャラクターの仮装は禁止するなど。あくまで、自分でデザインした都市伝説モチーフの仮装に限定する。

〈10月〉

面布制作体験会を毎週実施

石の広場で、本番で飛び入り参加者に使ってもらう面布の制作の体験会を実施する。

【本番当日　10月31日】

夜18:00～からを予定。

行進中は個々人が自由にパフォーマンスをしてもらう。（写真撮影を自由にしてもらったりするなど）石の広場に到着したら、写真撮影会をする。

【雙峰祭（開催期間のうち、1 日のみ）】

また、雙峰祭のステージ発表でもパフォーマンスをしたいと考えている。ステージ発表では、ファッションショーのような感じで参加者の仮装を披露したり、エンターテインメントとしての都市伝説について説明をするなどを行いたい。また、来場者の方と写真撮影を主に行う予定。

活動場所

〈10月31日〉

学内の教室を借りて（男女で二部屋分）更衣室として利用をする。

仮装行列ルート：出発：松美池（仮）→石の広場

〈雙峰祭〉
石の広場で個々人が自由にパフォーマンスをしてもらう。

活動期間
2023/05/07～2023/11/05

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：石村悠実（芸術専門学群 1 年）、喜多香織（比較文化学類 1 年）
P：山澤学（比較文化学類）

活動報告

実際の活動内容
計画進行
6～7 月　広告・宣伝
8 月　PV 作成
　　面布・ランプなどのグッズ作成
9 月　広報・宣伝
　　グッズ作成
10月　イベント最終確認、学生・一般参加者への説明会の実施
　　他イベントにてオリジナルグッズの販売による宣伝活動
11月　企画実施

〈10/31　ハロウィーン　当日の動き〉
平砂宿舎周辺（21:00集合）
↓　　道中行軍
石の広場
※行軍中の写真の撮影などは OK

〈11/3の動き　前日までにやらなくてはならない準備〉
やらなくてはいけないこと
・更衣室の準備（出口の窓に紙を貼る作業）
・スタッフの着る衣装（T-ACT ジャンパー）をスタッフの方々に確実に渡す
・カメラマンへカメラを渡す。カメラマンの子と時間調整（参加できる？）
・物品の搬入の確認（グッズ最終調整）、参加者へのプレゼント準備
・更衣室利用中の水分や茶菓子などの準備
・学生スタッフ最終下見整備員は何を注意しなきゃいけないかを最終打ち合わせ

〈11/4　雙峰祭　当日の動き〉
○受付時間
10:00～　受付開始
10:30　受付完了
・5C410更衣室前にて受付
（5C 棟 4 階）
○更衣室について
・5C410が男性用更衣室
・5C417が女性用更衣室
使用時間
10:00～14:00まで

○当日の流れ
下見などする方がいたら、その荷物を一度預けてもらえるようにしておきたい。
→もう少し早めに受付は開始した方がいいかな？雙峰祭自体は何時からだ？

10:00～	受付開始（ひな吉）
	更衣室の利用
10:55～	5C 棟　宣伝発表場所集合・整列
11:00～	行軍開始
11:30～	ゴール地点到着
	集合写真撮影
	→お客様との個別写真撮影など
12:00～	引き返し開始（来た道を折り返す）
12:30	行軍終了
～14:00	更衣室利用時間終了
14:00以降	T-ACT ボランティアフェスタにてグッズ販売

学生スタッフ

10:00～10:55	串田・山本　更衣室警備兼受付
11:00～11:30	はせがわ　更衣室警備
11:30～12:00	加藤　更衣室警備
12:00～12:30	よこさわ　更衣室警備
12:30～13:00	畑山　更衣室警備
13:00～14:00	串田　更衣室警備

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒50％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
反省点
・コアメンバーの人数不足
→運営の人手が少なく、十分に更衣室警備・および物品販売にさける人がいなかった。更衣室の安全性が微妙だった。ゆえにボランティア学生に頼ることとなり、
→学生スタッフの知識が不足。全員が「この企画はどんな趣旨か？」と聞かれたときに説明が出来ない。という問題につながる。
・広報が弱い。
→どんなものをやるのか明確ではなかった。現代怪異・都市伝説って何？どんな仮装をやればいいのか？っていうのが分からない。そのため、参加者増加につながっていない。おそらく、次点にくる問題であり課題。
・主催のキャパオーバー
→もっともやってはいけないこと。俯瞰して回りが見えていなかった。何を、参加者が求めて居て、お客さんが求めているか、何をやりたいのかがうやむやになってしまっていた。すごくふわっとした企画をたてて、参加者に理想を求めるという、なかなか最悪のことをしていた。
→1 人でやるなら、1 人でできるだけの、ものをやるべきだった。物品販売が完全に赤字。
・うやむやな進行。
時間通りの進行とならず、参加者に時間を持て余す迷惑をおかけする。
突然 T-ACT 推進室へ訪問するなど、いきあたりばったりすぎる進行。
→何かあったときのための予定を作るべきだった。
・学生の学園祭では行列は向かない。
→やればなんとかなるかなとは思っていたけど、何とかならない。そもそも知名度がないので、学生の間に周知徹底が必要。また、妖怪系のイベントは箱ものに向くというがまさにそうで、いきなり普通のお祭りにお化けをぶち込むと、「何それ？」状態がお客様におこってしまう。
→説明しようにも、歩いているので説明にならない。
→企画自体の知名度上げることにはつながらなかった。
→やるならお化け屋敷など、お化け側に引き込むようなものをやらないと、おそらく学園祭という場ではかなり厳しい。
・行列の整備がぐちゃってしまった。
人込みに飛び込んでいくスタイルになってしまい、よい行列ができなかったのと、立ちとまらないでゆっくり歩くことをあらかじめ伝えきれていなかったせいで、なあなあになってしまった。

課題
・どこまでを現代怪異・都市伝説とするか？
　・・・基本的に版権は NG（渋谷ハロウィンとの差別化）
　都市伝説・現代怪異の仮装→「都市から生まれた怪異」「現代の人々が想像する怪異」を表現してほしい。
　　オリジナリティを求める。
　・・・ホラー仮装＝都市モチーフの怪異という認識に落とし込んでしまっていいのか？
　ハロウィンの仮装→既存のキャラクターの仮装、オリジナリティというよりも、いかに忠実にそのキャラに近づけられるか（第一回では OK を出したが、以降は絞っていく）

→ムービーモンスターの扱いをどうするのか？
　イベントの参加怪異について、狼男・フランケンシュタイン・ゾンビ等のムービーモンスター（ここでは映画によって有名になった怪物たちのことを指します。）の受け入れもしようという方針
理由としては
　①渋谷ハロウィン等では、いわゆるコテコテの怪物仮装があまり見られず、その仮装をする人たちの集まるイベントの受け皿が欲しいという声。
　②都市伝説・現代怪異の仮装という条件が難しい（想像があまりつかない）。むしろ、現代的な怪異とはムービーモンスターたちも入ってくるのでは？
　とうとうを考えまして、当イベントは第一回というのもあり、まずは様々な形で現代的な怪異をテーマに仮装参加者を集めて、徐々に枠組みを固めていけたらと思います。
　しかし、後々現代怪異・都市伝説に絞っていく

・来年以降、学内関係者の参加者の怪異たちのグッズ化・キャラクター化を検討していってよいかもしれない
　→学内関係者として参加することのメリットを出していく。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
未解決

活動の体験について
参加者への影響
【参加者の意見】
　本日はお疲れ様でした！
　勝手ながらどうやればより盛り上がるかと考えた点をいくつか上げさせて頂きます。
　・仮装する方の中には更衣に時間のかかる方も多いので、2 時間ぐらい見て頂くと来やすい方もいらっしゃるかもしれません。
　・仮面を被る人の中には視界を犠牲にしてる方も多いので、段差などがある場合は注意喚起して頂ければ安心かと思います。
　・構内が広いので、移動範囲を絞った上で都市伝説軍団のイベントの周知（タイムスケジュールをパンフレットに載せる、構内アナウンスをしてもらうなど）をして頂くと余った時間をお客さんとの交流の時間に割けるかもしれません。
　・どこか古い棟を借りられるのならお化け屋敷みたいにしても面白いのかなとは思います。
　内部事情を知らない上での意見ですのでご参考までに留めて頂ければ幸いです。

　とても楽しく参加させて頂きました！ありがとうございました！

　皆様、お疲れ様でした。
　非常に楽しかったです。また、次回も参加させていただきたいです♪

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3

筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.1（23002A）

T-ACT プランナー　張　建国（人文学学位プログラム博士前期課程2年）

活動目的

本企画は、「筑波大学開学50周年記念切手展　プロジェクト No.0」の後続企画（実行編）である。

筑波大学開学50周年に行われる催事の期間中に記念切手展等のイベント開催を目指す。筑波大学開学50周年というめでたい節目に歴史に残る企画を実行したいと考えている。自分の趣味でもある「切手」をテーマにした展示会やワークショップ等のイベントをプロジェクト No.0で計画し、本企画では実際に実行することを目的とする。

手紙は自身の言語や他言語と直接触れ合うチャンスであり、高い教育の実現にも繋がる。郵便は人々の距離を縮め、世界各国の人々が平等に使える交流の手段である。SDGsの観点からも質の高い教育をみんな、人と国の不平等をなくそう、平和と公正を全ての人にと合致する。パソコンやスマートフォンの普及により交流の手段が増え手軽に交流できるようになったが、その一方でメッセージを手書きする機会がどんどん減っている。この度は、手紙や切手の魅力を皆さんに伝えたく、筑波大学開校50周年を記念する切手展を開催する。

ぜひ会場にお越しいただき友人や家族に手紙を書いてみて、相手を思って丁重に手紙を出す瞬間の感動を味わって頂きたい。そして郵便受けに眠っている自分宛の手紙を見た時は、きっと心をワクワクさせるに違いない。

具体的な活動計画

【記念消印（小型印）の郵頼及び臨時出張郵便局をご利用の方へ】

大学会館では郵頼（郵送で押印依頼すること）に対応していません。郵便物は大学会館などの大学施設に郵送しないようお願い致します。また、記念押印はイベント開催期間（9/29、10/1）に臨時出張郵便局のみで実施しますので、学生・大学教職員は対応出来かねます。ご協力の程お願い申し上げます。

切手、手紙、ハガキ等に興味を持つ方々と一緒にイベントを考案し（プロジェクト No.0）、切手展等のイベントを通して筑波大学開学50周年を祝うイベントを開催する。

＜スケジュール＞

５月・６月

サポートメンバー、参加者は国籍、学年、専門関係なく、広く募集

サポートメンバー間で打合せを重ねながらイベント企画案を固めていく

７月～９月

日本郵趣協会に後援を依頼し、展示作品などを募集する

筑波大学内郵便局と筑波学園郵便局と打ち合わせして、小型印を作成・申請する

記念切手（フレーム切手）及び小型印図案を作成する

宣伝用ポスターを作成し、広報活動を行う

９月29日、10月１日

切手展開催

10月２日

振り返り

＜切手展の概要＞

・ターゲット：切手、手紙、ハガキに興味を持つ人そして筑波大の学生、近隣地域の住民
・開催期間：2023年９月29日（金）、10月１日（日）（※9月30日（土）は開催しない）
・開催場所：大学会館
・筑波大学開学50周年に行われる催事の期間中（２日間）に予定している。

＜切手展内のイベント詳細＞

1、筑波大学つくばキャンパススタンプラリー

新入生でも上級生でも、筑波大学はまだまだあなたが知らない魅力がたくさんある。本イベントは記念消印とは別に、学校の魅力を伝えるスタンプラリーを実施する。一ノ矢生活センター、中央図書館、体芸図書館、医学図書館にスタンプを設置する。９月中旬から設置する予定で、コンプリートした人には切手展の実施期間中に大学会館で特製ハガキを差し上げる。

・準備：スタンプをデザインし、各設置する場所の担当の方と交渉する。

2、記念消印の押印サービス（予定）

小型印とは記念のイベントで限定の消印であり、郵便局で使われる消印と同じ効力を持つ。会期中に二日間にそれぞれ筑波大学内郵便局と筑波学園郵便局に協力していただき、限定の消印（小型印）を作成・申請し、会場で押印サービスを提供する。特別な消印なので、ぜひこの機会にゲットしてください。

・準備：筑波大学開学50周年を記念するため、日本郵便に依頼して歴史に残るような消印を作成する。当日は、郵便局による出張郵便局による押印サービスを提供する。

3、手紙コーナーの設置

会場内設置された手紙コーナーは自由に使用が可能で、久々に親友や家族に手紙を書くことを呼びかける。手紙を書いたことがない人や書き方が分からない人に住所の書き方などについて教える。特に留学生の方に日本の手紙の書き方を教える。

・準備：切手展の会場の一部を使って手紙を書くコーナーを設置、適宜、書き方について説明する時間を設ける。

4、開校50周年記念フレーム切手を製作及び販売

記念消印に合わせて、フレーム切手も製作する。フレーム切手とは日本郵便で発行される切手と異なり、図案部に自作の絵や写真を入れることができる切手である。普通の切手と同じ効力を持ち、実際に手紙を送ることができる。筑波大学創基151年開学50周年を記念して一枚150円で販売する。またプレミアム切手シールを600円で販売する。

・準備：筑波大学開学50周年を記念するデザインのフレーム切手を制作、販売する。販売した利益は全て切手展の費用に賄うことにする。

5、日本や外国切手の展示

日本や外国の特殊切手を展示し、現役の大学生に切手や消印の魅力を伝える。一枚の小さなキャンバスに隠された芸術を発見する期待を提供する。また切手は世相などを反映し、今の世界で起こっている様々なことをぎゅっと収めている。新たな趣味としてもぜひ見てもらいたい。

・準備：切手の基本知識や魅力を伝えられるよう、プランナーが所属している「公益財団法人日本郵趣協会」と連携して、展示する作品を募集する予定である。当日はプランナーが管理、展示する場所にはスタッフを配置し、盗難防止等の管理監督をする。

活動場所

切手展（展示）・記念消印・記念切手販売：大学会館
スタンプラリー：筑波大学の図書館（３カ所）と一の矢生活センター

活動期間

2023/04/26～2023/10/03

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：張抒楊（生物資源科学学位プログラム M2）
　ラ センン（フロンティア医科学学位プログラム M1）
P：田川拓海（人文社会科系）

備考

記念消印（小型印）の郵頼及び臨時出張郵便局をご利用の方へのご注意：
大学会館では郵頼（郵送で押印依頼すること）に対応していません。郵便物は大学会館などの大学の施設に郵送しないようお願い致します。また記念押印はイベント開催期間中、臨時出張郵便局のみで実施し、大学の施設では対応していません。

【切手展開催の実績】

プランナーは2022年９月に、「日中国交正常化50周年記念切手展」を企画及び実施した経験があり、３日間

で170名が来場、メディアでも取り上げてもらった。その実績をもとに「筑波大学開学50周年切手展」を開催したいと考えている（添付資料参照：「日中国交正常化50周年記念切手展実施報告書」）。

【切手の管理】
　展示用切手及び販売用フレーム切手は、プランナーが責任を持って保管する。保管の場所は現在人文社会科学棟の日本語学研究室の鍵付きロッカーにしたいと考える。展示の当日はスタッフを配置し、作品の盗難を防げるようにする。

【感染防止対策】
・対面での実施については茨城県及びつくば市、筑波大学の要請等を確認し、大学の感染症対策に応じて判断する。
・対面の活動を中止する要請が出た場合、企画は完全オンライン実施とする。
・感染防止策が徹底されているかについては、パートナー教員および T-ACT に確認する。
・企画を実施するかの判断については、開催 1 週間前に T-ACT と相談して決定する。
・前日に体調の記録確認をパートナー教員及び T-ACT に報告する。体調不良がある場合は活動を停止する。
・参加者は過去 2 週間以上の健康観察記録を付ける。当日は担当者が会場で記録を回収、管理する（いつでも提出できる状態にしておく）。
・活動の際は出入り、物品を触る前などで随時手指の消毒を行う。
・各自マスクを着用する。
・部屋の換気を行い、密集・密閉を避け、飲食を禁止する。大声を出して会話しないようにする。
・家を出る前に検温してもらい、体調不良者は出席しない。
・活動の以後 1 週間は体調に憂慮し、参加者に問題があれば報告してもらう。
・活動形態、場所、参加者、人数、内容をまとめた活動記録を作成し、担当者が管理する。
・その他筑波大学および T-ACT の設定した感染防止対策ガイドラインに従う。

活動報告

実際の活動内容
　切手展で実施するイベントを考え、切手作品の展示、スタンプラリー、記念切手の制作、記念消印の申請を企画した。
　まず切手の展示については、日本郵趣協会に声をかけ、プロの方に作品を募集した。その結果外部から17フレーム（1 フレームは16リーフで構成され、1 リーフは A4一枚に相当する）の作品を募集することができた。プランナー自身の作品を含めて合計20フレームの作品を展示することができた。
　スタンプラリーに使われる図案はオーガナイザーがデザインして制作した。スタンプを置く場所として学校内の三つの図書館及び一ノ矢生活センターに配置した。広いキャンパスの素晴らしさを皆さんに伝えたと思う。
　記念切手や消印は学生生活課と協力し、冠事業の申請ができ公式ロゴの使用権を得られた。それに伴い、記念切手と記念消印を日本郵便に申請し製作することができた。近隣の二つの郵便局に申請書類を提出し、打ち合わせを重ねて実現ができた。二日間の切手展にそれぞれ図柄が異なる消印を使用することができた。
申請した消印は会場で押印サービスを提供するほか事前では手紙による押印依頼も郵便局で受付している。日本全国及び海外からの依頼があった。筑波大学内郵便局の消印は郵送による依頼は241通であり、当日会場で設置した郵便局臨時出張所には77件の押印があった。そして筑波学園郵便局では郵送による依頼は250通があり、臨時出張所では65件の依頼があった。そして筑波学園郵便局では 1 週間にわたり記念消印を使用し、23件の押印依頼があった。このように二つの郵便局を通して、合計656件の押印依頼があった。筑波大学が開学50周年を祝い、郵便を通して全国にアピールができたと思う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
　大学公式ロゴの使用権が困難である。設営日に人手が不足している。プランナー自身の英語力が不足している。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
　大学公式ロゴは学生生活課と相談の上、冠事業を申請し、使用権を得られた。設営当日は人手が不足しているが、急遽応援を呼んだ。そして撤収日に備えて、人員を確保した。英語について英語が得意のオーガナイザーにお願いする。ただし、オーガナイザーが不在の時は英語が使えず困った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

大学の公式イベントとして、嬉しさはあるが不安も大きかった。大学内部の組織との連携は難しくて、意思疎通が困難となる場面もあった。イベント当日になっても他のイベントの関係者と意見交換ができず、バタバタとなった。最終日には他の記念事業との間でスペースの使用範囲が確定できず、邪魔と言われることもあった。各組織との連携で、自分が成長した面はもちろんあるが、イベントの主催者としてはまだまだ不足している。学生としてイベントを企画することの困難さを実感し、学生を応援する部署の不可欠であることを改めて認識できた。またそれらの部署の存在により心強くと感じた。本来計画が全て順調に実現ができ、目標達成度は100%である。しかし、全てには満足しているかについてはそうでもない。振り返って見ると大学の公式イベントとしての重圧感も湧いてきた。今後は同様なイベントを学内に企画するかと言われたらもうしないと思う。

参加者への影響

運営の方々には大いに助けてもらった。少しだけ切手に興味を持つ人はより切手を身近に感じたと思われる。元々切手などが好きな人にとって、自分と関係のある大学が切手となったことには喜んでいることをそのまま感じられる。イベントの目標としては手紙を書くことであるが、実際には会場で手紙を書く人は一部に限られている。これから切手や手紙に親近感を持ってもらうためには、もっと工夫が必要である。またスタンプラリーはかなり大変であるが、頑張って回ってくれた人も多い。初日にはイベントが終わった後にやっとコンプリートした人もいれば、最終日に大雨の中に回ってくれた人もいる。皆さんの姿を見てすごく感動した。もっと難易度を下げればよかったとも思った。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分がハマっていることを他の人にシェアすることは非常に嬉しいことである。今回の切手展は外部から募集した作品があるほか、自分の作品も展示した。見てくれた人の姿を見てとても嬉しい気分となった。

自分で一度大きなイベントを企画してみるとその難しさを感じることができる。企画してみて後悔するかもしれないが、何もしない方が一番後悔すると思う。

また大学の冠事業として運営するのであれば、今ではもっと慎重に行うべきでも思った。特に展示物がある場合は個々の内容に関しても十分に注意し、全ての人を配慮できるプランナーでなければならない。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

学内の組織との連携は T-ACT の使用は不可欠である。また不安などを相談する場所でもある。T-ACT がある部屋は頻繁に出入りして、今は非常に親近感を感じている。一人で解決できないこともみんなで話せばきっと良くなる。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

プレコンセプションケア　―「知る」ことは「守る」こと―（23006A）

T-ACT プランナー　田中　幸恵（人間総合科学研究群　看護科学学位プログラム　博士前期課程 1年）

活動目的

＜目標＞

大学生を対象とし、プレコンセプションケアの重要性と、今からできるケアについての啓発を行います。

＜目的＞

プレコンセプションケアとは、将来の妊娠を考えながら自分たちの生活や健康に向き合うことです。

このセミナーの目的は、受講者の皆さんが自分の身体について知り、大学生のうちからできるケアにどんなものがあるかなどの知識とアドバイスを皆さんにお伝えすることです。

①栄養・身体づくりについて

厚生労働省の国民健康・栄養調査（2019年）によると、20歳以上の日本人の成人では、どの年代でも、男性４％、女性は11％程度がやせ傾向にありますが、20代女性に限ると「やせ（BMI ≦18.5）」の割合は20％を超えており、“栄養不良”であると問題視されています。

自身の BMI を知り、そこから将来の妊娠にどんな影響があるのか、その予防のためになにができるのかお伝えします。

②感染症予防について

妊娠前からできる感染症予防（今回はとくに子宮頸がん予防）についてお伝えします。

子宮頸がんは HPV（ヒトパピローマウイルス）が原因の疾患で、HPV は女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです。感染しても、ほとんどの人は自然に消失しますが、一部の人ではがんになってしまうことがあります。しかし、子宮頸がんは HPV ワクチンを打つことによって、発症リスクを下げることが出来るので、HPV ワクチンについてのお知らせと、子宮頸がん検診の重要性、またセルフチェックの方法についてもお伝えします。

セミナーの対象者は大学生を設定しておりますが、性別、年齢問わずどなたでも大歓迎です。たくさんのご参加心よりお待ちしております。

具体的な活動計画

【企画内容】

企画日：７月11日（火）16:00～17:00予定
場　所：オンライン（Zoom 予定）
対象者：大学生（性別・年齢問わず）
内　容：
１）ライフプランを考えてみよう
２）自分の身体の状態を知って、自分でできるケアを知ろう
　①栄養・身体づくりについて
　②感染症について

【当日のスケジュール】

あいさつ（５分）
ライフプランを考える（10分）
自分の身体について知ろう、自分でできるケアを知ろう（30分）
　①栄養・身体づくりについて―15分
　②感染症について－15分
まとめ（５分）
あいさつ・アンケート（10分）　計60分

【当日までのスケジュール】
　４月13日～　授業内、自己学習にて知識の習得
　５月９日～　企画内容考案
　５月29日　　企画申請書提出
　企画内容確認：承認され次第　広報開始（ポスター、SNS での周知）
　企画開催：企画終了時にアンケート実施し、報告書作成
　本企画内容は　岡山久代先生の指導のもと、看護科学学位プログラム博士前期課程　春 AB 開設科目『リプロダクティブ・ヘルス支援論』 の授業にて作成致しました。

活動場所
オンライン

活動期間
2023/04/13～2023/08/09

対象
学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：小石川由起子（人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム 博士前期課程 1 年）
　島田早菜衣（人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム 博士前期課程 1 年）
　永田友実（人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム 博士前期課程 1 年）
　谷口愛深（人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム 博士前期課程 1 年）
P：岡山久代先生（医学医療系）

活動報告

実際の活動内容

【企画内容】

企画日時：7 月11日（火）16:00～17:00
場　　所：Zoom にて実施
対 象 者：大学生（性別・年齢問わず）

【当日のスケジュール】

1）あいさつ
2）ライフプランを考えてみよう
3）大学生のいまからできること
　①身体づくり
　②子宮頸がん予防
4）まとめ
5）質疑応答

【当日までのスケジュール】

4 月13日～　授業内、自己学習にて知識の習得
5 月 9 日～　企画内容考案
5 月26日　　T-ACT フォーラムにて面談
5 月29日　　企画申請書提出
適宜、企画内容確認・修正
6 月16日　　企画承認
その後、広報用ポスターの作成
6 月22日　　T-ACT フォーラムにてポスター印刷
その後、広報開始（ポスター、SNS での周知）
7 月11日　　企画開催
企画終了時に参加者に対しアンケート実施
7 月14日　　報告書作成開始
7 月21日　　T-ACT フォーラムにて面談

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

本企画内容は、春 AB 開設科目『リプロダクティブ・ヘルス支援論』の授業にて作成したため、企画日時が差し迫った中での、T-ACT での企画立案・申請となり、とてもあわただしくなってしまった。

対象者の多くが 8 月上旬は期末試験があると考え、それ以前の日程でプランナー・オーガナイザー・パートナーの日程が調整できる日時が本日程であったが、準備に時間をあまりかけられなかったことが難点であった。解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたかオーガナイザーに協力を仰ぎ、短時間での企画内容の修正を行っていき、パートナーである岡山先生や研究室の先輩方にもご協力いただき、事前のリハーサルを通して、短期間で企画内容を改善していった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

プレコンセプションケアにおける背景から、対象者を絞り、対象者に向けた企画内容を設定し、より伝わるセミナーにするためにはどうしていったらよいのか、プランナー・オーガナイザーで考え、企画を作り上げることができた。

プランナー・オーガナイザーは助産師もしくは助産学生であり、今後保健指導などを行う機会があることが予想され、その際に今回の経験を生かしていくことができると考えられる。

参加者への影響

男性も HPV ワクチンが接種可能であり、摂取により肛門がんなどの予防ができることを知らない参加者が多く、女性ばかりに目を向けがちなプレコンセプションケアにおいて、本企画は男性参加者も巻き込みながらセミナーの実施ができたと考えられる。

本企画の効果の検証を行う研究も今後実施予定であり、参加者への影響は今後さらに明らかになってくると考えられる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

企画日時には余裕をもって、企画立案・申請をすることをお奨めいたしますが、T-ACT フォーラムのスタッフのみなさまのサポートのおかげで、短期間でも企画内容を改善し、学内での広報を実施し、参加者を募集することができました。

はじめての企画運営は大変なことも多くありましたが、一度チャレンジしてみると多くの可能性を感じられると思います。学生のうちにこんな挑戦ができる環境はなかなかないと思うので、ちょっとでもやってみようかな…と思われた方は、ぜひ企画立案してみることをおすすめいたします！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

上記項目にも記載いたしましたが、T-ACT フォーラムのスタッフのみなさまのサポートのおかげで、短期間でも企画内容を改善し、学内での広報を実施し、参加者を募集することができました。

ポスター作製し、印刷も T-ACT フォーラムを使用させていただき、さまざまご相談もさせていただき、T-ACT を利用させていただいたおかげでスムーズに企画運営ができたと思います。

本当にありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

「盆ＬＩＶＥ」プロジェクト再始動！（23008A）

T-ACT プランナー　駒野　樹（人間総合科学学術院教育学学位プログラム次世代学校教育創成 SP 修士2年）

活動目的

国際的な学園都市であるつくば市には、学生や研究者をはじめ、外国の方や地域の方など様々な人々が暮らしています。「つくばに集う多様な人々が、盆踊り・お祭りを通じて交流できる場をつくりたい！」という思いから始まったのが、「盆 LIVE」です。盆 LIVE は、日本の伝統文化である盆踊りと LIVE を掛け合わせた、古くて新しいエンターテイメントです。伝統的な民謡から、J-POP・洋楽・アニメソングなど、いろいろな曲に合わせて盆踊りを踊ります。

2015年から始まった盆 LIVE は、これまで学内や地域のイベントなどに参加して多くの方々と交流してきました。また、2019年までは毎年、盆 LIVE 本祭を開催し、盆踊りだけでなく出店やパフォーマンスも行って盛り上げていました。

残念ながら、新型コロナウイルスの影響で活動の目処が立たず、2020年度途中から活動を凍結していました。しかし、ようやくコロナ禍も明け、学内・地域のイベント等が再開を果たしている中、ありがたいことに盆 LIVE を楽しみにする声も多く聞かれます。まさに今、盆 LIVE が築いてきた人々との繋がりを改めて実感しています。

クリエイティビティと魅力に溢れ、地域に愛される盆 LIVE を、これからも繋いでいきたいと強く願い、T-ACT アクションとして再スタートします。

盆踊りを通じて、様々な人々が交流でき、地域の活性化につながるような場の創出を目指していきます。

具体的な活動計画

活動内容については、例年 9 月開催の盆 LIVE 本祭に向けて、ミーティングや各種手続きなどを行っていました。また、盆 LIVE の周知および地域との交流を図り、学内や地域のイベント（夏祭りなど）にも参加してきました。

しかし、コロナ禍の影響でしばらく活動することができなかったため、現在メンバーは数名しかいないという状況です。そのため、盆 LIVE の再開・継承に向けて、まずは盆 LIVE の広報・運営メンバーの募集を最優先に活動していく予定です。また、第一歩として、留学生対象の学内イベントに参加することを予定しています。

【現在予定している活動内容】
・盆 LIVE の広報、新規メンバーの募集
・学内や地域のイベント等への参加、盆踊りパフォーマンスの実施
・ミーティング
・盆踊りの練習（通称「おどれん！」）

【活動スケジュール】
6 月～
・盆 LIVE 広報活動、新規メンバーの募集（以降、継続して実施）
・活動再開に向けた準備
7 月～
・広報活動
・「おどれん！」実施
…月 1 ～ 2 回、およそ 1 時間～ 1 時間半ほどを予定。
…場所は、中央図書館 - 総合研究棟 B 棟間のスペースなどを予定（臨機応変に変更）。
…①盆 LIVE の活動紹介、②伝統的な盆踊りのレクチャー＆現代音楽に合わせて踊ってみる！
③盆踊りのアレンジ＆コラボ曲のアイデア出しなど
・「GV 夏祭り2023」に参加
概要：夏祭りを楽しめるゲームや課外活動団体によるパフォーマンス、花火などのプログラムなどが企画されており、開催前半と後半で留学生と一緒に踊る。

日時：7 月26日、18:30～20:30
会場：筑波大学グローバルヴィレッジ敷地内
参加対象者：グローバルヴィレッジ入居者や短期ショートステイハウス入居者
主催：学生部
出演予定：19:00～19:30（前半）、20:00～20:30（後半）
内容：①来場者に向けて盆 LIVE の紹介、②伝統的な盆踊りのレクチャーと実践！
③現代音楽に合わせて盆踊りを踊ってみよう！

8 月～12月
・広報活動、新規メンバーの募集
・引き継ぎ、盆 LIVE 本祭開催に向けた作業
・イベント等への参加（ 9 月に参加予定有り）

盆 LIVE 本祭は、例年、研究学園駅前公園の石畳部分を借りて開催しています。来場者数は、2019年に約1,100人を記録しました。多くの人々に参加してもらえるように広報していきます。
運営メンバーに加えて、本祭当日はボランティアスタッフも募集し、準備・片付け、お祭りの盛り上げを手伝っていただく予定です。
しばらくの活動凍結期間を経ての再始動となります。まずは運営メンバーをどんどん募集し、これまでの盆 LIVE を引き継ぎつつも、メンバーの自由なアイデアを取り入れた新たな形の盆 LIVE を創り上げていきます。

【盆 LIVE メンバー募集】
盆 LIVE の運営・お祭りを通じた地域活性化に興味のある方、盆踊りや踊りが好きな方、大歓迎です !!

活動場所
ミーティングなどは大学内、または必要に応じてオンラインで行います。
活動内容に応じて、適宜場所は変える予定です。

活動期間
2023/07/01～2023/12/31

対象
学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：井尻あゆ（理工情報生命学術院・生命地球科学研究群生物資源科学学位プログラム修士 1 年）
樋口将也（人文・文化学群比較文化学類 4 年）
P：木村周平先生（人文社会系）

備考

○次年度盆 LIVE 開催に向けてのスケジュール
（以下については、過去のスケジュールを参考に記しています。）
2024年
1月～
・引き継ぎ
・代表、今後の方針、盆 LIVE のテーマ決め等
・新年度の新歓に向けた準備
4月～
・新歓、新規メンバー募集
・広報活動（授業での宣伝など）
・関係者などへの挨拶
5月～
・盆 LIVE 本祭の企画内容を詰める
…内容に応じて、出店や出演の交渉・依頼を行う
6月～
・各種手続き・申請など
・広報活動
7月～
・広報活動
・「おどれん！」実施
・イベント等への参加
8月～
・盆 LIVE 本祭に向けた直前準備
…各所への連絡やスケジュール作成など
・広報活動
・「おどれん！」実施
・イベント等への参加
9月～
・盆 LIVE 本祭に向けた直前準備
・広報活動
・盆 LIVE 本祭開催（開催後は、お礼・挨拶回り、報告書作成など）
など

○盆 LIVE 本祭のタイムスケジュール例
（※2019年開催「盆 LIVE2019」のものを記しています）

日時：2019年 9 月21日（土）
場所：研究学園駅前公園

13:00　キッチンカー販売開始
14:00　盆 LIVE2019開会
　　オープニングアクト「お囃子演奏とつくば市吉瀬地域の盆踊り」
15:00　パフォーマンス①「フォルクローレ演奏」
15:45　盆踊り①「伝統的な音源に合わせた盆踊りとその練習」
16:30　パフォーマンス②「ヒーローショー」
17:15　盆踊り②「子ども向けの現代音楽が中心の盆踊り」
18:00　パフォーマンス③「ヲタ芸演舞と盆踊りとの出演者コラボ」
18:45　盆踊り③「オリジナル盆踊り含め様々な現代音楽で盆踊り」
19:30　盆 LIVE2019閉会
（20:00　来場者帰宅、21:00　完全撤収）

活動報告

実際の活動内容

新型コロナウイルスの影響で2020年度途中から活動を休止していた盆 LIVE の復活、ひいては来年度以降の継承を目指して活動を行った。

喫緊の課題として、運営メンバーの不足があった。また、休止期間が長かったため、そもそも盆 LIVE の存在が周知されていないという課題もあった。そのため、盆 LIVE の広報及び運営メンバーの募集を最優先事項に掲げ、主に学内イベントに参加・出演することで、盆 LIVE の魅力を伝えるよう努めた。以下、今回行った主な活動である。

①盆踊りの練習（通称「おどれん！」）
②ミーティング（不定期）
③ SNS やホームページなどを用いた広報活動
④授業や学内イベントなどへの参加：⑴春 BC 授業「みんなで創ろう『つくばアクションプロジェクト』」、⑵グローバルヴィレッジ夏祭り、⑶筑波大蹴球部の夏祭り「きりの葉祭り」、⑷筑波大学国際交流フェス「IMAGINE THE 海外」、⑸T-ACT 公開シンポジウム、⑹筑波大学国際交流イベント「日本文化ウィーク」
⑤地域のお祭りへの参加：⑴土浦市国分町夏祭り、⑵学園の森夏祭り2023 at MeeToco

各種イベントへの参加について、企画時点では④⑴及び⑵のみ参加を予定していた。しかし、参加者からの反響が非常に大きく、多くの方々に本活動に興味を持っていただけた。そのおかげで、各所から盆 LIVE の出演依頼のお話を頂き、最終的には色々なイベントに参加して盆 LIVE を広めることができた。

一方で、盆踊りが夏の風物詩であるため、夏以外の時季に活動するのが難しかったこと、ミーティングや広報活動を継続的に実施できなかったことは反省点である。詳しくは以下の「実施中の困難と解決策」で述べる。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

活動に際して困ったこととして、主に以下 3 点が挙げられる。

①活動を継続的に行えなかったこと。
ミーティングにはじまり、SNS やホームページなどを利用した広報活動、踊りの練習、イベント参加の打診などを継続して行うことができなかった。メンバーの人数が少ない上、それぞれ学業等で忙しかったため、十分な活動時間を設けるのは難しかった。
②企画立ち上げの時期が遅かったこと。
企画を申請したのが初夏と遅く、メンバー数も十分に確保できなかったため、従来のような本祭を企画・開催することは叶わなかった。
加えて、盆踊りは夏の風物詩であり、祭りも一般的には夏に開催されることが多いため、それ以外の時季に盆 LIVE の活動を行うことが難しかった。
③盆 LIVE を継承する計画を十分に立てられていなかったこと。
盆 LIVE を継承していくにしても、引継ぎのイメージや段取りがあまり立てられていなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①は基本的に解決には至らなかったが、できるだけ活動の負担を減らせるように工夫した。例えば、オンライン上でミーティングや情報共有を行うことで、メンバーそれぞれの都合に合うようにした。②に関しては、夏は各種イベントに積極的に参加し、多くの方々に盆 LIVE を体験していただいた。夏以外の時季にも、筑波大学国際交流イベントで盆踊りを行ったり、T-ACT 公開シンポジウムに参加したりして、盆 LIVE の周知に努めた。③に関しては、本報告書執筆時点ではまだ今後の運営メンバーを集められていないが、引継ぎについて計画中である。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

私は、コロナ禍以前から盆 LIVE の活動に参加し、2019年度には盆 LIVE 本祭の開催にも携わった。当時の経験は今でも忘れられないくらい印象的で、次に向けてまた頑張ろうと張り切っていた矢先に訪れたのがコロナ禍だった。2020年度盆 LIVE 代表を務めていた私は、その年の本祭開催をあえなく断念し、本活動もそのまま長い休止期間に入ってしまった。

そんな中で迎えた2023年度。グローバルヴィレッジ夏祭りが久々に開催されることとなり、盆 LIVE にもぜひ参加いただけないかと職員の方や T-ACT の先生方にお話しいただいたのが、本企画始動のきっかけだった。盆 LIVE 復活に向けて絶好の機会ではあったのだが、正直なところ、学生生活も残りわずかという時期に満足い

く企画を創り上げることができるのだろうかとかなり不安だった。しかし、やはりコロナ禍以前の盆 LIVE の楽しさが忘れられず、また自分の代で本活動を絶やしてしまうのが悔しく、今回 T-ACT 企画として新たに立ち上げることに決めた。そして、盆 LIVE をより多くの方々に広め、今後も継承してくれる運営メンバーを募ることを目指して活動してきた。

結果的には、現時点でいまだ本活動の継承の目処は立っていない。しかしながら、企画立ち上げ当初には予想だにしなかった大きな反響を頂くことができた。イベントに出演して盆LIVEアレンジの盆踊りを披露する度に、参加者の皆さまから「とても楽しかった！」「盆 LIVE 面白いですね！」といった素敵な言葉を頂き、とても大きな達成感を得ることができた。何よりも企画した自分自身が、盆 LIVE やそこから生まれた人々との繋がりを心の底から喜び楽しめていたなと感じる。

加えて、「イベントはみんなでつくりあげるもの」ということを学ぶことができた。どんなテーマのイベントにするのか、どんな踊りを盛り込むのかなど、イベントの諸々を企画するのは、私たちプランナーやオーガナイザーの役割である。しかし、私たち企画側だけがいてもイベントは成立しない。企画立案をサポートしてくださる方々やイベントに参加してくださる方々の支えがあってこそ、充実したイベントを創り上げることができる。今回参加したイベントにおいても、参加者が率先してイベントを盛り上げようとしてくださった。そうした方々の姿を見て、私たち企画側もとても嬉しく楽しい気持ちになり、さらに楽しもう！と思えるようになった。こうした相互作用が活動成功のために大切なのだと強く実感した。

参加者への影響

本企画の立ち上げにあたり、今も在学している当時の盆 LIVE メンバーに声をかけ、活動に参加してもらった。メンバー全員、久々の盆 LIVE の活動をとても楽しんでいる様子で、プランナーとして非常に嬉しかった。盆 LIVE アレンジの盆踊りを考案する際には、盆踊りに合いそうな楽曲をたくさん紹介してくれたり、素敵な振付を考えてくれたりと、精一杯尽力してくれた。上述の通り、十分な活動機会を設けることはできなかったが、メンバー全員が知恵を出し合ってイベントを創り上げることができた。参加者からも嬉しい声をたくさん頂け、多くの方々に盆 LIVE を知って、興味を持っていただけたのではないかと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT は皆さんの「やってみたい！」を精一杯応援してくれるプロジェクトです。「こんなことできるかな…」「どうやって活動すれば良いんだろう…」など、やってみたい気持ちはありつつも、不安に感じることも多くあるでしょう。でも大丈夫です。気軽に T-ACT の先生方に相談してみてください。皆さんの活動を精一杯応援してくださいます。出発点である「やってみたい！」を大切にして頑張ってください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

盆 LIVE 再始動に向けて活動するにあたり、自分一人だけでは迷っているだけで、きっと動くことはできなかったと思います。T-ACT の存在があったからこそ、ここまで活動するができました。本来の目的を達成できたとは言えない状況ですが、T-ACT を通して、たくさんの素敵な方々と繋がることができましたし、自分自身大きく成長できたと感じています。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

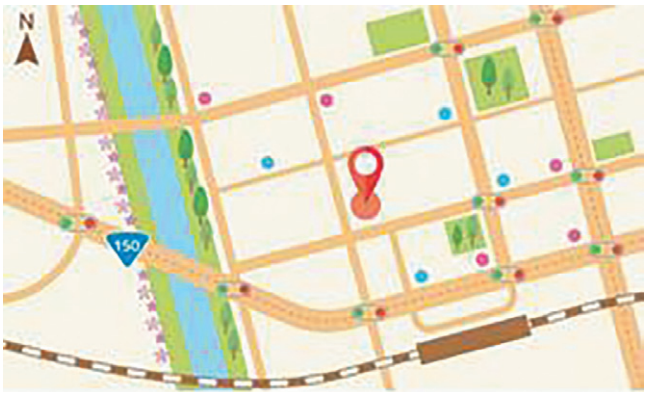
自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

Medical Map for Foreigners（23009A）

T-ACT プランナー　相馬　淳乃（看護学類3年）

活動目的



留学生のチューターをしている時、留学生が日本の医療機関を受診するにあたり、「まず、どこの病院に行けば良いか分からない」や「英語対応の病院はインターネットに載っているが、具体的に何をどの程度対応してくれるのか分からない」という相談を受け、留学生や外国籍の人の医療アクセスについて興味をもった。

出入国在留管理庁が行った在留外国人に対する基礎調査（令和３年度）によると、『病院で診察・治療を受ける際の困りごと』という項目において、令和２年度・令和３年度共に“どこの病院に行けばよいか分からなかった”（23% 前後）が一番多く、またつくば市の外国人人口は全国平均より6.09倍多いという背景からも、言語や文化等に応じた医療機関の情報の需要があるのではないかと考えた。

以上のきっかけと情報から、外国の人が医療にアクセスしやすいツールの一端として、つくば市内で外国語に対応している医療機関や、どの程度対応しているか（問診票だけなのか、英語が話せるスタッフがいるのか）などを視覚的にわかりやすく示したマップの作成、そしてそのマップ使用が、つくば市内に住む外国籍の人の医療アクセスに寄与することを最終目標とする。

具体的な活動計画

＜活動内容＞

バリアフリーマップのアイコンのように視覚的に理解しやすいアイコンを作り、医療マップの作成を目指す。

→今学期では、作成したマップをもとに市役所との連携、及び SNS 等での発信を行う。

＜対象者＞

・留学生・つくば市在住の外国籍の人

＜スケジュール＞

・1 月～2 月上旬

作成したマップの最終調整（留学生や外国籍の方にフィードバックを貰い、最終調整。また IT 技術面においても改良予定）

・2 月中旬～3 月

広報活動（SNS、大学内、国際交流団体）、報告（協力頂いた病院など）

・4 月以降

活動評価（実際の活用状況と改善点を見つけ、PDCA サイクルを回す。）

活動場所

学内教室・オンライン

活動期間

2024/01/20～2024/05/31

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：上岡優月（看護学類３年）、金原希（看護学類３年）

P：福澤利江子（医学医療系）、Mayers Thomas David（医学医療系）

活動報告

実際の活動内容

【データ集め】

・「茨城県医療機能情報提供システム」を用いて英語と、（つくば市で在留外国人数が多い）中国語・韓国語・ベトナム語に対応しているつくば市内の病院をリストアップする。

・アンケートを作成して、医療機関に送付し Google フォームか返送にて回答を得る。期限までに回答がなかった医院に対してリマインドのはがきを送る。

【Medical Map の作成】

・得られた回答を集計する

・「stroly」を使用し Medical Map を作成する。

（※茨城県医療機能情報提供システムと stroly にはメールにて使用許可をいただいた）

【Medical Map の広報】

・作ったマップを広報するため、SNS・ポスターを制作した。

・今後はそれらを実際に活用してさらに広報していくことを予定している。

【協力してくださった病院への報告】

・アンケートに協力してくださった医療機関へのお礼のメールと、出来上がったマップの報告をしている段階。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒75％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

1．最初のアンケートを送付した際に、協力に対する御礼品をつけたことに加え、回答方法を Google フォームと郵送を返信する形の 2 種類を取り、返信用の封筒には宛名の記入と切手の貼付を行ったが、回答を得られたのが16/36件で、半数以上の医院から回答を得ることができなかった。

2．マップを見た留学生からの意見の中に、受診する病院を選ぶ際は国際交流団体や SNS、知り合い、病院検索サイトなど、独自の情報網があることを知り、マップを周知する方法に悩んだ。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

1．パートナーの先生からアドバイスをいただき、期限内に回答が得られなかった医療機関に対してリマインドのはがきを送った。それにより、追加で 7 件の医療機関から回答を得ることができ、合計で23/36件の医療機関が協力してくださった。

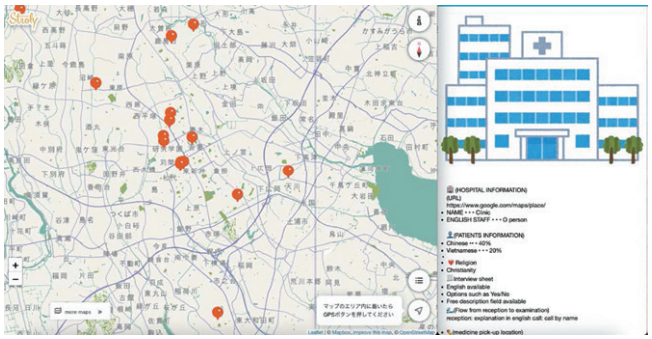
2．留学生からの意見を基に、マップを SNS で発信し、多言語でマップが見られるよう検討している。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

企画を進めていくにあたり、T-ACT の方やパートナーの先生、医療機関の方々が相談に乗ってくださったり、費用の面での支援をしてくださったり、アンケートに協力してくださったり、多くの方が協力してくださった。自分たちで”やりたい”に向かって積極的に行動すれば、たくさんの支援をくださる方がいて、やりたいことをやれる環境にあると感じた。

また T-ACT 公開シンポジウムへの参加を通して、自分たちの活動をどのような形で伝えたら、大勢の人に伝えることができるのかについてプレゼンテーションの方法を 3 人で試行錯誤した。他の 2 組の活動をきいたり、市役所の方とのパネルディスカッションに参加したりする中で、より地域に密着した活動へと目を向けることができた。



参加者への影響

外国籍の人々に対して自治体はどのような対応をしているか実態を知ることで、市が行うサービスに意識を向けることができ、幅広い背景を持つ人々に寄り添った支援を身近に感じることが出来た。今後看護師や保健師として活動していく中で、将来に生かすことができるのではないかと考える。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何か少しでも興味があったり、やりたいことがあれば、明確に方針が決まっていなくても先生や友達に話したり、T-ACT の先生方に気軽に相談してみると良いと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

活動を形にする前の企画段階から、スケジュールや企画に必要なことを調整してくださり、マネジメント面で非常に丁寧に支援してくださいました。また、T-ACT 公開シンポジウムに招待してくださったり、アンケートを郵送する際の封筒をいただいたりなど、多方面でサポートしてくださりとても助かりました。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

＊まだ、修正点が多々ありますが、現段階の地図です。

【人工言語作成プロジェクト】人工言語勉強会！（23010A）

T-ACT プランナー　尾坂　拓郎（芸術専門学群4年）

活動目的

人工言語作成プロジェクトは、言語の中でもマイナーな分野である人工言語の魅力を多くの人に知ってもらいたいという思いで昨年の春に始動したプロジェクトです。「筑波大生の共通語」をコンセプトに、音素や文法、文字などを一から考えて言語を制作しています。昨年度末には、言語名が校章の桐の葉から「キリーナ語」に決定しました。

今回は、そのキリーナ語を実際に筑波大生に使っていただくために、初のワークショップを開催します。

【企画立案の背景】

言語学や語学の学習が好きで、人工言語を作ることに興味をもったのでこの企画を提案しました。

筑波大生の『共通語』をコンセプトに、音素・文法・語彙など一から言語を作りたいと思っています。一番の目的は、「自分たちの手で言語を作る」というロマンある活動を楽しむことです。また、言語の面白さを多くの方に知ってほしいと思っています。言語は習得することも楽しいですが、自ら単語や文法を作ってみると今まで気づかなかった言語の奥深さを知ることができます。

【人工言語とは】

人工言語とは、その名の通り人為的に作られた言語のことを言います。日本語や英語など、みなさんが知っている大抵の言語は自然発生した言語であり、長い歴史の中で文法や語彙が形成され、変化していっています。一方人工言語は、個人や少人数の団体が意図的に文法や語彙などを決定するものなので、文法や語彙が変化しにくいのが特徴です。

具体的な活動計画

【スケジュール】

7月：ワークショップ開催に向けての打ち合わせ（開催日時や場所、内容を決める）
8月：テキスト作成・印刷、参加者募集
9月：ワークショップ開催、振り返り

【ワークショップの内容】

キリーナ語の入門講座です。テキストを用いて、大学生活やSNS上で使える（かもしれない）単語や簡単な文法など学びます。

・このプロジェクトについて / キリーナ語について
・キリーナ語の発音と文字
・文法解説
・キリーナ語のアルファベットを書いてみよう！
・練習問題を解いてみよう

開催日時：9月11日（月）14:00～15:00
開催場所：5C501
所要時間：約1時間
参加方法：Google Form にて申込↓
https://docs.google.com/forms/d/1yorDNfGYoCqj4q3qWc5qBLzSzVMnrRc1vuQaEaRUBD4/viewform?edit_requested=true
持 ち 物：鉛筆、消しゴム

活動場所

5C501

活動期間

～2023/09/30

対象
学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：森伸之介（人文学類 2 年）、鈴木花歩（人文学類 2 年）、齋藤瑞生（社会工学類 1 年）
P：池田潤（人文社会系）

活動報告

実際の活動内容
昨年度からの活動で制作してきた人工言語「キリーナ語」は、「筑波大生の共通語」というコンセプトで作られています。今回はキリーナ語を実際に筑波大生に使ってもらうため、初のワークショップを開催しました。
ワークショップのために制作したキリーナ語入門テキスト用いて、約 1 時間の文法講座を行いました。参加者には練習問題を解いてもらったり、キリーナ語の文字で自分の名前を書いてもらったりしました。
4 名の筑波大生の方が参加してくださり、和気藹々と人工言語について語ることができました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
特になし

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
特になし

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
自分で立ち上げて進めてきた企画が、やっとワークショップを開催できる段階まで到達する事ができたのが非常に感慨深かった。

参加者への影響
今回のワークショップに参加してくださった方に、この活動のメンバーに加わりたいと言ってもらえた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
特になし

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
T-ACT の活動として宣伝することで、参加者が集めやすい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

筑波大学お掃除大作戦！（23011A）

T-ACT プランナー　高橋　空希（総合学域学群3類　1年）

活動目的

【目的】
　石の広場周辺の地面を綺麗にするとともに、参加者同士の交流を深める。

【きっかけ】
　私が受験で初めて筑波大学に来た時に感じたこととして、かなり汚れているということがありました。入学してからも、汚れている場所は多々見つかり、雨が降った後の日は靴の裏は泥で塗れていることもよくあります。キャンパスが汚れているのは、毎日使っている生徒や教職員の QOL 低下につながることや、オープンキャンパスなどで来た学校外の人への印象悪化など様々な悪影響を引き起こします。この状況をどうにかするため、掃除を行いたいと思いました。しかし、掃除する範囲が広いため、1 人や数人ではかなり大変で辛いと思います。そこで、T-ACT を通して行うことで人数を集め、楽しく掃除ができると考えたため今回企画させていただきました。

具体的な活動計画

7 月～9 月
石の広場周辺の建物の水道の使用許可や、清掃のやり方が問題ないか等の学校側との連携
ブラシやホースといった借りられる清掃用具を確保
（学内部署より、協力してもらえる可能性を確認。企画が承認され次第、協力していただけるところを増やしていく予定。）
また、承認が通り次第、Google フォームなどを用い、参加者を募る
参加者の確認及び掃除用具の確認
参加人数に合わせて掃除する場所の範囲や行う作業を検討

10月
掃除大作戦実施：10月14日（雨天時15日実施予定）
実施後、振り返りを行い、今後の活動について検討
・当日の流れ
　午後 1 時に石の広場集合
　人数に応じて何班かに分かれる
・掃除方法
　各掃除区域にある水道からホースを繋げて掃除する場所に水を撒く or バケツに水を汲んで運ぶ
　ブラシで磨く
　汚れた水は排水溝まで流す

活動場所

石の広場および周辺（図書館前や 1、2、3 学）

活動期間

2023/07/06～2023/10/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：法田彩花（社会学類 1 年）
P：金澤健治（システム情報系）

備考

・イベント中に起こった不慮の事故対策に保険への加入を検討しています。
・申し込みフォーム：https://forms.gle/Q6DLTRMM5CX3Aabq7

活動報告

実際の活動内容

【準備】

・大学各部署に掃除用具の貸し出しができるか連絡しました。結果として、以前行われたT-ACTの活動で用いた掃除用具と、施設部からホースをふたつお借りすることができましたが、多くの部署は掃除用具を所有しておらず、十分な量借りることができませんでした。
・中央図書館周辺と人文社会学系棟周辺の散水栓の使用許可の連絡を各建物を管理している部署に連絡しました。
・参加者をSNSやT-ACTの企画ページなどを用いて集めました。X（元Twitter）を中心に約40人の方々が参加フォームを送ってくれました。
・参加者の人数をもとに必要な掃除用具の数を考え、不足している掃除用具の購入やその他当日必要になる物品の準備をT-ACTフォーラムの力もお借りして行いました。

【本番】

企画本番は参加フォームを送ってくれた方以外にも、当日参加の方もおり、50人弱の人に参加していただきました。
ホースをふたつ用意していたので、二つのグループに人数を分け石の広場と中央図書館周辺の掃除を行いました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

必要な物品が多く、1人で運ぶことが難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

車を持っている人に協力をお願いしたり、参加者に荷物を運んでもらうのを手伝っていただいた。

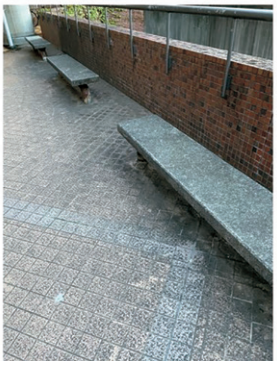
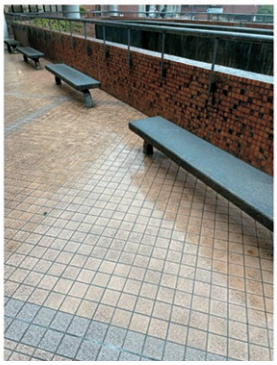
活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

この企画は「ここら辺掃除したい」という具体的なことを一切考えないままT-ACTの方に相談しに行ってしまい、結局挫折してしまうのではないかと思いながら企画を始めましたが、一度相談しに行くと、具体的な案が次々と浮かび、また対処しなければいけない問題も明確になり企画が進んでいきました。思いつきでもすぐ行動したのはとてもよかったと感じています。しかし、スケジュールを具体的に考えないまま企画を進めてしまい、企画本番日が近いというのに準備が全然終わっていないなど、余裕のある活動が全くと言っていいほどできていなかったため、スケジュール管理の大切さを思い知らされました。また、面倒臭いことを先送りにしてしまうことで生じる後への負担をみにしみて感じたので克服したいと感じました。

また、企画当日は50人弱というそこそこの人数に来ていただき、うまくまとめられるかがとても不安でしたが、参加者各位が自主的に行動してくれて、円滑に企画を進めることができたので、参加者の皆様には本当に感謝しています。企画終了後、荷物をどう運ぶかに悩んでいる時も多くの人が運ぶのを手伝ってくれてとてもありがたかったです。

活動前　活動後　活動前　活動後

今企画は企画当日に何人かに手伝っていただいたものの、基本的に私 1 人で進行していくことになってしまい、準備段階で私にかかる負担が大きくなってしまいました。何人かに企画の手伝いをお願いしようとも考えたのですが、ある程度企画の準備が進んだ状態で手伝いをお願いするのが申し訳なく感じるなどで結局お願いすることができませんでした。今企画で、協力してくれる人の大切さを思い知ったので、次何かを企画するときには、企画に賛同してくれる人を探すことが大事だと感じました。

今企画を通して自分の長所と短所、そして協力してくれる人の大切さを知ることができました。この企画をして本当に良かったと思いました。

参加者への影響

企画当日の最初は一緒に来た人とだけしか話さないみたいな感じになっていましたが、掃除を進めていく中で、参加者の方々は学年も様々で、所属する学類も様々、所属するサークルも様々ということで、参加者同士の会話がとても盛んに行われており、楽しく掃除をすることができていそうでした。また、ちょっとしたトラブルの時も、参加者同士が協力し合い、解決してくれたので明るく活気ある雰囲気でやることができました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

具体的な案が浮かんでなくても、T-ACT に来ればそれを具体的なものにしてくれるので、もしやりたいことがあるけど今何をすればいいかわからないという方がいれば T-ACT に行ったらいいと思います。

特に、大学内で何かしたいと考えている方は、T-ACT で活動を行うことで、大学の各部署への連絡や備品の貸し出しなど、有利に働くことが多いのでおすすめです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画の周知を容易に行うことができ、参加者を募りやすくなった。

今企画を実施するにあたり、大学の各部署に連絡し、許可を得る必要があったが、T-ACT に承認されているということを伝えることでスムーズに話を進めることができた。

企画で用いたブラシやホース、ネームタグや台車など様々な物品の支援をしていただき助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

日韓みらいファクトリーアワード2023（令和5年度日韓青少年対話型交流事業）（23013A）

T-ACT プランナー　寶積　應公（社会・国際学群社会学類）

活動目的

両国 No.1日韓交流教育プログラム：
次世代人材の育成を通じて社会に貢献してまいります。

日韓青少年対話型交流プログラム
2023 Japan-Korea Future Factory Awards

私たちは「境界を超えて皆が共に創る新しい日韓交流プラットフォーム」です。
本事業に関する詳細は下記サイトをご参照ください。
https://miraefactory.jp/project

＜大学報道発表 令和６年２月27日＞
・日本語
https://www.tsukuba.ac.jp/news/20240227153307.html
・英語
https://www.tsukuba.ac.jp/en/news/20240228091915.html
・韓国語
https://www.tsukuba.ac.jp/news/pdf/20240227153307.pdf

＜事業名称＞
令和５年度日韓青少年対話型交流事業

＜事業枠組み＞
創基151年筑波大学開学50周年記念冠事業
令和５年度茗渓会学生活動支援事業
公益財団法人日韓文化交流基金 人物交流助成事業

＜事業協働枠組み＞
ヘテパシフィック株式会社、株式会社三養ジャパン、独立行政法人日本学生支援機構、韓国観光公社、つくば市、一般財団法人自治体国際化協会、江原特別自治道日本本部、株式会社 HANATOUR JAPAN、茨城県、日本政府観光局、一般社団法人日韓経済協会、済州観光公社、韓国国際交流財団、一般社団法人茗渓会、首都圏新都市鉄道株式会社、独立行政法人国立青少年教育振興機構、SNOW Japan 株式会社、独立行政法人国際交流基金、公益財団法人日韓文化交流基金、タクトピア株式会社、東京韓国教育院、神奈川韓国綜合教育院、大阪韓国教育院、埼玉韓国教育院、在日本大韓民国民団中央本部、社団法人韓日協会
＊協賛、協力、後援、プログラム提供、周知・審査協力等

＜事業運営責任者＞
寶積 應公

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により数々の国際交流プログラムが中止に追い込まれた時代。留学先で韓国の生徒と交流を行った関係で日韓交流を促進する一助になりたいと考えるようになりました。加えて、メディア等により最も厳しい日韓関係と言われた2022年に、自分で日韓交流の機会を作りたいという思いから、日韓の若者が交流できる活動を企画することに至りました。

高校生だった昨年、日本、韓国という境界を越えて日韓の学校や行政機関、企業が力を合わせて開催した「日韓高校生文化 PR アワード」は日韓の様々な地域から参加者が集まり、成功裏に終了しました。当時、在学していた高校と、交流があった韓国ソウル市所在のある高校を拠点に、多くの民間企業や行政機関の皆様のご支援のもと、自分が中心となってイベントを企画し実施しました。このような体験からいろんな方々と関わることができ、さらに、関係者からも高評価をいただきました。

そこで、成功裏に終了した「日韓高校生文化 PR アワード2022 」をもとに、今年度は大学生も参加して日韓交流を活性化させるイベントにしたく、「日韓みらいファクトリーアワード2023」を企画しました。日韓の若者が「文化」をテーマに対話を行うことで、国や言葉の壁を越えた交流を図るプログラムを実施します。昨年度は所属している高校からのサポートのもとで進めましたが、今年は筑波大生を中心に中高校生をサポートしながら開催したく、T-ACT アクションとして企画を申請しました。特に、筑波大韓国人留学生、国際交流や日韓文化に関心がある学生にたくさん参加してもらい、交流を深めていくことを期待しております。

今後、本活動を通して日韓の若者が「ときめく未来」を「主人公」として想像することができるプラットフォーム（即ち、「ときめく未来」のファクトリー）になることを期待しております。そのために、2030年を

見据えたミッションとして「日韓の信頼関係を発展させる」と定め、活動を続けていくことを考えております。
その後、本学の創基151年筑波大学開学50周年記念事業委員会より記念冠事業としての認可を受け、本学の公式的な行事へと昇格いたしました。私たち運営事務局は、本学がこれまで歩んできた歴史への敬意と未来への期待を胸に、記念事業スローガンである「DESIGN THE FUTURE, TOGETHER. ―ともに拓く未来―」の実現に向けた努力を加速させ、事業を積極的に推進してまいります。
関係者の皆様の温かいご支援とご協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。

具体的な活動計画

本企画は、日韓の中学３年生～大学生から参加者を募り、「日韓のときめく未来」をテーマに、両国の多様な文化やコンテンツ等についてチームメンバー間で話しあい、最後に、日韓交流（特に人的交流）を促進するためのアイディアを企画としてまとめてもらいます。その成果をチームごとにプレゼンテーション形式で発表してもらい、その内容の審査をアワード形式で実施いたします。

○対象・人数
・日韓の中学３年生、高校生、大学生、100名（日韓それぞれ50名）

○日程と内容について
2023年
５月・６月
事業計画書公表
令和５年度茗渓会学生活動支援事業申請
T-ACT 申請準備
７月・８月・９月
実行委員及びミーティング時のサポーター（大学生チューター）を募集
広報準備（ポスターの作成・印刷・郵送作業等）
参加者募集準備（７月末開始、９月24日（日）参加者応募締め切り予定）
10・11・12月
アワード開始（隔週で４回のミーティングを実施し、間に２回ほど講演会を挟む予定）
最終回では審査結果から選ばれたチームを発表する
2024年
１月～２月
事業報告書を作成、公表

・アワードの構成・日程は以下である（状況に応じて変更可能性有り）。
10月21日（土）第１回 オリエンテーション・レクリエーション
10月28日（土）第２回 チーム別活動
11月４日（土）第３回 チーム別活動
11月18日（土）第４回 チーム別活動
11月25日（土）第５回 特別講演
第１回特別講演：VUCA 時代の未来を切り拓くアントレプレナーシップ
講師：長井 悠 氏（タクトピア株式会社 代表）
12月９日（土）第６回 特別講演
第２回特別講演：AI 時代、果たして外国語学習は必要なのか
講師：申 貞恩 氏（国立大学法人筑波大学 人文社会系 助教）
12月23日（土）第７回 最終発表

・全てのプログラムを完全オンラインで進行。
・各日程のプログラム実施時間は、13:30～16:00で共通。
・各チームごとの90分の議論と30分の全体での進捗状況を共有しながら交流する時間を設ける
・隔週で時間を設けるが、各チームの状況に応じて個別に議論の時間を設けることは可能
・日本人学生と韓国人学生の意思疎通の円滑化及び、進捗状況のサポートなどを目的として、日本語及び韓国語で意思疎通が可能な学生を筑波大学及び明知専門大学（韓国ソウル市）から「大学生チューター」を募集する（15名程度、オンライン上で各グループをサポートする）

○審査・表彰について
・審査委員の招へい
　日韓交流、文化、外交等を専門にされている有識者の方（大学教員、高校教員、行政機関担当者）を10人を目安にお招きする。また、筑波大学の教員の方を２名以上お招きすることを考えている（現在、依頼中）。
・審査項目については、以下の点を中心に評価してもらう
　日韓の文化等について十分な見識をもっているか
　日韓が組み合わされた企画であるか
　実現可能性
　未来志向の構想であるか
　発表能力
・授賞内容
　上位３チームを選定、協賛企業からいただいた製品を副賞として渡す
　参加証明書の発行を全ての参加者に行います。

＜大学生サポーターズ募集＞
詳しくは下記サイトを参照してください。
https://miraefactory.jp/news/news6
＜募集要項を必ずご確認ください＞
https://miraefactory.jp/guide
＜参加申込方法＞
https://miraefactory.jp/entry
＜最終発表会特設サイト＞
https://miraefactory.jp/final

活動場所
○対面 / オンライン
事前申込み

○最終発表
審査委員（約10名程度）及び、運営関係者（約20名程度、韓国側運営関係者を除く）は下記会場にて対面で行う。参加者はオンラインにて参加する。

国立オリンピック記念青少年総合センター
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3−1
小田急線三宮橋駅徒歩８分

活動期間
2023/10/21 ～ 2024/03/31

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：松田公慶（理工学群 物理学類２年）
　團野咲愛（医学群 看護学群４年）
　青木喜大（生命環境学群 生物学類２年）
　野田健祐（理工学群応用理工学類３年）
　徳永宣佑（社会・国際学群国際総合学類１年）
　曺　恵敏（社会・国際学群国際総合学類１年）
P：秋山　肇（人文社会系 助教）、申　貞恩（人文社会系 助教）

備考
○事業に関するその他の事項
　日韓の交流促進、そして参加者募集の広報のため、日韓の両国で知られている企業及び公的機関に協賛・後援を依頼し、複数の企業・機関よりご協力の返答をいただきました。ただし、筑波大学利益相反・輸出管理マネジメント室からのご助言に従い、寄付金等といった金銭的な支援は受けないこと、企業及び製品の積極的な宣伝は行わずに副賞として渡すことで対応させていただきます。
（T-ACT コンサルタント追記：企業・団体からの協賛・後援に関する利益相反につきましては、「利益相反・輸出管理マネジメント室」に相談・確認しました。）

○実行委員会のその他の取り組み
　本事業では、プログラムの他に我が国及び韓国の魅力を互いの国にアピールするための各種取り組みを実施しています。
＜日本運営事務局の取り組み＞
・EXPO2025 機運醸成に向けた取り組み（EXPO 事務局より内部でのロゴ使用承認済み）
・我が国の観光魅力の PR

これらのロゴ、映像は本プログラム広報時の各種媒体及び、最終発表時に会場で放映を想定しております。

○実績
「日韓高校生文化 PR アワード2022 Presented by 三養ジャパン」という、日韓の文化をテーマにその魅力を PR する動画を作成し（予選）、一人一人が選んだ日韓の文化に関するテーマについて共通点や相違点をプレゼンテーションで発表する（本大会）というプログラムを、主催者代表として実施しました。

主催：日韓高校生文化 PR アワード実行委員会、所管：山手学院中学校・高等学校（ボランティア部）/ 東明女子高等学校、特別協賛：株式会社三養ジャパン
協賛：SNOW Japan 株式会社 / タクトピア株式会社 / 株式会社どこがく、協力：独立行政法人日本学生支援機構 / 独立行政法人日本学生支援機構 ソウル事務所 / 独立行政法人国際交流基金 / 株式会社セブン - イレブン・ジャパン
後援：駐横浜大韓民国総領事館 / 神奈川韓国綜合教育院 / 神奈川新聞社

○個人情報保護方針
＊詳細は事業のホームページよりご確認いただけます。

○利益相反等管理方針

○未成年者の参加に関する保護指針

○審査の透明性確保に関する指針

○参加規約

○ソーシャルメディア運営方針
＊詳細は事業のホームページよりご確認いただけます。方針の詳細は、大学や T-ACT の規則を遵守することを前提に作成させていただきました。

活動報告

実際の活動内容

本活動はその目的として「日韓の将来を担うグローバル人材を育成し、両国交流の発展に寄与する」と設定して推進してまいりました。本目的を達成するためにプログラムを「境界を超えて皆が共に創る新しい日韓交流プラットフォーム」とするべく、探究型学習と国際交流の両観点を取り入れた探究型国際交流教育プログラムを提供しました。参加学生たちは、日本側、韓国側関係なしに一つのチームとなり、それぞれの課題意識に基づく対話と、解決・実現方法の模索、提案を行っており、当初目標は概ね達成することができたと評価することができます。また、最優秀賞を受賞した学生たちは、今後、相手国訪問を通じて、相手国を直に触れることが期待されます。今後、学生たちから出たアイデアを、産官学と連携し、実際に社会に実装していくための取り組みを行っていきたいと考えております。

しかし、今年度の活動を通じて①プログラムの質と②運営体制において課題点も見つかりました。

まず、①プログラムの質の観点から指摘できるのは参加学生の活動状況や積極性等に応じて、活動の質が変化してしまうということです。ウェブツールを活用した活動において、参加学生の動機づけ、積極的かつ主体的な活動を持続させなければならないと推察されます。チーム内におけるコミュニケーションを活発化され、参加学生が継続して主体的に活動に取組み、チームとして質の高い活動を展開していくためには、ウェブツールといった枠組みを提供するに留まらない働きかけが必要であると考察されます。例えば、大学生サポーターに対するバックアップ支援も高密度に行い、大学生サポーターと参加学生がより関わり合うことができることが望ましいと考えられます。

次に、②運営体制面においては早急に強化する必要があります。12月23日に行われた開会式典の開始時刻遅れやオンライン配信不備、最終発表会における進行支障は人員の不足による準備想定不足に起因するものであり、関係者の皆様にご迷惑をかけるに至ってしまいました。幸いにも、最終発表会における発表時間の短縮等により、すべての過程を実施することができたものの見直しが必要であります。

令和6年度の活動では実施形態を対面へ変更し、探究教育、講義受講に加え、文化交流を導入することで、学生たちが総合的見地からより質の高い国際交流が実現できるように準備を進めてまいります。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒95％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

活動の実施に際し、行わなければならないことがたくさん存在し、少ない人数で処理しきることは極めて困難なことでした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

活動の効率化を図り、少ない人数でも問題なく処理できるように努力しました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回の活動は約1年間（6月～翌3月）と非常に長きにわたる活動でありました。企画の立案から参加者の実施、募集、事後処理に至るまで、「創基151年筑波大学開学50周年記念冠事業」でもあるということに責任感と自負心を持って活動を成功裏に終了するために数々の努力を行いました。学業や他の日常とこの活動を両立することはもちろん、多くの関係者の皆様との疎通する中で自分に厳しく勝手に限界を決めないで調整し続けることや、支援者、参加者など、本活動に携わってくださる全ての関係者の皆さまに対する感謝の気持ちを深く感じ、また再認識するに至りました。T-ACTの枠組みを活用して、地域や国を超えたグローバルな課題に対し、政府機関や民間企業、市民の皆様と共に共創することができました。T-ACTはその狙いに「共創コミュニティ」とありますが、この活動を通じて、私たちはまさにそれを具現化することができたと推察いたします。

参加者への影響

本プログラムは日韓の高校生から大学生を対象とした「探究型国際交流教育プログラム」です。先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態であると言われている現代において、自らが物事を考える「主体」になると同時に、興味関心を持って、他者と共創し、社会の価値発見・創造することで未来を切り開いていかなければなりません。私たちは日韓の青少年が価値観や目標を共有し、互いの文化を尊重しながら将来を見据えて共創し、持続可能な未来を築くためのインスピレーションを提供する舞台となりたいと考えております。プログラムのテーマは「日韓のときめく未来」であり、一見すると抽象的であります。しかし、日韓の若者が正解のない課題を発見した上で、方法を模索し提案するという学びのプロセスの中で、参加者一人一人が、「日韓のときめく未来」の中心、すなわち主人公となることができると確信しています。そしてさらに、日韓にとどまることなく、グロー

バルな社会を牽引する「主人公」になってほしいと期待しています。

本プログラムにおける活動の集大成としてアイデア発表を行いました。産官学様々な立場の方を審査委員としてお招きし参加学生と疎通していただきました。参加学生のアイデアについて、行政的側面、ビジネス的側面、そして学術的側面から評価していただくことで学生たちにとって密度の高いものとなりました。例えば、審査委員の一人である首都圏新都市鉄道株式会社の森高 龍平 部長は最終プレゼンテーションにおける評価について「理念と実現可能性の両輪で構想されたアイデアであるのか」に着目されたと話されておりました。

本プログラムは最終発表会を除く全ての過程を完全オンラインで実施しました。オンラインで実施することの利点として、両国の学生が場所や時間を選ぶことなく、ウェブツールを活用して簡単に疎通することができるといったことが挙げられます。本プログラムでは、本学が導入しているオンライン会議システム Microsoft Teams 及び Zoom とオンラインコミュニケーションツール Discord の 3 つを活用して実施しました。参加学生たちは特に Discord を活用して探究活動を進行していました。日本側参加者と韓国側参加者が混合で 5 名または 6 名のチームとなって活動しました。また、各チームには日韓両言語で疎通可能な大学生サポーターが 1 名つき、チーム活動に伴走しました。各チームの Discord 内には担当の大学生サポーター（後述）が配置され、参加学生たちの活動を支援しました。

チーム別活動の進捗状況や活用状況にはバラツキも認められましたが、いずれのチームにおいても Discord を上手に活用していたことが推察されます。運営側で提供しているツール以外を活用してチーム活動を進めているチームもありましたが、運営側としては個人情報取り扱い等の観点から推奨しておりませんでした。しかし「普段使い慣れたツールを活用したい」、「翻訳機能が搭載されていた方が活動をより活発にすることができた」などといった声も聞かれましたので、今後オンラインプログラムを実施する上で改善策を検討する必要があると考えております。

全 7 回のプログラムのうち、2 回にわたって特別講演を実施いたしました。

日本語での実施回では、タクトピア株式会社の長井 悠 代表取締役より「VUCA 時代の未来を切り拓くアントレプレナーシップ」というテーマでお話しいただき、今回プログラムの核とも言える探究教育を提供いただきました。参加した学生たちは本講義を真剣に受けており、講演終了後の質疑応答では多くの学生が講師や学生同士と対話をしている様子が見受けられました。探究学習をはじめて経験した参加学生にとっても、探究活動の羅針盤とも言える本講演との出会いから、自分たちチームのアイデアをブラッシュアップしてより良いアイデアの提案に向けて論点を再検討する機会となったと評価することができると推察します。

韓国語での実施回では、本学の申 貞恩 助教（人文社会系）により「AI 時代、果たして外国語の学習は必要なのか」というテーマでご講演いただきました。本プログラムは言語能力を応募要件とせず、日韓交流に関心のあるすべての生徒・学生が参加しました。参加学生たちは、大学生サポーターによる通訳やウェブ上の翻訳サービスを活用して自由自在にコミュニケーションをとっている様子が見受けられました。しかし、このように技術革新が進んだ現代社会においても外国語学習はなぜ必要なのか、外国語学習は何に通じるのか、についてお話いただいたことで、学生たちは外国語学習へのモチベーションを向上させていました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

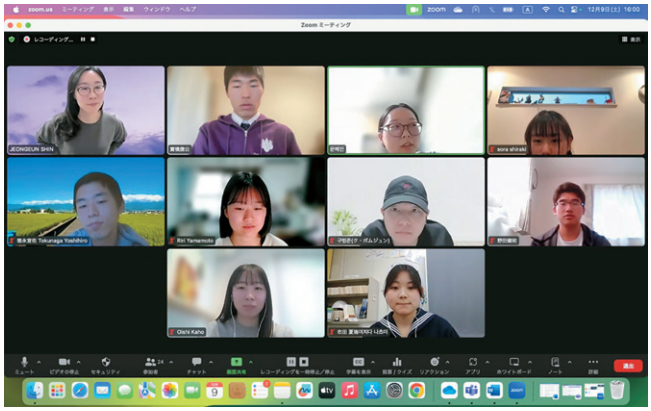
特記事項なし。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT の枠組みを通じて大学内部に直通することができる仕組みが非常に良かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4



第十四回 地理つくば（23015A）

T-ACT プランナー　宮本　紫帆（生物資源科学学位プログラム修士2年）

活動目的

総合大学である筑波大学では、様々な学問を学ぶことができる。しかし、自らの専門外の学問を学ぶ環境があっても、実際に学ぶことは難しいと感じる人もいるのではないだろうか。

我々は、「地理学（学術的な部分だけでなく、高校地理等も含む）」に注目し、地理に興味を持っていてもなかなか手を出せない人にとって手軽に地理の世界に触れることのできる場を提供することを目的とした参加型のトークイベントを開催してきた有志の組織である。筑波大学では、地球学類、比較文化学類、人文学類、社会工学類など多くの学類で地理学に関連した授業を受講することができる。このように地理学は文理の壁を越えたさまざまな側面を持っている学問であり、その分様々な学問を学ぶ学生が楽しむことのできるすそ野の広い学問であると確信している。

地理つくばの大きな特徴は、発表者・聴衆の双方が参加することができることである。当日に発表を聞きながら感じた疑問・感想などを、タイムラグなく X（Twitter）のハッシュタグ「# 地理つくば」で投稿し、発表者がその投稿を見て回答・反応することで、より双方の理解が深まり、興味関心 を高められることが期待される。これにより、Teams での地理つくばの活動を知らなかった方も、Teams に参加するのに手続きが必要だった学外の方々も参加するハードルが下がり、地理つくばがより多くの方に地理の魅力を伝える機会となるだろうと考えられる。

地理つくばは、2019年 1 月に T-ACT アクションとして初開催したのち、2020年 8 月に行った第二回からは開催場所をオンライン（Teams）に移し、これまでに合計で十三回開催してきた。そして今回、第十四回を開催するにあたり、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが 5 類感染症になったことを受け、四年半ぶりの対面での開催を再び T-ACT の力を借りて実現しようとするものである。

地理つくばを通して、地理に苦手意識を持っている人や地理学に触れてこなかった人にも、地理学の面白さを知ってもらえたら幸いである。

具体的な活動計画

＜スケジュール＞

９月：

・登壇者（発表を行う人）を学内・学外問わず募集する。
　募集は公式 X（Twitter）と地理つくばのチームに Google フォームのリンクを貼ることで行う。
　なお、発表形式については当日対面での発表 / 事前に録画した動画を流す発表 /Teams を通じたオンライン・リアルタイムでの発表の三種類から選ぶことができる。
・開催場所を確定する。
・必要な道具の予約・確保を行う。

10月上旬まで：

・タイムスケジュールを確定させる。
・宣伝ポスターを作成し、広報活動を行う。
・対面開催に向けての事務作業などを行う。

10月21日（土）

・午後に対面で開催。なお、この発表の様子は同時に Teams でも閲覧可能な状態とし、さらに Teams の画面の録画を行う。

10月中：

・録画した発表を個人名が見えないよう編集したうえで、地理つくばの Youtube チャンネルに限定公開する。
　リンクは Teams でのみ閲覧可能とする。
・活動報告のため、反省会を行う。

＜参加者、参加方法＞

発表者、聴衆のそれぞれで参加方法が異なる。

発表者の場合：

① Google フォームを書いて提出し、応募を行う
②発表の10日前までに、発表時間帯、発表内容、宣伝内容を決定する
　＊内容が決定次第、このページや X（Twitter）などでお知らせします。
③（任意）発表の 1 週間前ごろに、Teams 上で運営とリハーサルを行う

④発表する（自分の発表のとき以外の時間は聴衆と同様）

聴衆：
①当日に参加（対面、Teams どちらでも可）
②発表を聞きながら疑問に思ったこと、感想などを X（Twitter）のハッシュタグ「# 地理つくば」で投稿

なお、発表者・聴衆の所属は学内・学外を問わない。
対象者は大学生以上を想定している。

＜当日のスケジュール＞
13:00　現地開場（開場後に Teams も会議を開きます）
13:30～13:50　注意事項・地理つくばの説明　by 運営
14:00～14:30　れもん（@Chihaya_Lemon）「刑務所の地域性 ~ 更生保護と地域社会 ~」
14:40～15:10　こま（@geo_mamesiba）「銚子における自然と人々のつながり」
15:20～15:50　しらぬひ（@shiranuhi_SML）「地理のみかたを知ってみよう」
15:55～16:15　運営からのお知らせ・アンケート回答
終わり次第、解散

＊ Teams でも同時に閲覧可能。
＊発表は録画・録音（Teams の機能を使用）し、個人名が見えないよう編集したうえで、地理つくばの Youtube チャンネルに限定公開する。リンクは Teams でのみ閲覧可能とする。
＊このイベント中には聴衆の疑問・感想を発信する場として X（Twitter）のハッシュタグ「# 地理つくば」の利用を推奨している。

活動場所
当日の活動場所：1C210
ミーティングは基本的にオンラインで行う。

活動期間
2023/09/10～2023/10/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：大森雄基（情報理工学位プログラム博士 1 年）
　根岸龍宏（社会工学学位プログラム修士 1 年）
　杉山晟（人文学類 2 年）
P：中野泰伺（BHE）

備考
・地理つくばに登壇希望の方はこちらの Google フォームよりご回答ください。
https://forms.gle/VfsEjYGpqszAjK5U6
・Teams への参加方法について
学生・教職員の場合：
　Teams の「チームに参加 / チームを作成」画面より、コード「vk4hxom」を入力する。
学外の方の場合：
　X（Twitter）のダイレクトメール（@chiritsukuba）、またはメールアドレス（chiritsukuba.official@gmail.com）に「Teams に入りたい」という旨をご連絡ください。
　運営の方でゲストとして参加できるように設定いたします。
　（個人用メールアドレスが必要ですのでご用意ください）
・学外の方も参加可能ですが、自家用車を使って来場予定の場合は X（Twitter）のダイレクトメール（@chiritsukuba）、またはメールアドレス（chiritsukuba.official@gmail.com）までご連絡ください。

・参加前に、地理つくばの規則をご確認ください。違反した場合、退場していただく場合がございます。
https://drive.google.com/drive/folders/1NlaJJsGpVuVUV3k5liMlEc3MDtqQU4vq?usp=drive_link
・公式ウェブサイトでも情報を発信しております。こちらもご確認ください。
https://chiritsukuba.wicurio.com/

活動報告

実際の活動内容

9月：
・登壇者（発表を行う人）を学内・学外問わず募集する。
募集は公式X（Twitter）と地理つくばのチームにGoogleフォームのリンクを貼ることで行う。
また、T-ACTのX（Twitter）でも登壇募集のお知らせをしていただいた。
・開催場所を確定する。
・必要な道具の予約・確保を行う。
10月上旬まで：
・タイムスケジュールを確定させる。
・宴伝ポスターを作成し、広報活動を行う。
・対面開催に向けての事務作業などを行う。
10月21日（土）
・午後に対面で開催。なお、この発表の様子は同時にTeamsでも閲覧可能な状態とし、さらにTeamsの画面の録画を行う。
10月中：
・録画した発表を個人名が見えないよう編集したうえで、地理つくばのYoutubeチャンネルに限定公開する。リンクはTeamsでのみ閲覧可能とする。
・活動報告のため、反省会を行う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと
・マイクは点くのに音声が出なかった
・プロジェクターの袋の中にHDMIケーブルがなく、繋げられなかった

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
・マイクのチューニングを設定し直した
・研究室からHDMIケーブルを持ってきた

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

まず事務手続き的な面から述べると、かなり手間がかかると感じた。

地理つくばはもともとボランティアで有志が活動していたため、特に顧問も存在せず、ただ運営メンバーの日程が合う日にオンラインで開催していただけだった。今回は「T-ACTの活動として」「対面で」行ったため、パートナー教員の設定と教室の確保が必要であった。

まずパートナー教員だが、大学院生であればたいてい研究の指導教員に頼むのが筋であると思われる。しかし、現在の私の専門分野は地理ではなく、指導教員に頼むのは不適当であると考えた。次に、地理系の教員に頼もうと考えたが、「T-ACT」と「地理つくば」のことをそれぞれ一から説明することが面倒に思い、結局「地理つくば」を知って応援してくださっている別の教員に協力を依頼した。前々から思っていたことではあったが、そもそも「地理つくば」は学会とも、研究室とも関係ない自由な発表会であることを全く知らない人に理解してもらうこと自体に困難があることは認めざるを得ない。その上「T-ACT」まで説明を……となると、やはり開始のハードルがどうしても高くなってしまうという問題は避けられないと感じた。

次に教室の確保だが、T-ACTに登録するよりも前から、教室の空き状況を調べたり図書館などに場所を借りられるか相談したりした。普段よりも早めから活動を開始する必要があったが、オンラインのときの感覚で開催の一ヶ月ほど前から動き出してしまい、事務的な部分がスムーズに進まず結局申請がギリギリになってしまった。例えば図書館のセミナー室は一ヶ月前までに申請を出して承認される必要があるため、遅くとも一ヶ月半ほど前から動き始めるのがベストであると考えられる。

また、当日の発表に使うためのマイクなどの機材を支援室から借りる予定でいたが、サークル等には貸出できないという制限があることをこの手続きを通じて初めて知った。この制限はサークルの運営に携わったりしない限りなかなか知ることができない情報であったため、教室申請絡みに関するマニュアルや現在の教室の予約状況がわかるサイトがあればいいのに……と思いながら何度も通学して手続きを済ませた。

ここからは個人の事情だが、プランナーは電車で通学をしているため、手続きの関係で予想外に通学が増え金銭的に痛手が生じてしまったのは個人的に辛いことであった。前回の経験（とはいえ 4 年以上前だが）があったため、あまり苦労せず手続きを進められるだろうと安易な気持ちで計画したが、その点だけは唯一後悔している。事務手続き関係が終わってからは、普段通り募集を行い登壇者を集めたため特に困ることもなかった。

ポスターは対外向けかつ判を押すスペースの問題から普段と異なるレイアウトで制作したが、書く内容は決まっていたのでそこまで苦労した記憶はない。できたポスターは T-ACT で宣伝していただき、また学内にも置かせていただいた。しかし、制作に時間を要し、ポスターを学内に置いてから開催までが数日しかなかったため、このポスターがどれほど影響したかは未知数である。いまさらたらればを言っても意味はないが、一人でも多くの登壇者、聴講者を得るために早めに募集・宣伝をかけることに越したことはない。当日は細かなトラブルがいくつかあったものの、進行に関しては特に問題なく進めることができた。

対面開催を行ってよかった点として、登壇者・聴講者がいきいきとしていたことがあげられる。

これまでほとんどオンラインで行ってきたことで、聴講者のリアクションに遅延がどうしても生じてしまっていたが、今回はその場の反応を見ることができたため、より登壇者にとって発表がしやすくなったように感じた。また、発表で紹介したものを実際に持ってきた登壇者もおり、よりリアリティが感じられる内容になっていた。さらに、休憩中には参加者同士の会話もみられ、人数は少なかったものの明るい雰囲気で発表が進んだように感じた。

しかし、聴講者はあまり多くなかったように感じられる。聴講のハードルを下げるため、聴講には特に事前の申請を行わなかったが、それでも聴講者が少なかったのは宣伝期間の短さもあったかもしれない。それだけでは説明しきれない部分も多くあると感じているが、今後開催するにあたって宣伝は力を入れなくてはならない部分であることには間違いないだろう。正直なところ、教室申請に躓いた時点で諦めていてもおかしくなかったように思う。しかし、申請前にもう次回を行うことを宣言してしまった手前、あとに引くこともできず「これも実験の一環だ、この知見も今後に経験として引き継げる」と言い聞かせて作業を行っていた。

また、どうしようもなくなったら他のオーガナイザーに頼ればいい、という安心があったこともここまでできた理由の一つである。改めてここでオーガナイザーに感謝を伝えたい。そして、T-ACT のお陰で教室申請やポスターの掲示がスムーズに進み、どうにか開催まで漕ぎつけることができた。突然の申し出を快く引き受けていただいた T-ACT の李先生、木田さんにも感謝したい。

参加者への影響

地理つくばは初回以外、ずっとオンラインでやっていた。これはこれでどこでも聞けるなど有意義な面はあったが、どうしても地理や地理つくばに興味のある人が交流する事は難しかった。対面としたことで、発表者と聴講者がスムーズにリアクションを取ったり、実際に地方の産物を持ってきて見せてくれるなど、対面でしかできない事も行えた。

また聴講者の方も、過去のオンラインでは、参加している意識が薄いままリアクションが無い場合も多かったが、今回対面にしたことにより、インタラクションを通じて参加している意識が高まったように思える。

また、休憩時間でのちょっとした質問など、オンラインでの発表ではなかなかやりにくい事も出来た。

また、対面としたことにより、参加者や運営者間で会話ができるようになり、発表するだけではなく、人としての繋がりも得られたと思う。

一方で、課題点としては、運営コストが上昇したという問題点がある。これは T-ACT のおかげでだいぶコストが下がったものの、現地に行くというコストが運営にかける負荷は少なくなく、対面を行う事が必ずしも最適解ではないという結論を得るに至った。

総じて言えば、参加者・運営は様々な側面から貴重な学びの機会を得たことであり、今回の対面開催は有意義であったと考えられる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

プランナーはつくば在住の人がなることを強く推奨する。事務手続きで何度も登校することになるため。

また、できれば開催ひと月前にはポスターも完成させ、宣伝が行えるような状態に仕上げておくことが理想的である。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

良かったこと

・毎回伺うたびに新しく人とのコンタクトができた
・物品が借りられた
・ポスターの許可証がすぐ手に入ったので貼り出しやすかった
・コピーがしやすかった
・教室申請ができた

要望

・もしよければ、作業スペースとして T-ACT に関係のない人でも立ち寄れるような場所にすると宣伝にもなってよいのではないだろうか？

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

障害者スポーツを通じてSDGsをもっと身近に～その2～（23016A）

T-ACT プランナー　天野　隼太（比較文化学類4年）

活動目的

①目的

小学生に、スポーツの体験を通して SDGs のゴール 3「すべての人に健康と福祉を」と、ゴール10「人や国の不平等をなくそう」を理解し、身近に感じてもらうことを目的とする。本イベントでは、スポーツを実践するだけでなく、視覚に障害のある学生との交流を通して、子どもたちが、自分とは異なる立場の人（本イベントでは障害のある人）の視点を理解してもらうことを目指す。

②来歴

2018年から、「T-ACT」への企画申請を継続的に行い、キャリア教育やスポーツなどのイベントを実施してきた。2020年からは SDGs を子どもたちに普及することを目標に掲げ、筑波大の近隣小学校への意識調査や、障害者スポーツを通じた教育イベント（「障害者スポーツを通じて SDGs をもっと身近に」）の実施などを行ってきた。教育イベントは、筑波大周辺の児童館や茨城県県南生涯学習センターにご協力いただき、現在までに計 6 回実施することができた。同センターでは、職員の方からご紹介いただき、高校生と地域課題解決に向けて取り組む活動も行っている。今回申請した「その 2 」では、今までの成果や課題を踏まえ、内容を更に充実したものにしたいと考えている。

③企画名

「障害者スポーツを通して SDGs をもっと身近に」と設定したのは、子どもたちが本企画を通して障害のある人の視点に立って考えてもらうだけでなく、それが SDGs の目標達成にもつながっているということを理解してほしいからだ。SDGs は遠い国の話ではなく、身近な生活と密接に関わっていることを伝えたい。

具体的な活動計画

①事業概要

小学校中学年から高学年を対象にする。テーマは「障害のある人の視点を想像しよう」。イベント内では、大きく分けて以下四つの構成で行う。

(1)：子どもに、簡易的なゴールボールを紹介し、障害者目線で実践してもらう。
(2)：同スポーツを、視覚障害のある学生と実践してもらう。
(3)：「(2) までで実施したスポーツの感想」や、「視覚障害学生の学生生活や日常生活」などさまざまなテーマについて、子どもたちと学生が意見交換を行う。
(4)：イベント実施と SDGs のつながりについて、スライドなどを用いて伝える。

座学中心ではなく体験型のワークを組み込むことで、双方向的な学びの場を考えている。全体を通して大学生はファシリテーターとして参加する。所要時間は50分を想定している。以下にイベントの開催場所と日程、タイムスケジュールを示す。

②視覚障害のある学生の参加について

今回のイベントでは、筑波技術大学に在籍している視覚障害のある学生を 6 名招待して実施する。前述の通り、現在までにイベントを 6 回実施し、多くの子どもたちやその保護者から好評をいただいた。それによりやりがいを感じる一方、メンバーの中に障害のある学生がいないため「障害のある人の視点を少しでも学んでほしいとは言っているものの、説得力をもって伝えられているのか。そもそも私たちが理解できているのだろうか」という葛藤が常にあった。そこで今回は、同大・松尾政輝助教にご協力いただき同大の学生をご紹介していただく運びとなった。実際に子どもたちと交流していただくことで、従来のイベントでは伝えきれなかったことへの理解や新しい気づきの発見につなげたいと考えている。また、私たち大学生にとっても理解を深める場にしたい。

③開催場所：吾妻東児童館

④開催日程：10月12日15時30分～16時25分を予定

⑤タイムスケジュール
（1）冒頭挨拶（自己紹介）、概要説明（約５分）
（2）簡易的なゴールボールを実施（約10分）＝２コート
（3）視覚障害のある学生と簡易的なゴールボールを実施（約15分）
（4）プレーした感想を聞く（約５分）
（5）視覚障害のある学生との交流・意見交換（約10分）
（6）スライドを見て SDGs の該当のゴールについて学習（約５～10分）
（7）終了、挨拶

⑥内容
＜（1）冒頭挨拶＞（５分）
　イベントの目的と大まかな内容説明、団体紹介を行う。その際、参加者にも簡単に自己紹介を行ってもらう。グループ分けは事前に行っておく。人数は最大12人を想定している。上記タイムスケジュール（２）・（３）では６人ごとの２グループに分かれ、２コートを使用する。

＜（2）簡易的なゴールボールを実施＞（約10分程度）
　障害者スポーツを実践し、異なる立場の人々の視点を少しでも理解してもらうことを目指す。ゲーム終了後は、子どもたちを一時集合させ、感想を聞くと共に、そのゲームが、どのような障害のある人のために設計されたものなのか考えてもらう。
競技名：簡易的ゴールボール
子どもたちに理解してほしい視点：視覚障害のある人の視点
ルール：コートを二つに分け両隅にゴールを設置する。１コートに児童６人（事前に決めておく）が入り、３人で１チームとする（説明は、スライドやホワイトボードを用いて行う）。
①３人のうち２人は、アイマスクを装着してゴールの前に立つ。そして残りの１人はゴールの後ろに回る（コート反対側も同様）。先攻後攻を決め、ゲームを始める。
②攻撃をする側は、アイマスクを装着しない状態でゴールに向かってボールを転がす。ボールを転がす方向などは、ゴールの後ろの人が指示を出す。
③守る側は、相手コートから転がってくるボールがゴールに入らないように阻止する。この際、アイマスクを装着していない１人が指示を出してボールの位置を伝える。ボールがゴールに入ったら得点（１点）。守備がボールをはじく、またはキャッチすれば得点は０とする。
④両チームが攻守両方を行って１セット。時間内に、より多くの得点を取れた方が勝ち。なお、１セット終了後、ローテーションを行い、指示役と目隠しをする役が１人ずつずれて交代する。
狙い：この競技が、健常者だけでなく視覚障害のある人でも楽しんでもらえるということを子どもたちに理解してもらう。また、目隠しをしてプレーすることで、目が見えない状況下におけるスポーツとの関わり方を体験してもらう。一方で、指示役になった際も、目隠しをしたチームメイトに、瞬時に適切な指示を出すことが求められ、立場が異なる人への配慮・協調性が生まれることを期待している。
時間配分：ルール説明（２分）、プレー時間（８分）、感想や対象となる障害の種類の説明（３分程度）
必要な物：目隠し用のアイマスク、ボール、ゴール、コートを区画するテープ
要素：目隠した状態でボールを転がす・キャッチする、指示を出しチームで協力する、音で判断する
備考：コートの作り方について。参加者に両手を広げてもらい手が当たらない程度で感覚を取ってもらう。その両隅にテープを張る。また、指示役が判断しやすいように真ん中にテープを張っておく。

＜（3）視覚障害のある学生と簡易的ゴールボールを実施＞（約15分程度）
（2）で子どもたちに実践してもらったゴールボールを、視覚障害のある学生と一緒にプレーしてみる。どうすれば両者が共に楽しみながらプレーできるのか、コミュニケーションを取りながら進めていくことを心掛ける。基本的にルールは変更しないが、対話の中でより良いアイデアが出た場合は改編する。

＜（4）プレーした感想を聞く＞（約５分程度）
プレー終了後、子ども２～３人にゲームの感想を聞く。「目隠しして行うスポーツをやってみてどう感じたか」や「視覚障害のある学生とプレーしてみてどうだったか」などを聞き出したい。上記のやりとりを取り入れながら、次のプログラムである（5）につなげる。

＜（5）視覚障害のある学生との交流・意見交換＞（約10分程度）
（4）を踏まえて、子どもたちと視覚障害のある学生間で交流・意見交換を行う。スポーツだけでなく、日常生活や学生生活についてもテーマにしたいと考えている（詳細については、10月５日実施予定の事前打ち合わせで大枠を決定する）。一方向的ではなく、双方向の対話を目指す。運営する筑波大生は、ファシリテーターと

して参加する。

＜(6) スライドを見て SDGs の該当のゴールについて学習＞（約 5 分程度）
　そもそも SDGs のゴール 3、ゴール10とはどのようなものなのか。学生が作成したスライドを通じて、理解してもらう。また、学んだことを実生活に生かせるように促す。その際、①パソコンを管理する人と②前に出てスクリーンを指しながら説明する人の 2 人体制で行う。スライドの内容は印刷してイベント終了後に子どもたちに配布する。その際、必要に応じて英語の説明を用意するなど外国の子供たちへの配慮も行う。スライドが用意できない場合はそれを印刷し、紙芝居のようにして伝える。

⑦実施体制
　筑波大学の学生 3 人が運営を行う。非営利で活動を行う。また、本イベントでは筑波技術大学に在籍する視覚障害のある学生 6 名を招待して実施する。

⑧安全管理について
　本企画を実施する上での安全管理について、以下に示す。
(1) ケガがなどがあった場合
　・筑波大生は、学生教育研究災害傷害保険を適用する
　・子どもたちは、児童館で加入している保険を適用する
　・筑波技術大学の学生は、同大で学生が加入している保険を適用する
(2) 障害のある学生への配慮について
　当日の移動や、イベント開催中の配慮等については、松尾助教と技術大学参加学生にあらかじめヒアリングを行い、マニュアルを作成する予定。
　・松尾助教へのヒアリング：10月 3 日実施
　・参加学生へのヒアリング：10月 5 日実施予定

活動場所
定期ミーティング：オンライン
イベント当日：吾妻東児童館

活動期間
2023/10/01～2023/12/31

対象
学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：諸戸雄一（比較文化学類 4 年）、工藤和哉（生物資源学類 4 年）
P：大林太朗（体育系）

活動報告

実際の活動内容

イベントは、10月12日（木曜日）の15時より、吾妻東児童館で行った。参加者は、筑波技術大学の学生が 7 人、小学生が 8 人だった。簡単な自己紹介をしてもらった後、企画書に基づき、以下四つの構成でイベントを実施した。

(1)：小学生に、簡易的なゴールボールを紹介し、障がい者目線で実践してもらう
(2)：同スポーツを、視覚障がいのある学生と実践してもらう
(3)：「(2) までで実施したスポーツの感想」や、「視覚障がい学生の学生生活や日常生活」などさまざまなテーマについて、小学生と学生が意見交換を行う。
(4)：イベント実施と SDGs のつながりについて、スライドなどを用いて伝える。

(1)・(2) のプレー時間が若干延びてしまったが、(3) は短縮せず計画していた時間通りに進行した。本企画においては、スポーツとディスカッションを通じて、学生と子ども達が交流することを第 1 の目標にしていたためである。結果的に (4) が早足になってしまった。

しかし、それまでの交流を通じて、参加者自らが「異なる立場の人の視点に立って考えること」を「実践」できたことは、SDGs のゴールを理解する上で、私達が「教える」よりも効果的だったと考える。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

本イベントの企画書を T-ACT に提出後、筑波技術大生（視覚障がいのある学生）への安全面に関する配慮について、記載が不十分であるという指摘をいただいた。確かにその通りだと痛感した。会場までどのように移動してもらうか、イベント実施中にどのようなサポートが必要か、どのような枠組みで保険に加入してもらうかなど、本来企画書を提出する前に決定しておくべきことが、十分に議論できていなかった。企画の段取りや、関係者との日程調整などに気を取られてしまい、大切な議論が盲点になっていたように思える。本企画における大きな反省点である。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

指摘を受けた後、問題を解決すべく、オーガナイザーと早急に話し合った。しかし、私も含め今まで視覚障がいのある人と交流した機会がほとんどないため、具体策を導き出すことができなかった。そこで、有識者の方に助言を請うことにした。かねてよりお世話になっていた筑波技術大学の松尾政輝助教にお願いしたところ、快く引き受けてくださった。松尾助教は、「(学生に) 名前と声を一致してもらうために、はっきり話すこと」や「一人一人の見え方の違いを踏まえた上で、必要なサポートを一緒に考えること」など、筑波技術大学の学生たちと共同でイベントを作り上げていく際の私達のあるべき姿勢を教えてくださった。それを踏まえた上で、次に筑波技術大学の学生たちと事前打ち合わせを行った。お互いの自己紹介を行った後、会場までの移動方法や、ミニゲームのグループ分け、小学生と意見交換をする際のテーマなどについて話し合った。同大の学生たちの明るさ・フレンドリーさにはとても助けられた。以上のヒアリングに基づき、「危機管理等対応マニュアル」を作成し、イベントが安全かつ円滑に実施できるように対策を行うことができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

本イベントは、それまで実施してきたイベントの集大成だった。私達は、障害者スポーツを通じて子ども達に SDGs を広めるイベントを、2022年から企画してきた。つくば市の児童館や土浦市の県南生涯学習センターで場所をお借りし、おかげさまで 7 回も実施することができた。最初は時間配分が良くなかったり、子ども達への対応がうまくいかなかったりして苦戦の連続だった。しかし、その都度オーガナイザー達と課題を洗い出し、どうすれば効率よくルール説明ができるか、どうすれば子ども達の集中力を持続させられるかなどを検討し軌道修正してきた。そのおかげで回数を重ねるごとにより良く運営できている実感はあった。一方で、第 1 回イベントの開催当初からずっと「心残り」があった。

それは、企画書にも書いたが、「当事者がいないこと」だった。7 回のイベントは、健常者の筑波大生 3 人で全てを実施し、そこに当事者（障害のある人）は不在だった。子ども達に「異なる人の立場を理解しよう」と教えておきながら、自分達が理解できているのだろうかという疑問がずっと心の中にあった。そんな時に、吾妻東児童館からイベント開催のお誘いをいただいた。「オーガナイザー全員が 4 年生で、イベントが開催できるのもこれが最後かもしれない。最後のチャンスだと思ってやってみよう」。その思いにオーガナイザー達が賛同してくれて今回の企画が動き出した。だからこそ、今回のイベントは、「今までの集大成」という気持ちで挑むことができた。

また、本イベントは、障がいのある方と接する際の「姿勢」を学ぶ機会になった。特に印象に残っている場面が二つある。一つ目が、筑波技術大生たちの会場への移動手段について話し合った時だった。私達は当初、行き帰りでタクシーの利用を提案したが、学生たちからは「帰りは急ぎではないので、徒歩で大丈夫です」と返事が返って来た。マニュアルの作成などを通し「誰もケガをせず安全に行うこと」ばかり考えていた私は、「ケガなどがあってはいけないので、安全上、帰りもタクシーにしませんか」と再度提案した。すると一人の学生から「それは私たちに障がいがあるから、そのようにおっしゃってくださっているのですか」と言われた。その言葉ではっとした。事前のヒアリングの際に松尾助教は、子どもたちに対して「視覚障がい者だからと特別視せず、他の人と同じように思いやりを持って接することが大切であるということを伝えてほしい」とおっしゃっていた。先程の自分の言葉には、無意識的に彼・彼女らへの「特別視」があった。子ども達にそれを教える身でありながら、自分自身がそれをできていないことへの情けなさを感じた。学生たちに経緯を説明し、自分の発言を謝罪した。そんな自分に対し学生たちは温かく声をかけてくれ「土日はみんなで買物に行ったり、カラオケに行ったりするのでずんずん歩いて行けますよ」と笑いながら答えてくれた。

「もっと彼・彼女らの話を聞きたい」。そう思い、打ち合わせが終わった後も、大学で学んでいることや日常生活のことなどさまざまな話をした。彼・彼女らが、障がいのない私達とほとんど生活が変わらない「普通の」大学生であることを、恥ずかしながら初めて身をもって実感し、今まで理解しているようで全然理解できていなかった自分に気付くことができた。また、善意から気を使い過ぎてしまうことが、かえって障がいのある人たちを傷つけてしまうことがあるということを学んだ。だからこそ、こまめなコミュニケーションが大切であり、ぜひ子ども達に、イベントを通してこのような体験をしてほしいと、メンバー全員が強く感じた。

二つ目が、スポーツの実施後に行った意見交換の時である。二つのグループに分かれ、本企画オーガナイザーがファシリテーターを務めた。話す内容は筑波技術大生に事前に決めてもらい、「見え方には一人一人違いがあること」や「道で、白杖をついて困っている人がいたらぜひ声を掛けてほしい」など、子ども達にメッセージが送られた。それらの中で特に印象に残っているのが、ある学生が日常生活について話した場面だった。

「眼が見えない状況で生活していると、ある特殊能力が身に付くんだよ。僕はその状況に慣れてしまったから、目が見えなくてもカレーライスを作れるし、大学でプログラミングを学んでいるし、東京にも 1 人でいける。映画館に行く友達もいるんだよ。だからね、目が見えないからって何もできないわけじゃないんだよ」

子供達は「すごい！」と興奮気味に頷いていた。私自身も、「なるほど！」と思った。「目が見えない生活」を考えると、つい不便さを感じてしまう。一方で、その状況でも少しずつできることを増やしていき、それを「特殊能力」と表現する学生の考え方に大変感銘を受けた。また、その「伝え方」は私達にとっても大変勉強になった。その後も子ども達は、学生たちが持参した白杖や特殊な腕時計の使い方を聞いたり、触ったりして、楽しみながら学んでいた。

以上のような体験を通じ、やはり当事者でないと語れないこと、当事者だからこそ伝えられることがあると感じた。それは子ども達の表情や目を見ていて強く感じる。今まで私達が実施してきたイベントが決して良くなかったわけではないが、この点が足りなかったのだと改めて思った。本イベントは、子ども達だけでなく私達筑波大生も、筑波技術大生の皆さんからたくさんのことを学ばせていただいた。スタートは私の「心残り」というちっぽけな理由だったかもしれないが、結果的に参加者同士が刺激し合い、多くの学びあるイベントにすることができ、「企画して良かった」と心から思っている。

参加者への影響

本企画では、イベント終了後に参加者を対象としたアンケートを実施した。子ども達からは、「視覚障がいがあっても、いつも僕たちと同じように生活しているのがすごいと感じた」、「眼が見えなくても楽しくできることを学んだ」、「視覚障がいがあっても特別視しない（しずぎない）」など、筑波技術大生たちとの交流を経て感じ方や考え方が変化したという意見が多かった。これは、松尾助教がおっしゃっていた「特別視しないこと」、そして学生が話していた「みんな（子ども達）と同じように生活しているということ」を子ども達がしっかり理解してくれた証左だと感じる。これは、「異なる人の立場に立って考える」という点で、SDGs のゴール10「人や国の不平等をなくそう」につながっていると考える。また、「今度もし目の悪い人を見かけたら声を掛けたい」や「障がいのある人の生活についてもっとよく調べようと思った」など、イベントで知ったこと・学んだことを次のステップ（自主的な活動）につなげていこうと考える声もあった。

筑波技術大生にも回答してもらった。実施した簡易的なゴールボールについては、「安全性に配慮されていて思いっきり楽しむことができた」や「スポーツを通して、子どもと関わることができて楽しかった。視覚障がい者のスポーツを、健常者の子供達が楽しんでくれているのがとても嬉しかった」などの声があった。SDGsのゴール3「すべての人に健康と福祉を」を実感してもらったこと、そして過去のイベントも踏まえ少しずつルールや形式を改良してきた結果が実を結んだことなどを感じ、私達にとっても大変嬉しいコメントだった。また、子ども達との交流を通じて、「『視覚障がいの人を見つけたら助けるね！』という言葉が素直にとても嬉しかった」、「とても元気で自分自身も元気を貰えた。自分の伝えたいことを伝えられたと思うし、子供達の思いも受け止めることが出来たと思う」、「今回の交流で視覚障がいがあっても子供達は普通に接してくれ、（健常者に接する時と）何も変わりは無いのだと感じた」、「子ども達に視覚障がいのある人の生活を体験してもらう機会をもっと作っていきたい」などの感想があった。筑波技術大生にとっても、イベントが「子ども達から刺激を受ける機会」になったと考える。

刺激を受けたのは、もちろん子ども達と筑波技術大生だけではない。筑波大生のオーガナイザーの二人からは、以下の感想をもらった。

「これまでの企画では、社会課題を『伝える』『広める』『提起する』という意識で活動していたように感じる。それに加え本企画では『課題に対して広めるほどの理解ができているのだろうか』『本当に子供たちに現実味を持って伝えきれているだろうか』と、当事者の視点を意識し、批判的にメンバーと考えることができた。企画自体に深みを与えたと思う。従来のやり方を疑い、当事者や参加者が持っているさまざまな視点を紡ぎ合わせることは、新たな発見や学びを生み出すことを知った。自分たちの活動に疑問を提示し、作り直し、他の人を巻き込むという経験は今後の人生においても重要であると感じる」

「本企画では、企画の立案から実行までの全ての過程に携わることができた。今までのイベントを生かし、PDCAサイクルを意識しながら進められたと思う。また、企画を進める上で、たくさんの人々とつながりを持つことができた。その人々とのご縁がなければ絶対にイベントを開催できなかったため、『人とのつながりの大切さ』を学んだ。本企画では、小学生と筑波技術大生と交流し、彼ら・彼女らのことを良く知ることができた。小学生達はとても聡明でパワーがあり、感情豊かで、そして好奇心旺盛だった。私は小学生達に圧倒されるばかりだったが、その自由奔放さや何にでも興味を持つ姿勢は見習うべきものだと感じた。また筑波技術大生もパワーに溢れていた。話すときはとてもにこやかで、危なげなく歩いていた。彼ら・彼女らとは感じているものが少し違うだけで、本質的には全く一緒なのだ、という当たり前のことに気付かされた。以上のように、イベントを通してさまざまなことを学び、経験した。また、たくさんの人からエネルギーをもらった。この企画は何物にも代えがたい経験になったと思う」

以上より、本イベントは参加した子ども達、筑波技術大生、そして筑波大生がそれぞれ刺激を受け、そして与え合ったイベントになったと思う。また、座学よりも体験ベースでSDGsを理解してもらうという本企画の第一の目標に近づくことができたと感じる。考えたこと・理解したこと・感じたことは人それぞれであるが、本イベントが1人でも多くの参加者の心・行動の変化を生み出すものになれたら幸いである。

オーガナイザーのコメントにもあったが、本企画では多くの方のご協力なくしてなしえなかった。最後に、この場をお借りして感謝の意をお伝えしたく存じます。まず、イベントの開催をお誘いくださった吾妻東児童館の皆様、児童館だよりへの本イベント告知の掲載や備品の貸し出し、事後アンケートのご協力などで大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。次に、本企画の草案段階から丁寧に指導してくださった大林太朗助教授と山口拓助教授、そしてぎりぎりの申請でありながら温かくご対応くださったT-ACTの李先生と木田様、また企画を審議して下さった先生方に深くお礼申し上げます。そして、筑波技術大生の皆さんのご紹介ならびに事前指導をしてくださった松尾助教、イベントを盛り上げ多くの学びを与えてくれた筑波技術大生の皆さんと子ども達にも、大変お世話になりました。改めて、心より感謝申し上げます。最後に、本企画以前から共にイベントを創り上げ、その都度課題解決に向けて議論を重ねてきたオーガナイザーの二人には感謝しても感謝しきれない。改めて本当に、本当にありがとうございました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

先述した通り、本イベントを通して「実施できて本当に良かった」と心から思っている。しかしその反面、「もっと早く筑波技術大生の皆さんとイベントをやっておけば良かった」という後悔がある。本イベントでは、筑波技術大生の皆さんのご協力により、私達だけでは成し得なかった化学反応を起こすことができた。だからこそ今後も続けていきたい思いがあるが、プランナーとオーガナイザー全員が今年で卒業してしまうため、私達ではそれを達成できない。SDGsを広める活動をしていながら、引き継いでくれる人を見つけることができなかったのは、「持続可能」ではなく大変お恥ずかしい限りである。そのため、今後何らかの企画を検討している、あるいはT-ACTを通じて何かやってみたいという皆さんにお伝えしたいことは以下の通りだ。

「私達の活動を引き継いでほしいとまでは決して言いません。ですが、今まで私達が約3年間で構築した地域の方々とのコネクションをぜひ活用してほしいと思っています。児童館や県南生涯学習センターの職員の皆様、

筑波技術大の先生方・学生さんは、私達の時と同じように、しっかりと自分達の思い・やりたいことを丁寧にお伝えすれば、温かくご対応してくださるはずです。特に、筑波技術大生皆さんは『これからも継続的に筑波大の皆さんと一緒にさまざまな活動してみたい』と言ってくれました。私達の方でお世話になった方々の連絡先などをまとめ、T-ACT の先生方にお伝えしておきます。ですから、少しでも何か『やってみたい！』という思いがあれば、気軽に T-ACT 推進室に足を運んでみてください。一人で抱え込まず、T-ACT コンサルタントの先生方に相談していることで不可能だと思っていたことが可能になるかもしれません。私達は大学を去りますが、私達が行ってきた活動が少しでもお役に立てたらうれしい限りです」。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

本企画は、T-ACT の先生方のご協力があって初めて実現したといっても過言ではない。まず、イベント実施日の決定が先行した状況で申請書を提出するという、非常に遅いタイミングになってしまったにもかかわらず、丁寧にご対応してくださった。また、先述した通り、参加者への配慮の点で大変重要なご指摘をくださった。ヒアリングやマニュアル作成については、イベントの安全かつ円滑な実施だけでなく、私達自身が知識を身に付け、理解を深めることにもつながった。深くお礼申し上げます。そもそも、本企画は以前に行ってきたイベントのトライ & エラーの積み重ねが土台となっていると思っている。その過程では、T-ACT 前任の黒田先生、田中先生にも大変お世話になった。改めて心よりお礼申し上げます。

T-ACT というと、「単発」の企画というイメージがあるが、私たちはその単発の企画を繰り返し申請することで、「継続」的に企画を実施してきた。「継続的な実施にするならサークル化して独立すれば良いのではないか」という意見もごもっともである。しかし T-ACT を利用して継続的に行うことでのメリットは多くある。筑波大学公認の企画となること、毎回第三者の視点からご助言・ご指摘をいただけること、備品を貸し出してくださることなどである。T-ACT の企画の多くは、単発ではもったいない企画だらけだろう。継続し課題を解決していくことでもっと良い企画を作っていけるはずである。だからこそ、T-ACT の先生方にはそういった企画プランナー・オーガナイザーの背中をぜひ押していただきたい。また、先述した通り、卒業などにより企画が終了した際に、それまで築いてきた地域の方々などとの関係性も同時に消失してしまうのは大変もったいないことである。そういった学生と地域の方々との「ご縁」のバトンをつなぎとめ、次の学生に渡す役割も引き続き T-ACT に担っていっていただきたい。以上、誠に僭越ながら宜しくお願いいたします。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

サステナビリティーウィーク（23019A）

T-ACT プランナー　ベイリッツ亜里咲（生物学類4年）

活動目的

気候変動や生物多様性の減少などの危機を受け、世界では持続可能な環境に向けた取り組みが急がれている。その中、最新の研究の拠点であり、これからの社会を担う学生を育成する大学は重要な役割を持つ。筑波大学でも、Design The Future 機構で紹介されているように、様々な取り組みが行われているが、その情報が多くの学生に行き届き、学生が環境問題を自分ごととして捉えられる段階にはまだ辿り着いてないと感じる。

その中、2023年 6 月に東京大学が主催した「サステナビリティウィーク」というイベントに参加する機会があった。サステナビリティウィークとは、1 週間にわたってサステナビリティに取り組む学生や教職員が自分の研究や活動を紹介したり、マイボトルの利用を促進するための学内スタンプラリーなどの企画を実施することで、身近な取り組みを通して東大生がサステナビリティについて考えるきっかけを創ることを目指すイベントだった。その後、東京大学のサステナビリティウィークを企画した学生代表と話し、今後はサステナビリティウィークを複数の大学で同時に開催することを決めた。

そこで、サステナビリティウィークを通して、学生が筑波大学の持続可能性への取り組みについて知り、自身の研究や生活と結びつける機会を作りたいと考えている。また、サステナビリティーウィークを他大学と同時開催することで、未来の持続可能な社会を一緒に作っていく仲間と繋がり、お互いから学び、刺激し合う交流を目指す。

具体的な活動計画

開催日：2024年 4 月22日～27日
サステナビリティウィークは以下のイベントから構成される。

・トークス：学生や教職員を登壇者として招き、サステナビリティに関して行っている研究や課外活動等を紹介していただく。各大学で 1 日ずつ対面で行い、他の大学で行われているトークスはオンラインで見れるようにする。
4 /22～26の17:00～19:30に開催され、筑波大学は 4 /22（月）を担当する。
・ブーメランワークショップ：日常生活の中での行動が環境問題を悪化させ、その影響が自分や世界中の人に返ってくることを「ブーメラン」に例え、わたしたちの生活と環境問題のつながりについて考えるワークショップを開催する。各大学で同日に対面で行い、ディスカッションの結果や参加者のコメントを大学間で共有する。
詳しい内容については、今後計画する。
日時：4 月26日（金）17:00～19:30

・学内企画：期間内で、筑波大生が参加できるイベントなどを検討・企画中
中央図書館で環境問題に関する展示
アップサイクルワークショップ：普段は廃棄される素材を使って工作を行う
意識調査：筑波大生の環境問題に対する意識・行動を調査し、報告
Bioblitz：iNaturalist アプリを使い、決められたエリアにどんな生き物がいるかを皆で一斉に調査するイベント。地域の方にも参加いただき、学内の生物多様性について調査する（参考：https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/events/z1313_00010.html）

・交流会：サステナビリティウィーク最終日の 4 月27日（土）、東京の会場にさまざまな学生が集まり、自分達の活動の紹介やネットワークをするイベント。
エシカル就活主催の環境問題 x キャリアのワークショップも同時に開催予定。
会場は未定

活動場所
トークス：総合 A110
ブーメランワークショップ：未定
図書館 2 階
東京の会場（未定）

活動期間
2023/11/01～2024/04/27

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：Jennifer Lee（環境学学位プログラム M1）
　野田健祐（理工学群 4 年）
P：鈴木石根（生命環境系）

備考
本企画は以下の形で Design The Future 機構にご協力いただく。
（打ち合わせを行い、下記のご協力をいただくことが決定した。）
・トークスで DTF 機構長の西尾先生によるご挨拶
・イベントの広報
・トークスの撮影・配信

活動報告

実際の活動内容

「環境問題を自分ごとにする」をテーマに、大学生を中心に環境問題に対する意識の向上や行動の促進を目指すイベントを開催した。筑波大学、お茶の水女子大学、東京大学、東京農工大学が共同開催した。イベントは以下の 3 つの要素で構成された。

サステナビリティ・トークス：サステナビリティに関する研究や活動を行なっている教職員や学生を登壇者として招き、シンポジウムを開催した。各大学で 1日ずつ対面で行い、他の大学で行われているトークスはオンラインで配信した。各大学から 9 名～11名の登壇者がそれぞれ10分間、未来のタンパク質や環境心理学、研究者の環境意識など幅広いテーマについて話した。各回の最後には質疑応答を行った。

ブーメランワークショップ：日常生活の中での行動が環境問題を悪化させ、その影響が自分や世界中の人に返ってくることを「ブーメラン」に例え、生活と環境問題のつながりについて考えるオリジナルのワークショップを開催した。各大学で同日に対面で行った。ファシリテーターが世界各地での実例を紹介しながら話題を提供し、参加者に発表してもらうインタラクティブなイベントになった。

交流会：サステナビリティウィーク最終日、東京の会場にさまざまな学生が集まり、交流をするイベントを行った。午前中はさまざまな学生団体による環境問題に関する活動紹介と座談会、午後は Climate Fresk という、フランスの NPO が開発したワークショップを主催した。

各大学で、サステナビリティ・ウィークに合わせて独自の企画を開催した。筑波大学では、Bioblitz という、アプリを使って決められたエリアにどんな生き物がいるかを皆で一斉に調査するイベントを開催した。地域の方にも参加いただき、学内の生物多様性について調査した。また、キャンパス内のゴミ拾いイベントも開催した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

一番の課題は、今回のイベントの目的であった、環境問題にあまり関心のない人をどう巻き込むかということだった。すでに環境系の学生団体や学位プログラムに所属する学生だけでなく、幅広い分野を学び、今まで環境問題に触れてこなかった学生が興味を持つために、イベントの内容や広報活動の工夫が必要だった。

運営に関しては、複数の大学が共同開催したイベントだったため、スケジュールの調整や企画の足並みを揃えることが課題だった。例えば、各大学で授業のスケジュールが異なるため、同時に開催するイベントの時間帯や、学生団体の立場の違いにより、大学によるイベントの後援の関係等の決定に時間がかかった。

また、学内で一緒に企画をする学生を集めることに困った。その結果、施設の確保やシンポジウムの登壇者との調整、広報活動など、1 人でやることが多くなってしまい、クオリティが低くなってしまったところがあった。さらに、企画の初期段階で予定していた学内企画（学食とのコラボレーション、図書館展示）に手が回らなくなってしまい、実施できなかった。

解決をどのように図ったか，困ったことを解決できたか

普段、あまり環境問題に関心がない人でもイベントに興味を持ってもらうため、シンポジウムではなるべく幅広い分野から登壇者を招いた。広報活動では、TWINS、SNS、ポスター掲示により告知を行い、「誰でも参加可能」という点を強調した。イベントの参加者は、環境系サークルや学類が多かった一方、そうでない学生にも参加していただき、「環境問題に少し関心はあるけど、何ができるかわからないから参加してみた」という声もいただけた。

運営に関しては、他大学と円滑なコミュニケーションを行うため、開催一年前から月に一度オンラインでミーティングを行い、タスク管理ツールを使って役割分担やスケジュール管理を行った。準備段階で対面でも集まる機会を設け、コミュニケーションをとりやすいよう、関係を深めた。

また、学内での協力者に関しては、T-ACT に紹介していただいた学生や、Design The Future 機構にご協力いただき、シンポジウムの配信や施設の手配ができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回の活動は、自身の「環境問題に取り組む仲間と繋がりたい」という想いがきっかけの一つであり、実際に学年や学類、さらに大学の壁を越えた、さまざまな学生と繋がることができた。企画段階や最終日の交流会で他大学の環境団体と交流があったことで、筑波での活動で悩んでいたことの相談や、今後の活動についての意見交換ができ、貴重な経験だった。

自身の活動を振り返って、チームワークの大切さを感じた体験だった。アイデアを出すところから企画を実施するところまで、チームだからこそ実現できた部分が多かった。だからこそ、もっと早い段階からオーガナイザーを集めておくべきだと反省する一方、オーガナイザーを見つける難しさも痛感した。

参加者への影響

シンポジウムの事後アンケートで、普段触れることがない分野の話も聞けてよかったとの声をいただけた。また、交流会の参加者からは、実際に活動してみたい、新しい活動のヒントになったとの声もいただけた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

同じビジョンを共有し、オーガナイザーとして一緒に活動してくれる人を見つけることは難しいのですが、とても重要です！そこで T-ACT の力を借りるのもおすすめです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- 活動の初期の段階から、どんなことに対してもとても親切に相談にのってもらえた。企画に向けてやらなければいけないことを一緒に言語化していただき、準備の全体像がわかった。
- T-ACT の今までの学生のネットワークから一緒に活動するオーガナイザーを紹介していただいた。例えば、複数の機器を使ってオンライン配信をしたいと考えていたところ、その経験のある学生を紹介していただき、スムーズに実施できた。
- ポスターの印刷や掲示、学内施設の予約が簡単にできた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

筑波大学かぶき會　第三場（第一回自主公演）
～TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAIDAISANBA ～The 3rd scene : The 1st independent performance～～ **(23020A)**

T-ACT プランナー　加藤　悠介（障害科学類4年）

活動目的

私は肢体不自由の障害があり、リハビリテーション・習い事の一環として日本舞踊・歌舞伎に親しんできた。その中で、歌舞伎の魅力をより多くの人に知ってもらいたいという思いが生まれた。 筑波大学には、能や狂言の研究会はあっても、歌舞伎の研究会はない。 最近はさまざまな新作歌舞伎が上演されているが、まだまだ「敷居が高い」「難しい」というイメージが強いのが現状である。

一方、海外とのつながりを考えると、過去十数年の間にニューヨークやラスベガス、パリでも海外公演がなされているほか、外国の人が歌舞伎の劇場を訪れることも多く、諸外国から高い関心が寄せられている。歌舞伎は色々なジャンルの劇に分かれており、それぞれの特徴もとてもユニークである。

第一場・第二場はオンラインでの開催であったが、第三場の準備から引き続く本企画では、筑波大学かぶき會自主公演を開催し、新演歌舞伎「雙峰相筑波（ふたつみね あいのちくなみ）」を制作・上演する予定である。この演目の原案は、筑波山の岩屋を舞台にした地歌舞伎の演目である。本学学生・教員をはじめ多くの人々の参加を積極的に歓迎するとともに、発表の場を通じて、学内外問わずさまざまな人と交流を深め、歌舞伎の面白さや幅広さ・奥深さを共有することを目的とする。

Purpose of KABUKI-KAI

Hello! This is Yusuke Tim KATO, a planner of TSUKUBA DAIGAKU KABUKI-KAI.
I have a physical disability called Cerebral Palsy and getting to know KABUKI with classical Japanese dance as one part of my rehabilitation. In that process, I have developed a desire to spread the appeal of KABUKI to as many people as possible. There are clubs for Noh and Kyogen, but no study groups for KABUKI at The University ofTsukuba.
Recently, a variety of new KABUKI performances have been produced and performed, but most people still havestrong images of KABUKI as "difficult" or "too old to enjoy it".
On the other hand, in terms of overseas, it has been performed overseas in New York, Las Vegas, and Paris overthe past decade. People from other countries often visit theaters of KABUKI, which describes that many of themstarted having an interest in it.
KABUKI is divided into various genres of drama, each with its own unique characteristics.
At this event, we are very welcome all students, teachers and other audience from everywhere. We are going toexchange with a variety of people actively and share the fun, breadth, and depth of this traditional entertainment through our KABUKI performance"Futatsumine Aino Chikunami (Traveling Waves From The Twin Peaks of Mt.Tsukuba)"

具体的な活動計画

第三場では、自主公演の開催ならびに筑波大学創基151年・開学50周年を記念する歌舞伎演目の上演を目標とした活動を行ってきた。今回の企画では、第一回目公演に向けての準備を引き続き行うとともに、舞台をあげることを目標にしている。

公演までの過程では、歌舞伎の小道具体験や発声練習などを稽古の中で行う予定である。オーガナイザーとの協力のもと、歌舞伎を楽しく理解してもらえるよう可能な限りの工夫を施すとともに、日本文化を通した国際交流をサブテーマに据え、学群や学年・言葉の垣根を超えて交流を深めるきっかけにもしたい。

なお、画像と映像の使用については、松竹株式会社と日本俳優協会に問い合わせし、第一場・初回開催前の2021年６月20日の時点で許可を得ている。

現時点で設定している大まかなスケジュールは、以下のとおりである。

12月～
　学内の教室を利用し稽古
2024年２～３月
　本番（具体的な公演日時はスタッフと協議して決める予定）

かぶき會にスタッフとして参加してくださる学生さんは、以下の公式 SNS からご連絡いただくか、URL から応募フォームをご記入ください。
プランナーもしくはオーガナイザーがお返事させていただきます。
かぶき會参加決定後、Teams, Slack, LINE グループに追加します。

【稽古について】
稽古の日程は役者・スタッフの皆さんが集まり次第話し合い、柔軟に決定しようと考えておりますが、1 回のお稽古に90～120分ほど要するとお考えください。（学業・アルバイト優先です。お休みの際はプランナーかオーガナイザーに一声ご連絡いただけますと幸いです。）
基本的には以下の 5 段階に分けて進めることにいたします。

顔寄せ（本読み）: 役者・スタッフが一堂に会し、自己紹介のもと顔合わせをします。座頭が演目の流れを説明します。読み合わせまでに、それぞれの配役と役者名とを決定します。また、今後の稽古の日程についても話し合います。
所要稽古数は 1 回を想定しております。

読み合わせ : 本読み後に決定した配役で、台本を読み合わせます。ここから各人の言い回しの調整・工夫が始まります。（もちろん、座頭はじめ歌舞伎の所作を知るスタッフがサポートします）
所要稽古数は 1 ～ 2 回を想定しております。

立ち稽古 : 台本を読みながら実際に立って演技をし、役者の舞台上での位置と演技の際のポイントを把握し共有します。所要稽古数は 3 ～ 4 回を想定しております。
ここまでの段階を平稽古（ひらげいこ）と言います。
平稽古と並行して、歌舞伎のお化粧についても実践を交えて知る機会を複数回設けます。

総ざらい : 音楽や照明、小道具、演技を含め、全てはじめから通してお稽古をいたします。
この頃には台本無しで演技をできるようになることが目標です。
所要稽古数は 1 ～ 2 回を想定しております。

舞台稽古 : 実際の舞台（教室）で扮装をした上で、本番さながらのお稽古をいたします。
所要稽古数は 2 ～ 3 回を想定しております。

活動場所
学内の施設を利用する予定。
稽古場は50名程度収容可能な教室を、本番当日は200人以上収容可能なホールを利用したいと考えている。

活動期間
2023/12/01～2024/03/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：岡佳穂（生物学類 4 年）纐纈ほのか（日本語・日本文化学類 2 年）
P：大倉浩先生（人文社会系）

備考
【公式 SNS】
https://twitter.com/itf_kbkofficial（公式 X）
https://www.instagram.com/itf_kbkofficial/（公式 Instagram）
イベント当日に来場できない参加希望者複数名より、「オンデマンド配信を行ってほしい」と要望があったため、「かぶき會」のオフィシャル SNS（Youtube、X 等）で録画配信を行いたい。会場でビデオカメラにてイベントの様子を録画し、その内容をオンデマンド限定で公開したいと考えている。
参加者の満足度調査および今後のかぶき會についての情報発信のため、開催後アンケートの実施を Google フォームを用いて行う。収集した情報はアンケート実施調査にのみ使用され、本人の許可を得ない限り第三者に提供することは一切ない。情報の取り扱いには十分に注意する。

<実施後アンケート回答フォーム>
https://docs.google.com/forms/d/1D1e3_l7tvxyCRUWui0MTd8rhVBpvCJS0PfAyOCMqBfw/edit?chromeless=1
第三場 / 第一回自主公演実施にあたり、募集する役者および技術スタッフ（照明・音響など）の所属学群・学類・性別は問わない。

【企画実施時・準備時の新型コロナウイルス感染予防対策】

・本企画においては、対面の会議や稽古に割く時間も多いことが予想される。そのため、参加者の健康管理は参加者自身が行うものとする。もし、感染の疑いがある場合は即座にプランナー・オーガナイザーに報告することとし、感染後 1 週間の対面会議参加を認めない。（取り扱いについては、筑波大学の指針に準ずる）その旨を事前に伝達する。
・対面での準備の際には、マスクの着用、使用器具の消毒を徹底し、ソーシャルディスタンスを保って活動など、筑波大学の指針に準ずる対応を行う。

活動報告

実際の活動内容

第三場では、自主公演の開催ならびに筑波大学創基151年・開学50周年を記念する歌舞伎演目の上演を目標とした活動を行ってきた。今回の企画では、第一回目公演に向けての準備を引き続き行うとともに、舞台をあげることを目標にしている。

公演までの過程では、歌舞伎の小道具体験や発声練習などを稽古の中で行う予定である。

オーガナイザーとの協力のもと、歌舞伎を楽しく理解してもらえるよう可能な限りの工夫を施すとともに、日本文化を通した国際交流をサブテーマに据え、学群や学年・言葉の垣根を超えて交流を深めるきっかけにもしたい。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

他サークルとの兼任メンバーが多く、稽古の参加者が少なかった。

会場の決定・ポスターの発行その他重要事項の着手が遅れてしまった。

解決をどのように図ったか，困ったことを解決できたか

全てのセリフを一言ずつ録音し、メンバーに音声ファイルで共有することで自主練習を可能にした。Teams, Slack, LINE グループにて密に連絡を取り合い、不測の事態においても連携できる体制を整えた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

これまでのオンライン主体の活動とは異なり、ほぼ対面での練習・実施であったため、参加してくれたメンバーとより濃い対話ができたように思っている。自身と演劇の向き合い方、エンターテインメントのあり方についても深く考えさせられた。今後も自主公演を行うのか、観劇をメインにするかはまだ決めかねているが、かぶき會の活動としては継続していきたいと考える。

参加者への影響

歌舞伎の観劇経験はあるが演じた経験はない（あるいは普段異なる演劇に携わっている）メンバーが多かったが、練習を通して歌舞伎の発声の仕方・表現の多様さを身につけてくださったので、短くも様々な要素をちりばめた演目に仕上がったと感じている。加えて、冠事業に選んでいただいたということから、公演に臨む全員の士気が高まり、これからのかぶき會発展のための大きな足掛かりになったと確信している。

観客のみなさまに行ったアンケートでは、「現代と歌舞伎の世界をどちらも楽しむことができ、贅沢な時間でした」「現代劇と歌舞伎の融合ということで、新鮮な気持ちで見ることができました。学生の立場で新作を一から作るのは大変だろうと思いましたが、見応えのある舞台でした」「めちゃくちゃよかった」「皆さんの歌舞伎への思いが感じられて、今後の活動も楽しみだと思いました」というお褒めの言葉を多くいただいた。他方、「大向こうのタイミングがよくわからず屋号を発声することができなかったのが残念だった」「可能であれば、観客が演者の近くに行ったり実際に話したりできる機会があると、より両者の距離感が近づくと感じた」「是非お金を取ったらいいと思う」など、今後の活動において考慮すべき事柄も多数ご指摘いただき、とてもありがたかった。歌舞伎を筑波大学で行うという新たな試みによって、多くの人の歌舞伎に対する固定観念や価値観を変える一助を担えたように思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分のやりたい！という思いに共感してくださるスタッフの方々、学生の仲間とともに、さまざまなプロジェクトを立ち上げられるのがT-ACTのいいところです。ためらわず、どんなことでも一度やってみると、新たな考え方が生まれてくると思います。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

発足当初から応援してくださっている木田さんをはじめ、多くの職員さんの協力のもと実行することができました。改めて深く御礼申し上げます。

印刷や物品の貸与などをやっていただけたおかげで、事前準備が非常にスムーズに進みました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

パレスチナ・イスラエル問題について知ろう。：Palestine-Israel Problem（パレスチナ・イスラエル問題）(23021A)

T-ACT プランナー　ZIYOKHUJAYEV JAMKHUR（生物資源科学学位プログラム）

活動目的

(English text is followed by Japanese)

活動目的はパレスチナ・イスラエル問題について認知度と問題意識を高めることです。そして、停戦・問題解決に向けた行動を呼びかけることです。

イスラエル・パレスチナ問題は、2023年の10月７日に生じたものではなく、前世紀の40年代から続いてきた問題です。残念ながら、この問題は日本や西洋のメディアなどでは取り上げられることが少なく、問題解決に対する国際的な取り組みがなされていませんでした。その結果、現在の状況が悪化し、非常に悲惨な状況に至りました。

この問題の背景を理解し、このような問題を防止や解決するために、政治的かつ経済的な権力 / 権威を持っていない私たちができることを、力と知恵を合わせてみんなで考えたいという意思で本企画を立案しました。

Purpose

The purpose of our activities is to raise awareness and concern about the Israeli-Palestinian issue, and call people for action.

The Israeli-Palestinian issue did not arise on October 7 2023, but has been an ongoing problem since the 1940sof the last century. Unfortunately, the issue has not been covered much in the Japanese or Western media, and there has been no international effort to resolve the problem. As a result, the current situation has worsened, leading to a very dire situation.

We have drafted this project with the intention of understanding the background of this problem and to think together, with our combined strength and wisdom, about what we, who do not have political and economic power,can do to prevent and solve such a problem.

具体的な活動計画

■！当日のプログラムに一部変更がございます。下記ポスター Jepanese version をご参照ください。

■！There are some changes to the event program for the day.

Please check to the new poster (japanese version) below.

(English text is followed by Japanese)

パレスチナ・イスラエル問題に詳しい防衛大学校国際関係学科の江崎智絵先生（以前は中東調査会の研究者）を筑波大学にお招きし、座談会を行います。

活動スケジュール
12月中
・江崎先生に講演依頼
・会場及び日時決定、当日スタッフ募集、広報開始
1月1日～21日
・広報、当日の開催準備
1月22日
・開催

当日の流れは以下の通りです：
①挨拶、会合の目的と流れの説明、ゲストスピーカーの紹介
②ゲストスピーカーから講演
（内容：パレスチナの歴史、イスラエルの設立～現在までの歴史）
③ゲストスピーカーとパネルディスカッション
（内容：江崎先生のパレスチナでの経験、両国の考え方と行動、今後の予想 / 見通し、解決策、私たちができることなど）
④ガザ地区にいる人とオンラインインタビュー
（内容：現地状況や生活について）＊時差や通信状況により録画の配信 / 放送の可能性あり
⑤ Q&A →閉会
（移動）
⑥ Tsukuba Demi（下の食堂）でグループディスカッション
⑦閉会の辞→ 終了

Event Plan
Dr. Chie Ezaki, a researcher at the Department of International Relations of the National Defense Academy of Japan (formerly of the Middle East Institute oof Japan), who is an expert on Palestinian-Israeli issues, will be invited to Tsukuba University to give a lecture.

Schedule of the Activitie
In December
・Request Dr. Ezaki to give a lecture.
・Recruitment of staff for the day of the event, reserving the venue
January 1-21
・Publicize the event, prepare for the day of the event
January 22
・The event will be held.

The flow of the day of the meeting is as follows:
① Greetings, explanation of the purpose and flow of the meeting, introduction of guest speakers
② Guest speaker will give a lecture.
(Content: History of Palestine and Israel from its establishment to the present)
③ Panel discussion with guest speakers
(Contents: Dr. Ezaki's experience in Palestine, thoughts and actions of both countries, future forecast/outlook,solutions, what we can do)
④ Online interview with a person from Gaza Strip
(Contents: About the situation and life in the area) *Please note that the video recording may be broadcastedor transmitted depending on communication situation.
⑤ Q&A → Closing of the main program
(Moving to another room)
⑥ Group discussion at Tsukuba Demi (the cafeteria downstairs)
⑦ Closing remarks → End of the optional session

活動場所
筑波大学　大学会館２階：国際会議室（収容人数：160人可能）
University of Tsukuba, University Hall 2F: International Conference Room (Maximum : 160 people)

活動期間
2023/12/01～2024/01/23

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：Muhammad Wildan Gifari（グローバル教育院　ヒューマニックス学位プログラム）
P：氏家清和（生命環境系）

備考
・Greeting and introduction will be in both English and Japanese.
The lecture will be given in Japanese, but the slides will be in English.
Pannel Discussion is completely in Japanese.
The interview with a Gazan citizen will be in English, with Japanese live translation.
挨拶などは日本語
講演は日本語だが、スライドは英語
パネルディスカッションは完全に日本語
インタビューは英語だが、日本語への通訳あり

・The interview with Gazan citizen might be live or pre-recorded, due to internet connection.
通信状況によりガザ地区の人とのインタビュー事前録画したものを使用可能性あり

・For the snd part of the event (Social Gathering/Group Discussion) drink bar (+sandwich?) will be provided. However it may cost ¥300-500/person. In case the student organization that is holding this event will have enoughmoney, we will pay whole or part of that fee for the participants instead.
２次イベント（親睦会 / グループディスカッション）は１階の食堂（つくばデミ）で行いますが、ドリンクバー（＋サンドイッチ？）が出ますので¥300～500がかかる可能性があります。本イベントを主催する学生団体の予算によりますが、予算が確保できれば全額あるいは一部の金額を負担致します。

・Parking will be available, but the space is limited. We kindly ask you to come by public transport if possible. In case you come by car, make sure that you mention that in the attendance survey. Link to the survey is provided in the poster.
駐車場はありますが、場所が限られているため、公共交通機関 で来られる方は公共交通機関をご利用いただきたいです。車でお越しの場合はアンケートにその旨をご一報ください。

・About the guest speaker. 江崎智絵先生について .
https://www.meij.or.jp/aboutus/researcher/ezaki.html
https://researchmap.jp/chie_ezaki?lang=ja

・ガザ地区にいる人とオンラインインタビューについて
ガザ地区にいる知人に依頼する予定

活動報告

実際の活動内容

パレスチナ・イスラエル問題について座談会を開催しました。

この問題は70年以上続いていますが、世界的にニュース等でよく取り上げ始めたのは去年の10月からです。日本人にとっては中東が遠くの地域であり、あまり馴染みがなく本問題について関心・知識が薄く、よくわからない・誤解している点がたくさんあります。この問題の深刻さを伝え、誤解を解き明かし、解決に呼びかける意思で企画したイベントになります。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒75％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

内容がセンシティブと思われるため実施許可を取るのに苦労しました。

また、他の大学の先生に講演の依頼、展示室の飾り付け、軽食の準備や施設や資材等の借り入れといった多くの作業があったため、少し大変でした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

大きなイベントだったため、それなりの苦労があったが、T-ACT の方々との相談や仲間の力を借りることで、無事に開催できました。

疲れた時は「向こうで苦労している人々のために、これが最低できることだ」と言って、頑張り続けました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

イベントを実施する上で必要なプロセスや注意点などがわかったので、以降の活動に向けて良い経験となったと思います。

実施後は自分の実力にもっと自信を持てるようになりました。

参加者への影響

イスラエル・パレスチナ問題についての認知度をある程度上げることができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

頑張ってください

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

情報・資材の供給や印刷の面で大変お世話になりました

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

【ミュージカル】プロの講師から表現する楽しさを学ぼう！（23023A）

T-ACT プランナー　飯村　夏帆（生物資源科学学位プログラム2年）

活動目的

お芝居や歌、ダンスなど、自分自身を表現する方法がたくさんあることを知ってもらうとともに、既存概念を揺さぶり創造性を高めてもらいたい、筑波大生と地域の方々との交流の場を増やす機会にしたいと考えています。今回の企画実施にあたって、2013年に劇団クリエの現メンバーでもある大西衿沙さんが実施した「[インプロ×ダンス] プロの講師から表現する楽しさを学ぼう！（13602A）」というT-ACT アクション企画の同プロジェクトを知り、同じく現メンバーであるプランナー・オーガナイザーが劇団クリエの講師の先生方にご協力をいただき、学内での第２回ワークショップの開催を立案しました。

劇団クリエはひたちなか市とつくば市で、オリジナルのミュージカルを制作・公演している団体です。クリエイティブスタッフ・テクニカルスタッフは、舞台経験が豊かなプロが担当していますが、参加者は小学生から大人まで、また初めてミュージカルに参加する人からプロを目指す人まで、活動している参加者の層が厚く広いことが劇団クリエの特徴のひとつです。本企画では講師の先生と一緒に行うワークショップに気軽に参加してもらい、ミュージカルを通じての表現の楽しさ・面白さを体感し、表現の幅を広げていくきっかけになって欲しいです。

具体的な活動計画

・準備スケジュール：
　12月　T-ACT 企画申請準備
　１月　スタッフ同士での打ち合わせ、会場探し・予約、広報資料作成
　２月　広報資料作成、広報活動、ワークショップ実施、反省会

・開催日時：
　２月22日（木）9:00～12:30
・場所：
　筑波大学第２体育館　※空きがなければ、教室なども可能
・スタッフ活動時間：
　8:30～13:00
・参加者活動時間：
　9:00～12:30
・タイムスケジュール：
　第２体育館の使用時間　8:00～13：00
　８:30～９:00　準備（スタッフ）
　９:00～９:55　お芝居
　10:00～10:55　歌唱
　11:00～11:55　ダンス
　11:55～12:00　まとめ
　12:10～12:30　振り返り（希望者のみ）
　12:30～13:00　片付け（スタッフ）

[お芝居　9:00～9:55　大滝順二先生]
○演劇の基礎（フォーカス、アイコンタクト、レベル 1 、 2 、 3 ）を、ゲームを通して学ぼう
○演じることや相手との表現のやりとり（アクションとリアクション）を楽しもう
●演劇の基礎について学ぼう
演劇の基礎は、①フォーカス、②アイコンタクト、③レベル 1、2、3 です。①～③でそれぞれゲームを 2 つずつ行い、要点を伝えていきます。

①フォーカス（注目する、相手をよくみる）
1．フォーカスゲーム
即時反応で、相手に身体を向ける。
2．ミラー
２人組で向き合い、相手の動きを鏡のように真似をする。
②アイコンタクト（目を合わせる）
1．拍手回し
円になり、ハイ！と発声しながら相手に拍手を回す。互いにフォーカスしアイコンタクトができるかチャレンジ。
2．ポーズ回し
円になり、ポーズを回す。ポーズが変わるのを見逃さずにポーズを回せるかチャレンジ。
③レベル 1、2、3（自分、相手、全体）
1．歩いて、止まって、床、天井
歩きながら講師の声をよく聞いて身体を動かす。全体をよく見てぶつからないように、相手（講師）の指示を聞き逃さないようにチャレンジ。
2．爆弾と盾
全体で動きながら、各自決めた爆弾の役の人からできるだけ離れる。盾の役の人を自分と爆弾役の人の間に入れられるかチャレンジ。

●台本を使い演じてみよう　☆題材：「銀河鉄道の夜」より
実際に声を出しながら、可能であればよりはっきり大きな声で台詞を言ったり、身振り手振りなどの動きを加えたり、感情を込められるところはなるべく感情を込めて演じてみたりしましょう。
1．自分の台詞を言う
相手に伝わるように大きくはっきり、キーワードを大切にしながら、全体（お客さん）にも伝わる声で言えるかチャレンジ。
2．相手と台詞のやりとりをする
相手を見ながらアクション・リアクションができるか、相手とのやり取り、互いに影響し合うのを楽しめるかチャレンジ。
終わったら、一緒にやってみてどうだったかペア同士で話をしたり、他のペアを見ていてどうだったかなど互いに感想を言い合ったりできると良いです。
大切なことは、うまくやることよりも、相手とのやりとりを楽しむことです。相手のパワーやエネルギーを感じながらも、自分もそれに影響される、互いに影響し合えるのがアクションとリアクションの楽しさだと実感してもらえたら嬉しいです。互いに影響し合い高め合える経験は、普段の生活の中でも活かしていけるものになると思います。

[歌　唱　10:00～10:55　上原久栄先生]
○みんなで声を合わせて歌うことで、歌う楽しさ、ハーモニーを作る楽しさを味わおう
●歌唱　☆使用曲：「銀河鉄道の夜」よりオープニング曲「銀河よ」
声の使い方、体の使い方、ハーモニー作り、日本語での歌唱表現について学ぶことができます。

[ダンス　11:00～11:55　梅原美穂先生]
○みんなで歌に合わせて踊り、音楽を共有し、音を体で表現することの楽しさを味わおう
○ダンスだけの表現と、音楽や歌詞に合わせて表現することの違いを楽しもう

●ウォーミングアップ
怪我をしないように、体を温めます。

●振付　☆使用曲：「銀河鉄道の夜」よりオープニング曲「銀河よ」
歌唱の時間で覚えた曲に合わせて、振り付けをしていきます。音楽を聴くこと、音楽に合わせることを意識し

てみましょう。また、一緒に歌って踊っている人を意識してみましょう。自分が歌詞を覚え歌い、踊りを覚え踊るだけでなく、意識を音楽や他者に向けて見ると、音楽と歌や踊りがみんなで一体になる感覚を感じることができます。

活動場所
筑波大学第２体育館

活動期間
2023/11/26〜2024/02/29

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：小谷千香子（医療科学類４年）
P：川西邦夫（医学医療系）、雷中方（生命環境系）

備考
・参加費無料
・参加をご希望する方へ
動きやすい服装、筆記用具、飲み物（水分補給のため）、汗ふきタオル、ダンスシューズ（ある方）をご用意ください。

活動報告

実際の活動内容
・日時：２月22日（木）9:00〜12:30
・場所：筑波大学第２体育館
・タイムスケジュール：
9:00〜 9:55　お芝居（大滝順二先生）
10:00〜10:55　歌唱（上原久栄先生）
11:00〜11:55　ダンス（梅原美穂先生）
11:55〜12:00　まとめ
12:10〜12:30　振り返り（希望者）

［お芝居　9:00〜9:55　大滝順二先生］
○演技の基礎（フォーカス、アイコンタクト、レベル１、２、３）を、ゲームで学ぼう
○演じることや相手との表現のやりとり（アクション・リアクション）を楽しもう
●演劇の基礎について学ぼう
演劇の基礎は、①フォーカス、②アイコンタクト、③レベル１、２、３です。①〜③でそれぞれゲームを２つずつ行い、要点を伝えていきます。

①フォーカス（注目する、相手をよくみる）
1．フォーカスゲーム
即時反応で、相手に体を向ける。
2．ミラー
２人組で向き合い、相手の動きを鏡のように真似する。
②アイコンタクト（目を合わせる）
1．拍手回し
円になり、ハイ！と発声しながら相手に拍手を回す。互いにフォーカスしアイコンタクトができるかチャレンジ。
2．ポーズ回し
円になり、ポーズを回す。ポーズが変わるのを見逃さずにポーズを回せるかチャレンジ。

③レベル１、２、３
1．歩いて、止まって、天井
歩きながら講師の声をよく聞いて身体を動かす。全体をよく見てぶつからないように、相手（講師）の指示を聞き逃さないようにチャレンジ。
2．爆弾と盾
全体で動きながら、各自決めた爆弾の役の人からできるだけ離れる。盾の役の人を自分と爆弾役の人の間に入れられるかチャレンジ。

●台本を使い演じてみよう　☆題材：「銀河鉄道の夜」より
実際に声を出しながら、可能であればよりはっきり大きな声で台詞を言ったり、身振り手振りなどの動きを加えたり、感情を込められるところはなるべく感情を込めて演じてみたりしましょう。
1．自分の台詞を言う。
相手に伝わるように大きくはっきり、キーワードを大切にしながら、全体（お客さん）にも伝わる声で言えるかチャレンジ。
2．相手と台詞のやりとりをする。
相手を見ながらアクション・リアクションができるか、相手とのやり取り、互いに影響し合うのを楽しめるかチャレンジ。
終わったら、一緒にやってみてどうだったかペア同士で話をしたり、他のペアを見ていてどうだったかなど互いに感想を言い合ったりできると良い。
大切なことは、うまくやることよりも、相手とのやり取りを楽しむことです。相手のパワーやエネルギーを感じながらも、自分もそれに影響される、互いに影響し合えるのがアクションとリアクションの楽しさだと実感してもらえたら嬉しいです。互いに影響し合い高め合える経験は、普段の生活の中でも生かしていけるものになると思います。

［歌唱　10:00～10:55　上原久栄先生］
○みんなで声を合わせて歌うことで、歌う楽しさ、ハーモニーを作る楽しさを味わおう
●歌唱　☆使用曲：「銀河鉄道の夜」よりオープニング曲「銀河よ」
声の使い方、身体の使い方、ハーモニー作り、日本語での歌唱表現について学ぶことができます。

［ダンス　11:00～11:55　梅原美穂先生］
○みんなで歌に合わせて踊り、音楽を共有し、音を身体で表現する楽しさを味わおう
○ダンスだけの表現と、音楽や歌詞に合わせて表現することの違いを楽しもう

●ウォーミングアップ
怪我をしないように、身体を温めます。

●振付　☆使用曲：「銀河鉄道の夜」よりオープニング曲「銀河よ」
歌唱の時間で覚えた曲に合わせて、振付をしていきます。音楽を聴くこと、音楽に合わせることを意識してみましょう。また、一緒に歌って踊っている人を意識してみましょう。自分が歌詞を覚え歌い、踊りを覚え踊るだけでなく、意識を音楽や他者に向けてみると、音楽と歌や踊りがみんなで一体になる感覚を感じることができます。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

筑波大学ＴＹチャンネル第二期（22004P）

T-ACT プランナー　田中　洋子（人文社会系教授）

活動目的

2022年12月より筑波大学 TY チャンネルの収録を開始し、3 月初めまでに、8 本の番組を配信した。1 月より Anchor、Spotify だけでなく、Apple Podcast、Amazon Music での配信も開始した。現在の再生数は238回で、大学生、23～34歳を中心に、高校生や45～59歳の視聴も伸びている。視聴者の 2 割は米・独・仏・デンマーク・スウェーデン、シンガポール、モロッコの海外在住者となっている。

筑波大学からの留学・海外インターン体験や、逆に海外から筑波への留学体験、卒業研究の紹介などを伝えることで、筑波大学での学生生活を多くの人々に紹介することができる。半年で終えるのではなく、第二期としてこの活動を継続していきたい。

具体的な活動計画

2022年12月に開始した筑波大学 TY チャンネルの配信を、第二期として続けていく。

第一期では、筑波大学からの留学・海外インターン体験、海外から筑波への留学体験、卒業研究の紹介を 8 回に分けて行ってきた。第二期では、海外留学をした学生・卒業生による座談会、外国人留学生による母国の紹介、ゼミ活動の紹介、さらに起業した卒業生による起業経験の話などを多くの人に伝えていく。

それと平行して、Anchor、Spotify、Apple Podcast、Amazon Music での配信について、Instagram など SNS を通じて広報する。

活動場所

従来どおり、収録はズームで行う。

活動期間

2023/04/01～2023/09/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：野津真衣

活動報告

実際の活動内容

2022年12月より筑波大学 TY チャンネルの収録を開始し、第二期へと継続した。

筑波大学からの留学・海外インターン体験や、逆に海外から筑波への留学体験、卒業研究の紹介、さらに海外留学生による話を伝えることで、筑波大学での学生生活を多くの人々に紹介してきた。

[海外留学関係]

・海外留学シリーズ第一弾：ドイツ・ケルン大学編
・海外留学シリーズ第二弾：フランス　ボルドー大学編
・海外留学シリーズ：ドイツ・デュッセルドルフの留学生活
・海外留学シリーズ：日本人ドイツ留学者 3 名＋ドイツ人日本留学者がドイツを語る座談会
・海外インターン　ミラノ・ファッション・ウィークで働く

[卒業研究関係]

・卒業研究シリーズ：サッカーの指導者養成システムの比較研究
・卒業研究シリーズ：環境問題が変える食生活…ドイツの菜食市場拡大
・卒業研究シリーズ：循環型経済に進むフランス ·AGEC 法の衝撃
・卒業研究シリーズ　日本の非正規・貧困問題に取り組む全国ユニオンとその限界

[外国人留学生関係]

・外国人留学生シリーズ第一弾：ハンガリーからみた日本の学生生活
・外国人留学生シリーズ第二弾：ハンガリー人が紹介するハンガリーと中東欧の歴史

［学生活動関係］
・ゼミ生活動シリーズ第一弾：クラウドファンディングと寄付で5,000万円資金調達
・ゼミ生活動シリーズ第二弾：南米コロンビア・ロスアンデス大学研修報告
・ゼミ活動シリーズ：伝統的日本酒・生酛の酒造りを丸ごと紹介
　2023年 1 月より、Anchor、Spotify だけでなく、Apple Podcast、Amazon Music での配信も開始した。
現在の再生数は500回程度と少数であるが、大学生、23～34歳を中心に、高校生や45～59歳の視聴も伸びている。
視聴者の 2 割は米・独・仏・デンマーク・スウェーデン、シンガポール、モロッコの海外在住者となっている。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
・仕事が忙しくて編集・公開作業の時間がとれない。
・担当する人がいないため、ちらし作成・広報ができなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
・T-ACT でチラシ作成を支援してくれるとのことだったが、人が見つからないようで叶わなかった。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
　緊張してなかなか慣れない。収録にとてもストレスがかかる。とても固い口調にとなってしまう。なんとか慣れないものか。。。
　仕事が忙しすぎて、収録はしたものの編集・公開作業までこぎつけられないものが多くなってきた。

参加者への影響
　聞いてくれた何人かから、とても面白かったと言ってもらえた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
　あまりに忙しすぎる時は、先のばしにするしかない時もある。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
　特に何の支援もなかったが、ちらしの作成と掲示だけでも、支援がほしかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？ ⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

Science Cafe in English 英語でサイエンスカフェ（23004P）

T-ACT プランナー　芝田　圭子（URA 研究戦略推進室）

活動目的

つくば市内は短期滞在の研究者や学生、新規流入人口の多い中で、それらと地元市民との交流の場が少ないと感じる。学内でも同様に、職員・学生同士の横のつながりがなく、また市民と触れ合う機会がない人も多い。

国籍・年齢・性別にこだわらない友人作りといばらきの魅力発掘をテーマに各種イベントを開催してきた経験を活かし、国際交流をきっかけにして、D&I（Diversity and Inclusion）を促進できないかと考え、企画提案を検討してきた。

昨年度、海外研究者も参加する本学のオンライン英語交流会 BOM（Borderless Online Meeting）の企画運営をしてきたが、その中で研究者同士や地元の人との横のつながりがないとの声があったため、本企画を提案するに至った。

大学らしい深い学びもあるイベントを通じ、楽しく交流をしながら、いつの間にか相互理解につながり、研究者同士や海外人材とつくば市民がつながるきっかけにしたい。

具体的な活動計画

【目標】

英語でサイエンスカフェ（Science Café in English）と題し、一般の人々にも分かりやすい、サイエンスに関する気軽な話題を提供してもらいながら、つくば在住・在勤・在学等の国際人材に交流する機会を設ける。

【活動概要】

・開催日：12/8、12/29、2/23
・開催時間：19:00～20:00
・開催場所：co-en（つくばセンタービル 1 階）・オンライン（ハイブリッド開催）

【プログラムの流れ】1 時間

・オープニング 5 分
・プレゼンテーション15分
・質疑応答10分
・グループに分かれてのディスカッション10分×2
・まとめ10分

【スピーカー・トピック内容】

12月 8 日　JAXA 有人宇宙技術センター 研究開発員（Researcher at JAXA Human Spaceflight Technology Center）
波多野　愛（Ai Hatano）
Science Cafe in English ① International Space Station Basics and Space Food
（英語でサイエンスカフェ①国際宇宙ステーションの基礎と宇宙食）

12月29日　数物系伊藤研究室博士学生（Ph.D. Student at Fujita-Ito Lab, Department of Applied Physics, Graduate School of Science and Technology, University of Tsukuba）
アイミ・アシラ・ビンティ・ハジ・タジュディン（Aimi Asilah Binti Haji Tajuddin）
英語でサイエンスカフェ②クリーンな水素製造用触媒の開発
（Science Cafe in English ② Development of Catalysts for Clean Hydrogen Production）

2 月23日　独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）細胞分子工学研究部門（CMB） 研究員
（Postdoctoral Researcher at National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST) Department - Cellular and Molecular Biotechnology Research Institute (CMB)）
ブラムセティ アルン クマール　博士（医学）（Burramsetty Arun Kumar, Ph.D.）
人間総合科学研究科生命システム医学専攻遺伝子制御研究室修了
英語でサイエンスカフェ③細胞生物学の基礎と現代医学の未来生物学について
（Science Cafe in English ③ Basics of cell biology & Future of modern medicine）

【ファシリテーター】

12月 8 日　松井　龍也（Tatsuya Matsui）氏
12月29日　山村　英司（Eiji Yamamura）氏
2 月23日　未定

【使用言語】
英語（日本語サポートあり）

【スケジュール】
10月：茨城県科学技術振興財団サイエンスツアーオフィスのサイエンスカフェの企画申請、T-ACT プランの企画申請
11月：トピック決定、開催準備
12月：１，２回目開催（12/8，12/29）
１月：振り返り、開催準備
２月：３回目開催（2/23）
３月：振り返り、報告書作成

活動場所
co-en（つくばセンタービル１階）/ オンライン（ハイブリッド開催）
※つくばに縁のある海外研究者にも参加の道を開きたく、Teams によるハイブリッド対応あり。

活動期間
2023/12/01～2024/03/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：Aimi Asilah Haji Tajuddin 数理物質系伊藤良一研究室（博士課程）
Cristina Kong Pei Ying　数理物質系伊藤良一研究室（交換留学生）
内田明空　所属総合学域群第１類（１年）

備考
茨城県科学技術振興財団サイエンスツアーオフィスより、サイエンスカフェの企画募集があったため、広報局を通じて応募し、コラボレーションしながらの企画運営を行う予定。
金銭的サポートはないが、会場の利用、及び会場内の飲み物やお菓子等を用意してもらえる。また、学外への広報と申込等の支援を受けることができる。そのため、プランナー及びオーガナイザーは、本活動の企画と運用を中心に行いながら、参加者間の交流を深められるようサポートする予定。T-ACT プランを申請することで、たくさんの留学生や外国人研究者が参加して交流を深められるよう、学内に向けて広報や周知を行 いたいと考えている。

活動報告

実際の活動内容

ほぼ当初のスケジュール通りに活動できた。今回、企画・全体運営を(一財)茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィスが、会場・施設運営をつくばまちなかデザイン(株)が担っており、自分がぼんやりと描いていたイメージが、それら協力機関のサポートによって、具体化していった。活動終盤、プランナー自身の体調不良で最終イベントの実施が危ぶまれたが、周囲の協力により、完走することができた。

つくばの一般市民と科学者を繋ぐ、という目的は3ヶ月間である程度達成することができ、その意味では一定の成果があったといえると思う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

会場に来られない、元つくば在住の海外の研究者や元留学生にも参加の道を開きたく、ハイブリッド開催を考えていたが、会場となるco-enにはWi-Fiはあるが、オンライン会議システムは設置されていなかった。

また、3回イベントを主催したが、自分たちにとって最終回の開催日の数日前にプランナー自身が倒れてしまい、開催が危ぶまれた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

ハイブリッド配信のイメージを初回のファシリテーター、物質・材料研究機構（NIMS）WPI-MANAアウトリーチチームの松井龍也さんに伝えたところ、ファシリテーションを行いながら、NIMSのオンライン配信機器を使って配信も行うという離れ業で助けてくださった上、2回目のイベントでも配信協力を申し出ていただいた。

最終イベントの際は、プランナー自身が開催数日前に高熱で倒れ、会場に行けなくなってしまったため開催自体が危ぶまれたが、周囲から救いの手が差し伸べられ、無事開催することができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

昨今の国際情勢の中で、正面から国際交流を取り上げることで、個人の責任ではないところで起こった国際紛争の影響を受け、いたたまれない思いをしている人もいるのではないか、気になっていた。そんな中、サイエンスコミュニケーターのゆーみるしーことKEK広報の青木優美さんと出会った。科学は国と国との架け橋となり、紛争をしている国同士の研究者が協力し合うこともある…国際交流の手段として科学を題材にすることは意味がある、と。T-ACTフォーラムの企画として開催を模索していた。東京レインボープライド（TRP）にて、本学ブースのボランティアでLGBTQ+に関する学びを深めたことで、サイエンスをテーマにすることで、誰もが安心して参加できる場所を作れるのではないか、と思った。

今回、広報局を通じて、各研究機関に募集がかかった金夜サイエンスカフェに参加する機会を得たことも大きい。企画・全体運営を(一財)茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィスが、会場・施設運営をつくばまちなかデザイン(株)が担っており、駅前のコワーキングスペースco-enのイベントスペースを利用することができ、ファシリテーターの紹介を受けることもできた。

企画運営を通じて、能力もさることながら、マインドの素晴らしい多くの人に支えていただいたことに感謝したい。

参加者への影響

ターゲットを、学内・学外一般（誰でも参加可能）としていたが、学内からの参加者は少なかった。金曜の夜という、他にもイベントが多く、かつ内2回は年末や三連休初日でもあったわりには善戦したと思う。

英語開催にこだわり、上級者が退屈せず、基礎レベルでもついていけるよう、中級程度のレベルを想定していたが、実際には専門外の日本人の一般市民が多く、用語がわからず、もっと日本語を入れてほしいとの要望が多かった。

紹介されたファシリテーター2名は、それぞれの持ち味があった。シンコムアグリテックCEOの山村さんは臨機応変に対応してくださった。国籍・ジェンダーの話題を出さないよう、グランドルールを設けたが、そのデータも1回目のファシリテーターの松井さんが作ってくださった。つくばサイエンスツアーオフィスの髙野さん、つくばまちなかデザインの武田さんも、ファシリテーターができる実力を備えていながら、開催準備から、当日の裏方と盛り上げまでを担ってくださった。

スピーカーの内、1名は本学出身のポスドク研究員、1名は大学院生だった。今回、市民の前で自身の研究成果を発表し、好意的な反応を体感することができ、感激していた。

英語でサイエンスカフェの広報活動の結果、金夜サイエンスカフェの常連となった参加者も現れた。サイエンスシティつくばで、一種の化学反応を起こすことができたなら幸いである。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何をしたいかわからなくても、動き出すことで、協力してくれる人は、きっと出てきます。勇気を出して、行動してみよう！まずは、気軽に T-ACT のドアを叩いてみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

当初、T-ACT の存在は知っていたものの、職員として、どのように利用して良いか分からずにいた。たまたま、TRP のボランティアで T-ACT の木田さんにお会いしたことが相談のきっかけとなった。

紙質の良いポスターやフライヤーの印刷もありがたかった。T-ACT の承認印があったので、学内での掲示依頼もスムーズだった。また、T-ACT フォーラムの主催企画ということで、広報局へ学外者も参加できるイベントとして、機関サイトに掲載を依頼できた。勿論、T-ACT のウェブサイトを通じて、興味を持った学生からも連絡があった。

T-ACT を利用しなければ、何とか企画を実現させようと奮闘することもなかったかもしれない。李先生、木田さんが、親身に相談にのってくださったおかげで、考えを整理することができ、計画を具体化することができた。利用を迷っている人には、早めに相談することをお勧めしたい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

「つちうらであそぼ・まなぼ」「Youth Challenge Project」

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

（つちうらであそぼ・まなぼ）

「みんなが楽しみ・まなび・つながる場を」そんな思いで土浦駅周辺の施設や店舗による周回イベントを開催。

７月は「カブトムシふれあい体験」「鉄道体験」「キッズギター体験」「ボードゲームコーナー」などの催しや、10月は「自衛隊試着体験」「親子で健康チェック」「プチ起業体験出店コーナー」など様々なコーナーやイベントが行われた。

（Youth Challenge Project）

高・大学生等、異学年の若者の【自ら課題を発見し、その課題解決に積極的に取り組む】活動を継続的に支援することを目的とした【Youth Challenge Project】を実施した。令和５年度は「今までの活動を踏まえて、課題解決への取り組みに向けてグループごとに研修をおこなう」「異なる学校、異なる学年による活動日程調整の難しさを解決するために、オンラインで情報を共有する」「課題発見から、自分たちが考えた解決策までの活動を発表会で報告する」「『Youth Challenge Project』後の各自の活動を考える」をテーマに発表が行われた。

活動日

「つちうらであそぼ・まなぼ」

2023年７月30日、10月29日

「Youth Challenge Project」

2023年４月16日、５月21日、６月18日、７月16日、８月６日、９月17日、10月９日

参加学生

T-ACT ボランティア：18人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

「つちうらであそぼ・まなぼ」では、BLUE ONE BEAT が【障害者スポーツを通じて筑波大生と遊ぼう】、障害者の生活に関するボードゲーム製作会が【The WEB を体験しよう】を出展し、遊びを通じて障害者理解を進めることができた。「Youth Challenge Project」は、高校生が地域・社会課題を自ら見出し解決にむけた活動を実践する事業。BLUE ONE BEAT の学生が高校生をリードしながら、活動できた。

「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用 (21002V)

受入団体名：“矢中の杜”の守り人（16008G）

活動内容

国登録有形文化財の歴史的建造物（矢中の杜）の保存活用と週末の邸宅公開。平成20年に旧矢中邸の所有者が変わったことをきっかけに、所有者や筑波大学の学生が中心となり邸宅の保存活用活動を開始、平成22年６月に NPO 法人を設立しました。定期的な邸宅公開や自由なアイディアによる活用事業により、地域とのつながりも深めています。

活動期間

2023年４月～2024年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：５人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

矢中の杜の邸宅公開のスタッフとして、公開準備から受付、ガイド、勉強会や掃除や庭の手入れ作業まで、一般のボランティアスタッフと一緒に活動していただきました。今年度は地下の穀物蔵を利用して、テラリウム・アクアリウムの展示会や陶芸の展示会など、サークル活動でも邸宅を活用していただき、企画から開催まで様々工夫して、文化財の保存活用についてさらに関わりを深めていただいたように思います。

つくばこどもの青い羽根学習会 (22003V)

受入団体名：青い羽根学習支援　梅園教室（23002G）

活動内容

生活保護世帯・および就学支援世帯の子どもたち（小学１年生～高校３年生まで・20名）の学習支援および居場所づくりのために、主任学習指導員として連絡係（メールや電話）つくば市役所においての年２回のボランティア登録会出席・年４回の連絡協議会出席・子ども食堂へ寄付する野菜の世話・おにぎりやカレー作りなどをしました。また、夏休みには７月の最初の10日間、毎日午前中９時～12時、自習室を開放していたため、その見守りも行いました。

活動期間

2023年４月～2024年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：２人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

不登校の子たちもいたので、若い学生ボランティアさんたちは「まずは毎週来てもらうための『居場所作りをしよう』と、ボードゲームやカードゲームを揃えてくれたり、昆虫採集と標本づくりのワークショップを企画してくれたり、本や漫画を揃えてくれたり、若い感性で教室に新しい風を吹かせてくれました。そのため、梅園教室が子どもたちも、ボランティアの先生たちも自由に自分の意見が言える風通しの良い場所になりました。今後は、学習だけではなくさまざまな「経験値」をあげていけるように、いろいろなイベントに子どもたちを連れて行ったり、テーブルマナーや性教育、占いイベントで悩み事相談などを企画しています。私たち大人よりも目線が子どもたちに近い学生さんたちに積極的に関わっていただきたいです。新しい意見をお待ちしております。

今後は、学習支援に参加している子どもたちだけではなく、ボランティアの先生にも梅園教室が「居場所」や「自己研鑽」の場所になるように配慮していきたいと思っています。

NPO法人チャリティーサンタつくば支部運営スタッフ／当日ボランティア募集 (22010V)

受入団体名：NPO 法人チャリティーサンタつくば支部（18005G）

活動内容

12月24日クリスマスイブにサンタクロースのご家庭訪問をしています。訪問金として一家庭2,000円を頂き、このお金がチャリティー金となり、世界中の子どもたちや日本の貧しい子どもたちの為に使用されています。運営スタッフは、24日にサンタになるボランティアの方や、訪問するご家庭の保護者と連絡を取り合ったりして、社会貢献につながっているこの活動を支えています。

活動期間

2023年４月～2024年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：５人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

年間を通して活動してくれたボランティアの学生さんはご家庭からの依頼対応や当日ボランティアの担当割りなど、積極的に進めていってくれました。

イブ当日のボランティアの方は当日ボランティアする為に必要なサンタ説明会・講習会とクリスマスイブ当日のみを一緒に活動しましたが、他の参加者と楽しく関わっているようでした。また、皆さん訪問ご家庭から帰宅した時にイキイキとした表情をしていたのが印象的でした。

イブのサンタ活動が縁で支部活動のお手伝いをしてくれる学生さんも居ます。

茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう (23002V)

受入団体名：一般社団法人 アイネット（18007G）

活動内容

ひきこもり出張相談への同行・書記補助、ひきこもり女子会への参加、ひきこもり支援フォーラムでの受付・案内・書記補助、不登校・多様な学び NW「つながる“縁”日」受付・案内・子どもとの触れあい、利用者への学習支援など。

活動期間

2023年４月１日～2024年２月27日

参加学生

T-ACT ボランティア：３人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

終始明るく穏やかな態度であり、真面目に取り組んでくれた。書記補助はとても見やすくまとまっており、出張相談の同行の際には相談者が相談しやすい雰囲気づくりに努めてくれた。

●学生参加者：渡辺　明佳（医学群看護学類看護学１年）

活動の成果

「茨城県の引きこもり支援をもりあげよう」のボランティアに参加して、引きこもりとその支援について学ぶことができました。

まず研修に参加して、引きこもりの支援をうまく行うためには相談を聞く際の姿勢が重要であることを学びました。引きこもりの人とその家族には、相談してくれたことをまずねぎらうことが必要です。

実際に支援に参加させてもらうこともできました。現在19歳の高校受験の学習支援に関わらせてもらいました。最初は短い文章を書くのにも時間がかかっていましたが、段々長い文章が時間内に書けるようになっていてやりがいを感じました。

このボランティアでは、今まで知らなかったことを多く学ぶことができました。これからもこの経験を活かしていきたいと思います。

学内の放置自転車を一緒に減らそう！プロジェクト (23010V)

受入団体名：筑波大学事業開発推進室（23008G）

活動内容

各エリアに集積されている放置自転車の中から、ピックアップが可能な状態の良い自転車を回収し、秋学期入学のサブスク自転車利用契約の申し込みがあった学生に引き渡し作業を行った。

申込者の受付確認、自転車のセレクト、テストラン及び自転車取扱いの説明を行った後、サブスク自転車契約者175名が契約し自転車を利用し始めた。

活動日・活動場所

①９/17　サブスク用自転車（180台）の運搬（平砂共用棟から一の矢共用棟へ）
大学職員が運転する２ｔトラック１台と軽トラック１台、協力企業の軽トラック１台に自転車を積み込んで運搬をした。
②９/20～９/22　秋学期入学（留学生）のサブスク自転車契約者へ自転車の引渡し作業
③④10/21、10/28　各エリアに集積されている放置自転車の中から、ピックアップが可能な状態の良い自転車を回収し、平砂学生宿舎共用棟に運んだ。
⑤３/30　平砂宿舎に集積されている修理済み自転車350台を一の矢宿舎駐車場に運んだ。
⑥４/２～４/４　自転車利用の申し込みがあった学生に引き渡し作業を行った。

参加学生

T-ACT ボランティア：18人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

これまで学生と接する業務に携わったことがほとんどなく、ボランティアを行っている学生と関わったことも初めてだった。参加者と話をして感じたのだが、各々参加の目的は違うのかもしれないが、自分の参加できる範囲でよりよい環境づくりをという気持ちが感じられた。ボランティアに積極的に参加してくれる学生がいるということが、大学職員として嬉しく感じた。

●学生参加者：小嶋　岳（体育科学学位プログラム博士１年）

活動の成果

回収・修理された学内の放置自転車を秋学期入学の留学生に対して貸し出す補助を行なった。具体的には、自転車を選択・試走する際にアドバイスを行い、自転車の登録手続きを行った。事前登録していない学生に対しても不足なく自転車を貸し出すことができ、準備した160台の自転車のうち140台ほどを貸し出すことができた。また、長期間自転車に乗っておらず、苦手意識のある方々に対して走行の練習とアドバイスを行った。日本に来たばかりの留学生がすぐ自転車を利用でき、多くの学生が満足そうな表情をしていた。

修理が終わった自転車を平砂宿舎から一の矢宿舎まで運び、一の矢宿舎にて自転車の引き渡しを手伝った。多くの自転車を運び引き渡すことを達成できた。

今後の課題
　なかなか自分に合う自転車を見つけられない学生がいたことが困難な点であった。放置された自転車は状態がさまざまで、修繕したとしても不調な自転車がある。自転車が良い状態で必要な人の手にわたるよう、不要自転車の回収率を増やすことが課題であると思った。また、日本の自転車の使い方を教えることに少し時間がかかった。主に自転車スタンド、サドルの調節方法、ライトの点灯方法を伝える動画などがあると、より円滑になると思った。個人的な課題として、自転車に乗ることができない学生に乗り方をうまく教えることがあげられる。みなさんが安心して安全に自転車を利用するため、乗り方に関するアドバイスができるようになりたい。

●学生参加者：高橋　蓮（人文・文化学群人文学類 1 年）
活動の成果
　修理が終わった自転車を平砂宿舎から一の矢宿舎まで運び、一の矢宿舎にて自転車の引き渡しを手伝った。多くの自転車を運び引き渡すことを達成できた。

今後の課題
　留学生との英語でのコミュニケーションが困難であった。そのため、今後は伝わりやすい表現を使うようにしていきたいと思った。

●学生参加者：Gwatirisa Mubaiwa（理工学群総合理工学位プログラム総合理工学 2 年）
活動の成果
Generally, we collected a targeted number of bicycles, transported them for recycling, and distributed the bicycles to new international students. The activity was very interesting and I was impressed by the cooperation from each participant and enjoyed conversations with everyone.

今後の課題
Overall I faced no problems in this volunteer activity. However, as this was my first time signing up for volunteer activities, I was a little bit nervous about how I would participate. After performing the activities, I gained more motivation to sign up for volunteer activities.

●学生参加者：市川　智久（生物学類 1 年）
活動の成果
　学内の放置自転車を合計200台近く回収した。
場所は春日地区、2H 棟前駐輪場、中央図書館下付近、一の矢学生宿舎の計 4 つの放置自転車保管場所である。元より 3 つの地区を回る予定であったため、それよりわずかに多くの自転車を回収できた。

今後の課題
　今回はボランティア参加者が自分一人であったため問題は無かったが、自転車運搬用トラックが 3 台までしかないため、事務員等を含め計 8 人以上だと人が余る。

●学生参加者：匿名希望
活動の成果
Bicycle loading work
Handing over of subscription bicycles to each subscriber

今後の課題
Volunteers remained consistently motivated and engaged during the project, primarily through direct interactions with team leaders and also the establishment of meaningful connections with new students. I am enthusiastic about the prospect of participating in similar endeavors during my leisure time.

小学生対象サイエンスツアー工作実験教室と科学館見学のサポートスタッフ募集 (23011V)

受入団体名：つくばサイエンスツアーオフィス（一財）茨城県科学技術振興財団（13002G）

活動内容

つくばサイエンスツアーオフィス（一般財団法人茨城県科学技術振興財団）は、ノーベル賞受賞者　江崎玲於奈のもと科学技術の普及啓発等を図ることを目的に、つくば市内の約50か所の研究機関とつながる公共の機関です。

小学生を対象に簡単な工作や科学実験を通して、驚きや感動を提供し、科学・技術に対する関心を高めてもらうことを目的としています。

活動日・イベント名・活動場所

・6月11日
　小学生対象サイエンスツアー　工作実験教室と科学館見学（見えない空気を科学しよう）
　つくば市大穂交流センター / 地質標本館・筑波宇宙センター
・7月27日
　チョウの翅の鱗粉転写でポストカードを作ろう
　つくば市吾妻交流センター / 地質標本館・筑波宇宙センター
・8月10日
　ドライアイスで起こる不思議な低温現象を楽しもう
　つくば市大穂交流センター / 地質標本館・筑波宇宙センター
・11月26日
　手作りカイロで暖まり、カイロの仕組みを考えよう
　つくば市吾妻交流センター / 地質標本館・筑波宇宙センター

参加学生

T-ACT ボランティア：5人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

月1回程度開催している小学生を対象としたイベントで、工作実験教室の準備や片付け、参加児童の手助けや科学館見学時の引率補助をお願いしました。参加者、講師とも積極的にコミュニケーションをとり、こちらから指示をだす前に自主的に行動して下さり、スムーズにイベントの運営ができ、とても助かりました。参加学生さんからも普段できない経験や研究展示館の見学で科学の街つくばに触れることができた、楽しかったと感想をいただきました。

ボランティア参加者募集！T-ACT ×つくばボランティアフェスタ (23013V)

受入団体名：T-ACT 推進室（staff-P）

活動内容

第49回雙峰祭にて T-ACT ×つくばボランティアフェスタの出展をしました。T-ACT で活動する学生・教職員と、地域団体・市民の皆さんが交流する場を設け、互いに協力しながら T-ACT の活動紹介・つくば市社会福祉協議会の登録団体及び個人の活動を紹介することを目的として出展し、盛況のうち終了しました。

【出展内容】
・展示
・体験コーナー
・ワークショップ
・工作教室
・ミニ演奏会
・物品販売（学生企画のみ） 等の計25企画を実施予定。

【活動スケジュール及び活動内容】
11月３日（金）～11月６日（月）
教室内の机・椅子の撤去、会場設営、出展団体の搬入作業、各地域団体・学生企画ブースのお手伝い

活動実施場所

1E 棟101，203，204，402教室

参加学生

T-ACT ボランティア：５人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

学生３名が、イベント準備日・当日の搬入搬出作業に携わってくださいました。

重い机・椅子の移動、会場の飾りつけを搬入時間内に完了させるといった作業を、つくば市社会福祉協議会の皆さんや T-ACT サポーター達と、楽しみながら行っていたのが印象的でした。最初はぎこちなかった参加者同士が、共同作業を通して、徐々に打ち解けていく様子を見て、私自身も嬉しく感じました。

今回のイベント開催目的の一つは、学生の皆さんと地域のつながりの場を創出することでした。気軽に参加して、地域の方々と一緒に楽しんでほしい、という思いを込めてボランティア募集を行った背景もあり、雙峰祭というビックイベントを有効的に活用できたと思います。このような T-ACT 発のイベント等をきっかけにして、学生の皆さんが地域の活動を知り、ご自身の活動のフィールドを広げていってほしいと願っています。

また、このイベントを通して、地域団体の皆様と T-ACT のつながりが深いものになったと感じています。イベント開催後、新たに６団体より T-ACT ボランティア団体登録を行っていただきました。他にも、団体ご担当者様からのコメントとして、「雙峰祭でのコラボレーションは斬新なアイディアで楽しみながら出展できた」「学生と交流できてよかった」「次回以降もっと多くの学生の参加を望む。広報の工夫が必要」等と感想をいただき、今後の開催を期待する声がありました。

初の試みであり、広報や参加学生の確保など今後の課題もありますが、T-ACT 自身が「やってみたい」「やってみよう」の精神を忘れずに、様々な活動の機会を提供できるよう邁進して参ります。

●学生参加者：

活動の成果

会場設営、事前準備を無事に終えることができた。

今後の課題

準備する目的をスタッフ間で共有する必要性

〈フードパントリーボランティア募集！〉つくば子ども支援ネット (23018V)

受入団体名：つくば子ども支援ネット（23010G）

活動内容

第23回地域で子育てフードパントリーの準備と当日の 2日間のお手伝い。支援品の食材や日用品の運搬。

活動期間

2024年 2 月24日～2024年 2 月25日

参加学生

T-ACT ボランティア：2 人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

令和 6 年 2 月25日（日）開催の第23回地域で子育てフードパントリーの準備と当日の 2 日間、お手伝いをしていただきました。どちらも支援品の食材や日用品の運搬という力仕事が多く、若い力を求めていたので、今回ご協力いただけて、本当に助かりました。

フードパントリー当日には、利用者様たちは子連れの方が多かったので、重い荷物を車まで運んでいただくなど積極的にお手伝いしてくださり、大変感謝されました。

この活動には、いろいろな世代、いろいろな社会経験をされた方々が関わっているので、ボランティア活動を通じて、いろいろな方々と出会い、学生さん自身の知見も広げるきっかけにしていただけたら幸いです。

2023 年度　実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図 1 ）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援―学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生―」にある。学生支援 GP が終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

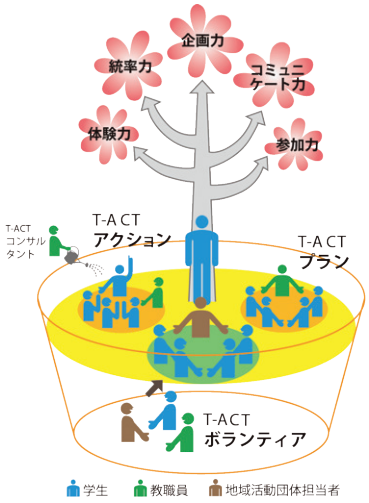


図 1　共創的コミュニティ形による T-ACT の展開と学生の成長

T-ACT には、学生が企画立案し展開する T-ACT アクション、教職員が企画立案し展開する T-ACT プラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をする T-ACT ボランティア（2012年度から開始）の 3 種類の活動がある。

T-ACT が支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティヴな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極的に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケート力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACT アクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2023年度に T-ACT 推進室で行われた支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2024年 3 月までに T-ACT フォーラムで把握できたものに限って過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は提出されるタイミングが様々であるため、今年度に行われた活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っているわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

1．T-ACT で申請された企画等の状況

2023年度の T-ACT アクション・プランの企画申請数は52件（アクション44件、プラン 8 件）であり、そのうち33件（アクション27件、プラン 6 件）が承認された（図 2 ）。また、2022年度までの累積承認企画数は1017件となった。2023年度に申請された企画におけるプランナーは49名（重複者を除く実数は44名）であり（図 3 ）、そのうち教職員のプランナーは 7 名であった。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数よりも多いのは、前年度に申請された企画が次年度に承認される等によって、年度の申請数と認められる企画数が異なってくるからである。学生オーガナイザーは135名（実数は113名）、教職員パートナーは40名（実数は34名）であった（図 4、図 5 ）。T-ACT ボランティアに登録されている団体数は29件であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は20件であった（図 6 ）。T-ACT ボランティアに参加したことでボランティア団体から報告があった筑波大学生の実数は93名であった（図 7 ）。

2023年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から2021年度より続いてきた課外活動の制限が完全に廃止となり、活動数及び T-ACT 推進室への来室者数も多少回復傾向が見られた。

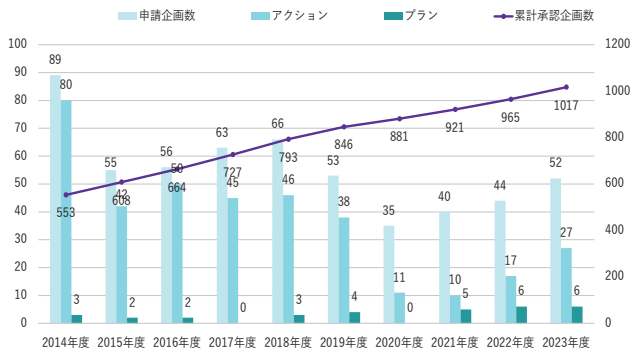


図 2　アクション・プランの企画承認数の変遷

図 3　プランナー数の変遷

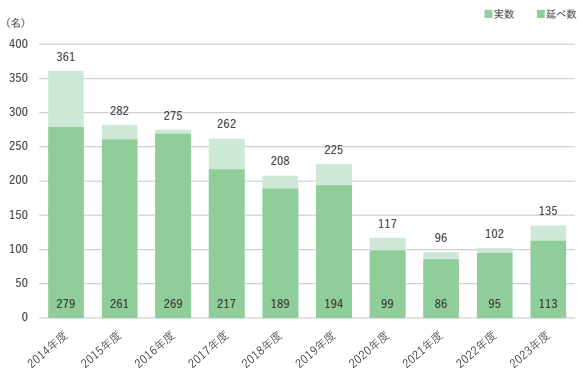


図４　学生オーガナイザー数の変遷

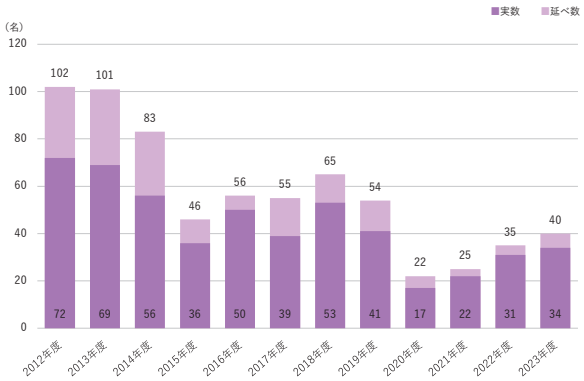


図５　教職員パートナー数の変遷

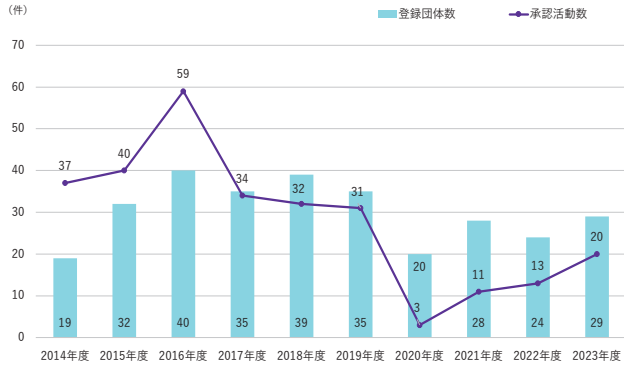


図６　T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

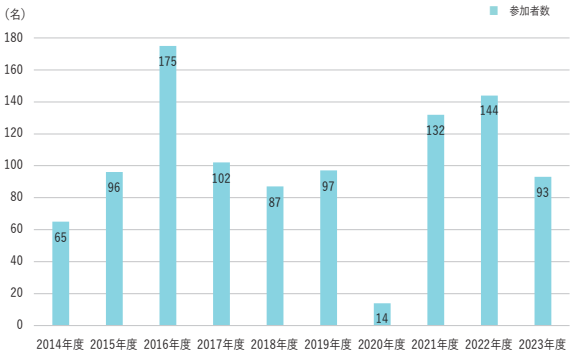


図７　T-ACT ボランティアに参加した学生数の変遷

T-ACT アクション・プランにおいては、新型コロナウイルス感染拡大予防による課外活動への制限が緩和され、5 月より完全に解除されたことによる変化が見られた。まず、対面で行われる活動が増加したが、コロナ禍ではオンラインで開催せざるを得なかった活動が対面で開催できたり、中断となってしまった活動が対面で再開できたりした動きがみられた。また、オンラインでの開催の良さを生かした活動もあり、内容や目的に合わせて開催形式が選択できることは T-ACT を用いた活動範囲を広げられたことに繋がったと評価できる。さらに、交流を求める活動やそれに関連する相談が多く、趣味や関心から学術的・国際的な交流を目的とした活動が実施された。特に、オンライン開催の強みを生かして、日本全国のみならず海外からの参加者との交流を目的とした活動が実施できたことは、T-ACT による活動の幅を広げられた点で意義があると評価できる。このことから、コロナ禍での活動制限下でできなかった人との交流を求めて自ら交流の場を作り上げる活動が見られたのではないかと考えられる。

T-ACT ボランティアは、長く活動されてきた団体が活動を止められたことも多くあるとボランティア団体や関係者からうかがったが、ボランティア利用者数及びボランティア登録団体数が減少したままになっている原因のひとつではないかと考えられる。一方、こういった状況下でも、活動再開に向けて積極的に動いているボランティア団体もあり、ポストコロナ時代に合わせた運営や活動を考えたいということで本学の学生との交流を求めて T-ACT 推進室に来室されたケースが多くみられた。登録された地域活動団体とその活動の特徴には、T-ACT アクション・プランと同じく、キャンプやイベント開催等といった対面で行われる活動に関する申請の増加がみられ、団体からも対面で直接的な交流ができる活動に対する関心と参加へのモチベーションが戻りつつあることを実感できた 1 年であった。まだ自ら活動を立案し進めることに迷いがあったり、自分の「やってみたい」を実現させるための経験を積んだりする場として、ボランティア活動が社会につながる場となることを期待している。

2024年度においては、以前のような活気を取り戻し、学生が「やってみたい」を実現させるために T-ACT が利用できるよう、T-ACT という枠組みを改めて学内に周知させることが課題であると考える。特に、コロナ禍で生活範囲が狭まり以前とは異なる生活を送られてきた学生に対して、再び生活範囲を広げ活気を取り戻して T-ACT につなげることは、今後の発展のための課題であり、学生を待つのではなく T-ACT が学生に出向いていくといった積極的なアプローチを行うことも必要な時期ではないかと考えられる。そこから、T-ACT アクション・プラン・ボランティア、それぞれの特性に合わせて学生が活動できる場となり、社会につながるよう働きかける工夫を検討することは、T-ACT の発展のみならず学生の成長のためにもより重要となるだろう。

2．T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図 8 に示した。2023年度は 4 月下旬より新型コロナウイルス感染防止のために行われた課外活動に対する制限が廃止となり主に対面で対応を行なったが、Web システムを用いた面談体制も残して対応している。T-ACT フォーラムの利用状況に関するデータは実際に来室した者と遠隔相談を行った者とを合わせて、利用者数として計上した。2023年度の延べ利用者数は576名であり、実利用者数は205名であった（図 8 ）。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図 9 に示した。T-ACT アクションの新規申請に関する相談などの利用（A 新規）が11%、T-ACT アクションの運営のための相談や作業といった利用（A 継続）が38%、T-ACT プランの利用（P 新規・P 継続）が3%、T-ACT ボランティアに関する学生からの相談（V 学生）が2%、T-ACT ボランティアに関する地域団体からの相談（V 団体）が6%、T-ACT サポーターの来室（サポーター）が8%、総合科目に関する利用（授業）が6%、その他の理由による学生の利用（その他（学生））が24%、その他の理由による教職員の利用（その他（教職員））が2% であった。

ここで、実利用者数が延べ利用者数の半数に近い数であることは、T-ACT フォーラムを居場所として利用する学生の存在があげられる。プランナー及びオーガナイザーとして T-ACT を利用した学生が継続して T-ACT フォーラムを利用し、はじめて来室した学生をサポートするといった T-ACT サポーターとしての機能が自然に行われる中で、利用者間の交流やネットワーク作りをはじめ、新たな「やってみたい」のアイディアが生まれる等、T-ACT がフォーラムとして機能することができた 1 年だったと評価できる。このような状況は、利用目的の割合のうち、新規での利用学生より継続での利用及びサポーターの利用の割合が大きいことからも確認できる。その他活動企画の増加や対面授業の再開の影響もあり、物品の貸し出しや印刷機の使用、活動に関する相談等で T-ACT フォーラムを利用される割合も増加した。今後もこういったフォーラムとしての機能がより活発に行われるよう、学内外に向けて T-ACT の役割と機能をアピールする活動を積極的に行い、心地よく利用できる場づくりにすることが重要であろう。

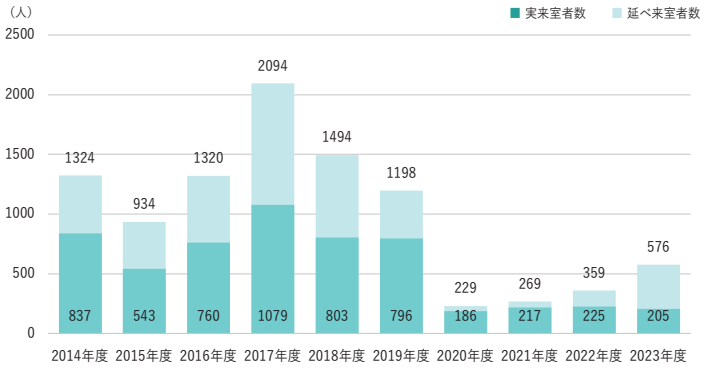


図 8　T-ACT フォーラム来室者数の変遷

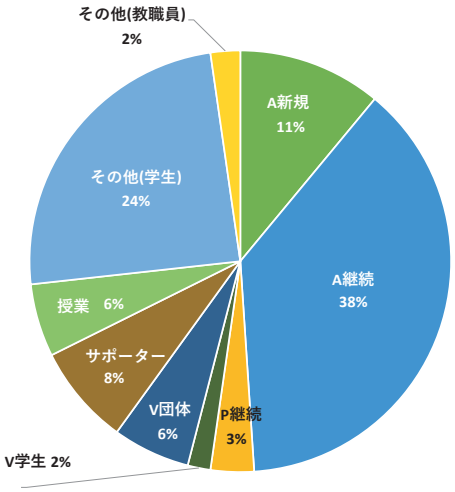


図 9　T-ACT フォーラム利用目的

3．T-ACT による人間力の成長

T-ACT アクション・プランの利用者の活動終了後、人間力の成長に関する調査を Web アンケートで行っている。参加力、体験力、コミュニケート力、統率力、企画力の 5 つを人間力の指標として想定し、それに加えて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている（表 1 ）。

調査対象は T-ACT アクション・プランの活動を終えた学生もしくは教職員であった。活動中に表 1 の質問項目をどの程度感じたかを 4 件法で尋ねた。2023年度の調査対象は39名であり、そのうちプランナーが15名、オーガナイザーが18名、パーティシパント 5 名であった。なお、パーティシパントは 5 名であったため、パーティシパントのみの回答状況は示さないこととした。

全体の回答状況をみると、「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が80% を超えており、T-ACT への参加によって人間力の成長や自己理解の深まりが得られた学生が多いことを示している。T-ACT による人間力の成長の変化については、例年の傾向からオーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりが得られている傾向があることから、2023年度の結果からも各項目ともに高い数値が見られていた。プランナーといった、企画においてより重要な役職にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができることは、体験型の学習機会を提供している T-ACT ならではの特徴であると言える。各人間力を見てみると、より高次の力であると定義されている統率力、企画力といった能力の方が、多少達成が難しい傾向にあることも想定通りの結果である。より高次と考えられている人間力についても、T-ACT に参加して役割をステップアップしていくことで、徐々に達成できるようになると言えるであろう。こういった結果は、

毎年の活動報告からも確認できる。

本調査の課題については、回答数の少なさがあげられる。プランナーの場合、参加した学生にコンサルタントが個別に協力を依頼しているが、漏れがあったり活動が終了してから多少期間が経過してから依頼したりすることもあり、回答率が伸びない結果につながっている。さらに、オーガナイザー及びパーティシパントの場合は、プランナーを通じて依頼する場合が多く、プランナーより人数が多いにもかかわらず回答数が少ないことも事実である。また、現在は T-ACT アクション・プランのみに回答を求めているが、活動後の変化や成長などを振り返ることができるように、T-ACT ボランティアへの参加者にも何らかのアンケートを行い、T-ACT ボランティアの効果も評価することが良いのではないかと考えられる。

表 1　人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた 活動に積極的に関わることができた 活動の実行に貢献することができた 活動にできるだけ多く参加できた 互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた 活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた 活動を通して、喜怒哀楽を感じることができた 活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた いろいろな出来事を見聞きできた 活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケート力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた 他のメンバーと積極的に関わることができた 自分の気持ちを伝えることができた 他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた 孤立したメンバーがいないかどうか注意を払うことができた 指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた 活動の目的、あるいは目標を達成させることができた リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた 活動を実現するために適切な計画を立てられた 活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた ある程度計画通りに活動を遂行できた 活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

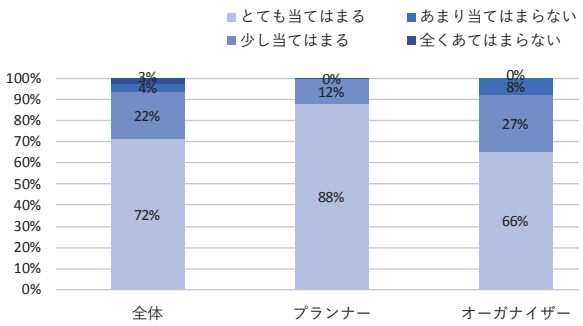


図10　T-ACT 参加時のプランナーの成長

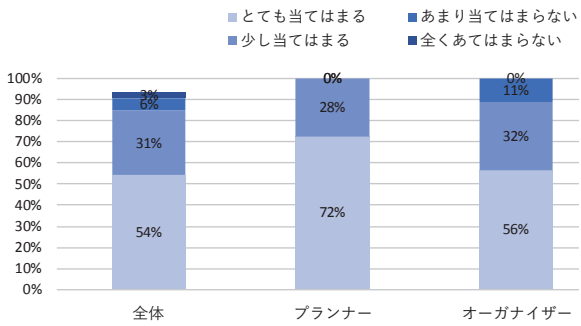


図11　T-ACT 参加時の役割と体験力の成長

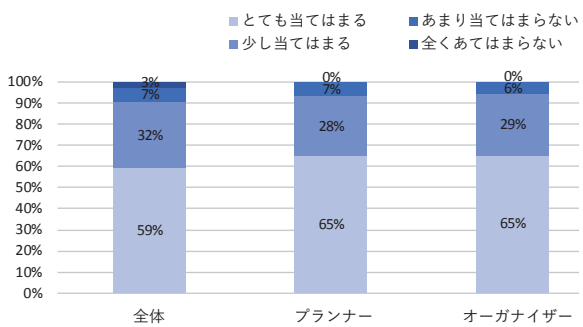


図12　T-ACT 参加時の役割とコミュニケート力の成長

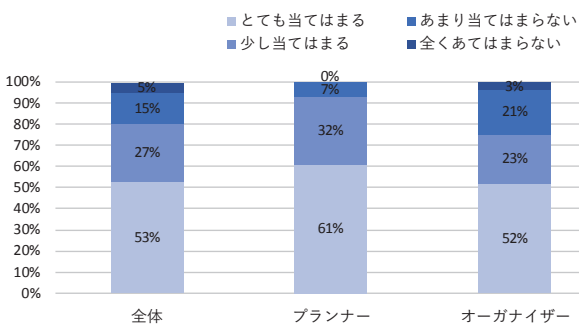


図13　T-ACT 参加時の役割と統率力の成長

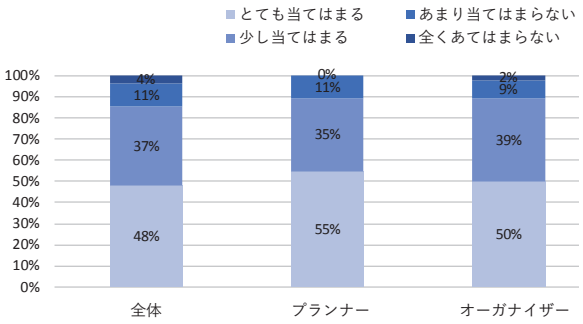


図14　T-ACT 参加時の役割と企画力の成長

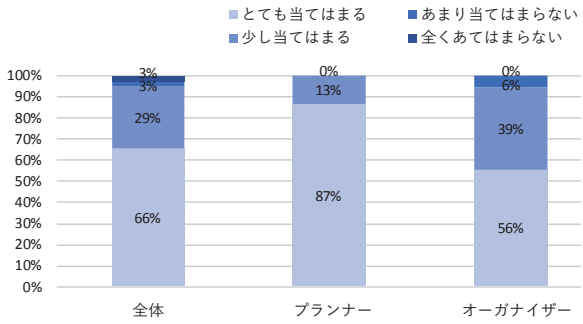


図15　T-ACT 参加時の役割と自己理解の深まり

4．公開シンポジウムの開催

T-ACT ファオーラムでは、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するために、学内外に向けて学生の活動と T-ACT の成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にも T-ACT の支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。2023年度は新型コロナウイルス感染予防対策に伴う活動制限が解除され、ハイブリッド形式で開催した。

○開催概要

日時：2023年12月14日（金）17:00～20:00
場所：1D 棟201講義室及びオンライン（Zoom）によるハイブリッド開催

○当日の様子

2023年度の公開シンポジウムは『“やってみたい”が地域社会へつながる―T-ACT ボランティアと地域課題―」というテーマのもとで開催した。本学大学生および教職員、そして地域活動団体の関係者を中心とした広く一般の来場者などあわせて計110名が参加した。

本間三和子副学長（学生担当）の開会挨拶から始まり、第 1 部では T-ACT コンサルタントによる T-ACT 制度の紹介の後、筑波大学人間系 教授であり T-ACT 推進室員でもある唐木清志先生から「地域社会貢献活動としての T-ACT ―教育的な意義について―」という題目でご講演いただき、続いて、つくば市 周辺市街地振興課課長 吉岡誠生氏から「つくば市周辺市街地の地域振興―多様な人材が活躍する地域づくり―」という題目でご講演いただいた。そして最後に T-ACT アクション活動をしている学生 3 名から本シンポジウムのテーマに関連する実際の活動例をご紹介いただいた（活動例①：【23008A】「盆 LIVE」プロジェクト再始動！［駒野樹（人間総合科学学術院教育学学位プログラム修士 2 年）、活動例②：【23009A】Medical Map for Foreigners［相馬淳乃

（看護学類３年）］、体験例③【23016A】障害者スポーツを通じてSDGsをもっと身近に～その２～［天野隼太（比較文化学類４年）］）。

第２部では、パネルディスカッションが行われ、第１部でご講演いただいた講師及び学生、そしてT-ACT推進室員が「地域課題の解決に向けたT-ACTのポテンシャル」と題し、T-ACTを通じた地域社会との関わりについて質疑や意見交換が積極的に行われ、活動の持続可能性や双方向的な連携等といった幅広い議論が行われた。

ポストコロナにおいては、新しい考え方や生活様式への転換が求められているとともに、新たな社会の課題やニーズに対して従来の枠組みに囚われない柔軟な対応が求められている。コロナ禍で活動が制限され、学生のキャンパスライフにも多大な影響があったが、地域活動団体は長く継続してきた活動を断念してしまうことも多くあったという。その中で、学生との交流を通じて活動を再開させようという思いからT-ACTへの期待や要望が多く届いている。こういった地域課題に対する地域活動団体の活動に学生が参加する中で一緒に解決策を模索していくことができるよう、T-ACTの機能と役割について理解を深めることができたシンポジウムとなった。

５．活動報告会および企画表彰

2023年度の活動報告会は、2022年度下半期から2023年度上半期に行われた活動を対象に実施された[i]。昨年度に引き続き、新入生を中心にT-ACTのことを周知させる目的を兼ねて「T-ACT Welcome Fest 2023―つくばアクションプロジェクト新入生歓迎会・活動報告会―」を、６月14日（水）（18:00～20:00）に筑波大学総合研究棟B112講義室にて開催した。３年ぶりに完全に対面で開催することができ、本学大学生57名、本学教職員21名、学外参加者18名の計96名が参加した。

2023年度を中心に活動を行ったT-ACTアクション（学生中心の活動）９件と、T-ACTプラン（教職員中心の活動）１件及びT-ACTボランティア（地域団体中心の活動）１件、計11件の活動報告が行われた。また、ポスター発表を兼ねた情報交換会・交流会では、参加者間で気軽な交流ができる時間を設けた。学生や教職員だけでなく、地域団体の方や他大学の教職員が参加され、発表を行った学生と参加者間とで積極的な質疑応答や交流が行われた。

T-ACTアクション・プランへの表彰（活動奨励を目的に、参加者の人間力をより高めたと評価される企画への賞の授与）は、例年行っていた評価を行わず、活動報告会に参加して発表された企画をノミネート企画とし、活動報告会来場者の投票によって決定した。また、ボランティア活動の報告を行った学生にはT-ACT推進室からの表彰を行った。他にも、T-ACTで活動する学生へのご支援を下さった教職員へグッド・パートナー賞を、学生への教育的な配慮を行っていただいたボランティア登録団体へ感謝状を贈呈した。これらの表彰式や感謝状贈呈について、表２～４にまとめた。

---

i　2023年度下半期に行われた活動の一部は、2024年７月に開催した活動報告会で企画発表を行ったが、次年度報告書で報告・掲載とする。

表 2　2023年度に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
最優秀賞	22022A	世界の食文化に触れてみよう会
プレゼンテーション優秀賞	22012A	匿名 note―筑波大学交流ノート―
	22017A	Yarn Bombing in Tsukuba
ポスター優秀賞	21016A・22006A	筑波大吃音会 ―ツクスター・筑波大吃音会 ―ツクスター v2
	22020A	妖怪ワークショップ～人面犬張り子を作ろう！～ @現代怪異のふるさとつくば
奨励賞	21007A	BLUE ONE BEAT! ～スポーツを通して SDGs をもっと身近に～
	22018A	読書。そして海を越え。
	22019A	MIST PROJECT（ミストプロジェクト）
	22024A	新編入生お助け隊！！～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～
	22005P	サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！2nd ステージ Pass the soccer ball and interact with everyone! 2nd Stage
	22009P	KickChat FC 主催　ウェビナー「スポーツ×グローバルの視点で『今』-2023年 - を語り合おう
T-ACT フォーラム賞	22024A	新編入生お助け隊！！～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～

表 3　2023年度に表彰されたボランティア参加者

T-ACT 推進室長表彰	19030V	茨城 YMCA でのボランティア体験！ （2018年度～22年度までの活動の紹介）　参加学生 1 名
	21009V	令和 4 年度茨城県警察大学生サポーター募集について 参加学生 1 名

表 4　2023年度グッド・パートナー賞・ボランティア感謝状

グッド・パートナー賞	綾部　早穂　教授 （人間系）	22019A　MIST PROJECT（ミストプロジェクト）
	登　大遊　客員教授 （国際産学連携本部）	22022A　世界の食文化に触れてみよう会
ボランティア感謝状	茨城 YMCA	19030V　茨城 YMCA でのボランティア体験！
	茨城県警察少年サポートセンター	21009V　令和 4 年度茨城県警察大学生サポーター募集について

編集後記

2023 年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防に伴う活動制限が 5 月より完全に解除され、学生からの相談や活動の数も増え始め、T-ACT フォーラム利用者数も増えつつあった一年でした。2023 年度の活動を振り返って印象に残ったことは、①社会的マイノリティへの関心や SDGs を意識した活動が多くみられたことと、②コロナ禍で中止となった活動の再開とオンラインから対面へ開催方法を切り替えた活動実施、の二つをあげたいです。

例年どおりに、交流を目的とした講演会やワークショップ等のイベント企画の相談・申請が多く見られました。具体的な内容は趣味や関心だけではなく、社会的なマイノリティや SDGs を意識した社会課題や大学生活の中で感じる疑問や不便に対処したいという気持ちからスタートされた活動が多くみられ、問題意識をもって自らアクションを起こす学生たちをみて、自分自身も刺激を受けた一年でした。また、コロナ禍で中止となってしまった活動が再開できたり、対面で開催することで生まれる交流を求めてオンラインから対面へ開催方法を変えて行ったりして、ポストコロナに向けての変化を実感した一年でした。また、大学入学と共に T-ACT 活動をされていた学生が卒業を迎え、卒業と一緒に活動が終了となってしまった企画もありました。T-ACT サポーターの中でもコロナ以前から積極的に T-ACT のことを支えてくれた学生が卒業することになり、T-ACT を居場所に活躍した学生が少なってしまいました。しかし、このような変化を後ろ向きに見るのではなく、ポストコロナ時代に合わせて T-ACT も変わらないといけない時期が来ていることから、より多くの学生に T-ACT の存在を伝えることと、学生たちが自分の「やってみたい」を活かして活躍できるよう、これからも尽力してサポートしたいと思います。

最後に、昨年度にはポストコロナに向けて地域を支えているボランティア団体と学生の活動を再び活性化させる思いから、つくば市社会福祉協議会の皆様と一緒に雙峰祭の場を借りて「T-ACT ×つくばボランティアフェスタ」を開催しました。多くの地域活動団体の皆様からの協力と、運営スタッフとしてご協力いただいた学生の存在がいたおかげで無事に開催することができました。これを機により多くの学生が地域社会に繋がりきっかけとなればという思いで、これからも T-ACT スタッフや T-ACT 推進室員がひとつになって学生の皆さんの活動をサポートしていきたいと思います。

T-ACT コンサルタント
李　健實

「皆さん、パワーがすごいな !!」

私が T-ACT に着任し、ボランティア団体の方にお会いした時の印象です。団体活動をされている皆さんは、生き生きとしていて活気に溢れ、お忙しいなかでも楽しみながら活動をしていて素敵だなと思いました。ボランティアや地域活動を通して人とのコミュニケーションや協働を行っていると、おのずと笑顔が生まれ、ワクワクした空気感が生まれていくような気がします。

そのようなワクワクを学生の皆さんにも体感していただけるように、T-ACT では課外活動の楽しさや素晴らしさを伝えていければと思います。

その経験が人生の更なるステップアップに繋がることでしょう。その一端を私たちが担えるよう尽くしてまいります。

T-ACT ボランティア担当職員
瀬尾　純子

2023 年度 T-ACT 推進室員一覧

	氏　名	所　属	職　名
室長	加賀　信広	人文社会系	教授
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室員	江口　真規	人文社会系	助教
	茅根　由佳	人文社会系	助教
	小林　幹佳	生命環境系	准教授
	中内　　靖	システム情報系	教授
	後藤　嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	村田　知弥	医学医療系	助教
	大林　太朗	体育系	助教
	川島　史也	芸術系	助教
	水野　雅之	人間系	准教授
	青柳　悦子	人文社会系	教授
	土井　裕人	人文社会系	助教
	唐木　清志	人間系	教授
	慶野　遥香	人間系	助教
	李　　健實	T-ACT 専任教員	助教
	鷹巣　明美	学生生活	課長

2024 年度 T-ACT 推進室員一覧

	氏　名	所　属	職　名
室長	本間三和子		副学長（学生担当）
副室長	加賀　信広		特命教授
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室員	土井　裕人	人文社会系	助教
	葛山　泰央	人文社会系	講師
	角替　敏昭	生命環境系	教授
	梅本　通孝	システム情報系	准教授
	後藤　嘉宏	図書館情報メディア系	教授
	尾花　　望	医学医療系	助教
	澤江　幸則	体育系	准教授
	川島　史也	芸術系	助教
	水野　雅之	人間系	准教授
	唐木　清志	人間系	教授
	慶野　遥香	人間系	助教
	北原　祐理	人間系	助教
	李　　健實	T-ACT 専任教員	助教
	小野　健一	学生生活	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2024 年 10 月発行

筑波大学　T-ACT 推進室

〒 305-8577　つくば市天王台 1-1-1

TEL　029（853）2222

2024年発行